
慟哭の夕絢

水無雲夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慟哭の夕緋

【Zコード】

Z5435V

【作者名】

水無雲夜斗

【あらすじ】

都市伝説や七不思議が多く存在する不思議な街、そこに住んでいる「ぐく一般であるはずの不良高校生『碓氷夕夜』は、ある日夕緋と名乗る少女と出会い、彼女との出会いによって碓氷のぐく平凡な日常は壊されて行き

7人の製作スタッフが描く現代バトルラブコメディものリレー小説
がついに登場！

放課後の黄昏（前書き）

みなさんお待たせいたしました！

長いことやるやる言い続けてやるやる詐欺シリーズになりかけていたリレー小説第一段ついいにゅうです！

ルールや詳細については活動報告の方で説明しているのでそれらを参照していただけるとよりお楽しみいただけると思います。
では、今回は丸樽さん^{まるたん}の描く序章からスタートです！

放課後の黄昏

起きたら放課後だつた。

教室は夕日の赤に染まり、いい感じに青春感を演出していく、今まさに教室の扉を開けて告白シーンが始まるのではと期待感を上げてくれる。

だが、そんな演出過多な教室には起きたばかりでまだ眠いのか切れ長な眼を手で擦り、ボーッと空中を見ている男子高校生、碓氷夕夜ただ一人だけだった。

碓氷はしばらくそのまま机に座つたまま、覚醒していない頭を働かせ周りを確認し備え付けの大きな時計を見る。

時刻はただいま、十八時三十分前。

どうやら、五時間目の後半から今まで誰にも起こされることなく眠り続けていたようで、十九時が完全下校時刻のこの学校ではまだ余裕があるが結構危ない時間だと言える。

碓氷は何でこんな時間帯になるまで誰も起こしてくれないんだよと一人毒つく。

本当は起きない碓氷を教師含めクラス一同が何度も起こしてあげていたのだがそれに一切反応しなかつたため、呆れ果ててしまつた皆が碓氷をそのままにして帰つていき今の状況になつてしまつたのだった。

そんなことを知らない碓氷は不機嫌顔のまま、机の横に置いてある鞄を取り椅子から立ち上がり教室を足早く出る。

廊下は日が落ちてきたためか、教室よりは少し薄暗い。

その廊下を歩きながら、寝ている間にメールや着信は着ていなかを確認する。

着信はないようだが、結構の数のメールが着ているようでそれを一つ一つ読んでいく。大半が、お前まだ寝てんのかよと言つたからかいのメールであり、辟易しながらメールを読み進め最後の一通。

『碓氷くん、今日は貸してた本の返却日なので起きたら図書室に来てください』

クラスメイトの図書委員からのメールの通りで、すぐさま鞄の中の本を取り出し携帯の時計を見る。

「ヤベえ……」

完全下校時間まで、あと十五分。

図書室に行つて本を返していくは完全に間に合わない。そもそもこんなメールを送るぐらいなら寝ている自分を起こして用件を言つてくれればいいじゃないかとか事前に教えておいてもらえば今日の休み時間に返せてたじやんと自分勝手な言い訳を頭の中で考える。

しかし、本来なら借りたときに返却日を教えてもらつていながら忘れていたことと昨日あたりにそのことにひりひりしていたことを思い出す。

そして、未だに来ない自分をずっと図書室で待つてはと心配になる。

足を玄関ではなく図書室に向けて歩くのではなくダッシュで廊下を駆けて行く。

結果を言つと、さつきの心配は杞憂に終わった。

図書委員の女子はもう既に帰った後で、カウンターにさびしく自分宛で、本は元あつた場所に返して置いてくださいと書いてあるノートの切れ端がセロハンテープで留めてあるだけだった。

碓氷はここまで走った体力を返せよと先程剥がした張り紙を床に叩きつけようとして、踏み止まる。

自分が遅れたのもあるのでこれでイーブンだ。

手に持つていた紙を近くにあるゴミ箱にシューとさせて、返す本のある本棚に向かつ。

この学校の図書室はそこまで広いものではなく、普通の高校の理科室とかそちらの大きさだ。なので、蔵書も多くはなく。あるのは、専門的な誰も読んだことないんじゃないかと思うような薄汚れた本、

今と昔に流行っていた本しか置いていない。

そして、今回借りたの本は友達に薦められた今、若者に流行の本である。内容はどこにでもあるようなものなので特に感想もない。そのまま、流行ものを扱っている本棚の元あつた場所に返そうとしたところだ。

「ねえ、その本返すの？」

と言う声が聞こえてくる。

放課後のしかも完全下校時間ギリギリでもう生徒は自分だけだと思っていたので驚きながら振り返る。

そこには、学校指定の制服を着用し髪を今時小学生にもいよいような三つ編おさげの眼鏡少女がいた。正直狙つてんじやないかと疑いたくなる。

三つ編……全滅してなかつたんだ。しばし呆然とその三つ編を見つめるけどどうやら自分の声が届いていなかつたと考えたのか、

「あの、その本返すの？」

もう一度訊ねてくる。それに少し慌てながらも返答する。

「あっ、えと、返すよ」

手に持つていた本を彼女に見せやすいように掲げる。

「そ、そななんだ。ええと、その本返すなら私が読んでもいいかな？」

「ん？ この本をか。別にいいけど、図書委員いないぜ？」

「うん、別にいいの。ここで読んでいくから」

「はあ？」

彼女は何を言つているのだろう。時間はもう完全下校時間ギリギリであり本は無駄に四百ある長編物だ、ここで読んでいたら完全下校時間どころか学校で夜を明かすことになる。それなのに彼女はさらに続ける。

「あ、その、違うの。わ、私図書委員だから勝手に借つること出来るの。そ、それにここに戸締りとかしないとだから」

一気に捲くし立てて説明する眼鏡少女。だが、本来図書委員は自

分のクラスのすでに帰った女子のみで、ここは図書室は完全下校時間が過ぎた後に先生が閉めることになっている。

怪しい。ものすごく怪しいのだが、碓氷はそのまま何らかの事情があるんだろうと無理やりに理解して。

「そうなのか、ならこれはお前に渡すよ」

お前と言つのは少々失礼な氣がするが、そもそも名前を知らないのでしようがない。

本を手渡して渡して、速攻で図書室を退出するためドアを開け廊下に一步踏み込んだ所で。

「ありがとう」

聞くだけで表情が分かるような声を聞き、少し照れくさく片手を挙げて呟く。

「……じゃあな」

「うん、またね」

その言葉を交わし終えたところで、完全に廊下に出て玄関を指す。

結局、名前を聞きそびれたな……、と自分の不甲斐なさを思つが。結構変な子だつたしこれ以降は関わらないだろうと結論付け、携帯の時計を確認する。

現在時刻、十九時六分。

完全にアウトになつてしまつてゐるようだ、急いで校門を指す。廊下を走る最中、わざわざ眼鏡少女を思い浮かべるが、そのまま止まらず走り続けた。

結局、門を閉めようとしない先生に偶然出会いお小言を少しひつてから、もうすでに暗くなつてしまつた帰路に就くのだった。

放課後の黄昏（後書き）

毎回メンバー変わつていくので文章や視点がちょっと違つたりしますがその辺についてはご了承ください。

次：伝説の始まり（からあげ）『水無雲夜斗』

この小説は一週間に一度の定期更新となつております。

口常かりの脱線 1（前書き）

今回は僕こと水無雲夜斗の出番です。

眠い・・・。

午前の授業、3時間目。机に突つ伏してぐでぐとしながら授業を受けている少年『碓氷夕夜』がこの授業に対し抱いた感想は、ただ眠いということだけだ。もしこの授業について感想文を書けと言われても『眠い』の2文字だけで終わらせる自信もある。

しーんと静まり返った教室に、ゴリラのような体格をした男性教師の声が響き渡る。時々意味不明な言葉を放つているところから推測するに、どうやら今は英語の授業をやっているらしい。

カツカツとチョークが黒板を叩く音が心地よい。この音が碓氷を更なる眠りへと誘う。

正直こんな中で顔を上げて必至にノートを移していくやつらの気がしれない。別に碓氷は睡眠不足というわけではなく、高校生として必要な睡眠時間である約7時間はどうぶり眠つてから登校しているはずなのだが、それでも眠い。

これは一種の睡眠薬だ、と碓氷は思う。例えるなら、電車に乗っていると、その振動と音のせいどんどん眠気が浮き出てくるのと同じような感覚だ。

あれは科学的に証明されているため、納得せざるを得ないが、授業中に眠くなる現象についてはまだ科学的に解明されてはいない。いつそ眠くなるやつと眠くならないやつの違いを研究して、そこから寝ないように工夫した授業をできるよう教職員達を再教育した方がいいのでは。と碓氷は思ったが、単純に考えてみると寝るやつと寝ないやつの違いなんて『集中力の差』の一言で証明できてしまうので、教職員の再教育はあまり効果がないだろうと碓氷は結論付ける。

と、そんなくだらないことを考えている間に、彼の眠気は既にピークを迎えていた。おそらくここで起き上がりても授業に

集中することはできないだれつと判断した碓氷は、やつくつとそのまどろみに身を任せた。

「碓氷くん、うつすいくんつてばー！」

ようとした時だつた。突然横合にから小さな声を掛けられ

た。
気だるい体を強引に起こし、声がした方を見ると、そこにいたのは力チュー・シャをつけるような位置にリボンをつけて、頭を装飾したクラスメイトがいた。

彼女の名前は『逢瀬優夏』あいせゆか。

クラスの中ではどちらかといつと優等生に分類される彼女だが、今までに眠りうととしている不良生徒を叩き起しすような委員長タイプの人間ではない。つまりこので湧いてくる疑問は、何故自分は起これたのか、ということだ。

碓氷は眠気を紛らわすために頭をボリボリと搔いて、

「何だ、こんな授業中に誰かと思えば逢瀬か・・・」

「うわー、わー、授業中にも関わらず寝ようとしていた不良生徒に言われたくないセリフベスト3に入るようなこと言っちゃったよこの人！ 大体私は碓氷君の内心点が下がらないようこ気を遣つて起こしてあげたのにその言い方はちょっとひどいんじゃない？」
「お気遣いどうも。つかお前がそんな理由で俺を起こすわけないだろ、何がお望みだ？」

「おー、さつすが碓氷君。中学の頃から付き合つてるだけあって私のことよくわかってるね、それでこそマイダーリンといつものだよ」

「付き合つてはいるが交際してゐつて意味で付き合つた覚えはない

い

「そんなこと言つちゃつてほんとはうれしいくせに、こんなにかわいい彼女日本中探しまわつてもそういうのこのこの。しかもそんな子が隣の席だなんて日本中の童貞に追い回されてもおかしくない状況だよ！」

「

まるでマシンガンのようになに言葉を繰り出す逢瀬。

対し碓氷は面倒臭そうな表情を浮かべて、

「・・・いいからさつさと要件を言つたらどうだ？」

「おおつとそつた」逢瀬はコホン、と一つ咳払いをして、「

碓氷君つてさ、都市伝説とかは信じる派？」

「何とも唐突だなおい、つかそれ授業中にするよつな話か？」

「まあまあいいから答えたまえよ碓氷クン

と、にこにこ笑顔で促す逢瀬。

碓氷は一つため息を吐くと、少し考えるよつな仕草をして、

「どつちかつつーと信じない派だな」

「おお、これは珍しい。この不思議が溢れた街の中に都市伝説の類を信じない人間がいるとは。もしかして碓氷君つて相当ひねくれてる？」

都市伝説を信じないと言つただけで何故にひねくれ者扱い？ と思つたが、口には出さず心の中に留めておく碓氷。

そんな碓氷の心情を知らない逢瀬は、楽しそうな調子で続ける。

「まあ信じる信じないは別としてさ、今この学校である都市伝説が流行つてるんだ、その名も『放課後、図書室に現れる謎の少女』！」

「・・・それつてこの学校限定だから都市伝説じゃなくて七不思議に分類されるんじやね？」

「おお、言われてみれば。流石碓氷君！ そここに気付くとは私のダーリンなだけはあるね、じつにじつがある度に惚れ直しちゃう仕様？」

いやだからダーリンじやねえから、とツツコミを入れる碓氷。

逢瀬はそれを無視して続ける。

「この際都市伝説が七不思議かどうかは別としてさ、最近いるんだよ。放課後、図書室に行くとこの学校の制服を着た女生徒が。でもね、不思議と彼女を知ってる生徒はいないんだ。前に3年生がグループで似顔絵まで描いて聞き込み調査を行つたんだけどね、知つ

てる人は誰一人としていなかつたんだって」

「そういやなんかやつてたな、似顔絵がアニメっぽい描き方だつたからよくわからなかつたけどさ」

「おや、碓氷君もやはりあの聞き込み調査の被害者だつたんだ。と、それは置いておいて、どうどう？　この都市伝説碓氷君的にはどう思う…？」

「所詮は都市伝説だろくつだんねえ」

と、適当に吐き捨てるど、逢瀬は『あらら、この話題は碓氷君向けのものではなかつたかな？』などと呟いて勝手に授業に戻る。碓氷も碓氷で再び眠ろうかと思つたが、そこでふとあることを思い出した。

昨日の放課後、借りた本を返しに図書室まで行つた時に出会つた三つ編の少女。あの時の少女がそうなのではないかと。

（まさか、な・・・）

確認のために脳内での時の似顔絵と昨日の少女の特徴を照らし合わせようとしたが、どうも似顔絵の方が思い出せない。興味がなかつた故にほとんど見ていなかつたのと、あれから数日経つているためか思い出せなくなつてしまつたらしい。

思い出せないのなら仕方ない、と碓氷は思考を停止し、小腹が空いたので適当に教科書類を積み上げて机の上の物が見えないようにすると、鞄の中からコンビニ弁当をすばやく取り出し、蓋を開け、割り箸でからあげを一つ摘まむと、それをそのまま口に運ぶ。

口をもぐもぐと動かしながら、ふと窓の外を見る。

それにもしても、あの少女は一体何だつたのだろうか。自らを図書委員と称していたが、今になつて思い返せばそんな風には見えなかつたし、図書委員が全員帰つたというのに一人だけ残つて閉館時間ギリギリまで本を読み続けようとしたのも気になる。

そもそも、この学校の委員会の類は必ず二人以上のグループで動くのが基本だ。それなのにあの少女だけが図書室に残つて一人で仕事をこなしていた、というのはどこかひつかかる。

やはり、あの少女は噂の都市伝説——（もとい七不思議？）に出てくる少女そのものなのだろうか。それともいろいろ事情があつて偶然一人で残っていたただの図書委員だったのだろうか？

「碓氷くん？ おーい、うつすいくん」

などと考え方をしていると、再び横合いから小さく声が投げられる。もちろん声の主は先程まで都市伝説についてアツく語っていた逢瀬だ。

碓氷はうんざりとした表情を浮かべると、

「今度は何だよ、この学校に古くから伝わる七不思議の一つ、誰もいない音楽室から鳴り響くピアノみたいな話でも始まんのか？」
言いつつ、視線をそちらに向けると何か白いものがあった。よく見るとその白いものは纖維のよつたものでできいて、なにやらゴシゴシとしたものが下から浮き出ているようにも見える。

ゆつくつと、顔を上げるとそこにあつたのはやはりゴシゴシとしたゴリラのような顔（無駄に笑顔を浮かべているところが余計に怖い）。

白シャツにゴコロのよつた筋肉質。その見た目から『お前どいつ考えても英語じゃなくて体育の教師だろ！』とツッコミを入れたくなつてしまつが、ツッコんだ者が辿る末路は大体同じだ。

ちなみに、碓氷はこの学校で最初にツッコんだ生徒で、さらに不良なためか、この教師にはよくお世話になつてている。

だから、この後自分がどういう末路を辿るのか大体予想が着いていた碓氷は、ただ無言で滝のよつた汗を全身から垂れ流し、そして心の中でこう呟いた。

（あばよ俺のコンビニ弁当。カラアゲ、うまかつたぜ・・・。）

その後、ゴリラ教師にショッピカれてどこかに消えた碓氷は放課後になつてやつと教室に戻ってきたが、空白の時間に何があつたのかを知る者はいない。

日常からの脱線 1（後書き）

ルールの一人一キャラ縛りはかなりキツいですね。
最近はかなりキャラも増えてきてかなり楽ですがこの頃はもう・・・
w

次回：ロワーラ（21）どうしてこうなった・・・ロワ
次は白川先生と神無月先生の番です。

口算からの脱線 2（前書き）

今回はちょっと特殊な事情により3番手の白川さんの分と4番手神無円さんの分を繋げて投稿しかやつてます。

「ふう・・・。散々な目にあつた・・・」

教室に戻ってきた碓氷はそのまま机に崩れ落ちた。

「うつすいく〜ん。かつえつろつ！」

そんな碓氷の状態を特に気にかける様子もなく逢瀬は碓氷に話しかける。

「・・・なんでだよ。友人はどうした？」

「たまには碓氷君と一緒に帰ろうと思つて」

その態度に碓氷は不機嫌を隠す様子もなく尋ねるが逢瀬は気にした風もなく返した。

答えになつてないと思いながらもそれを言葉にせず、新たに浮かんだ疑問を口にする。

「・・・そんなに暇してるとか？」

「まあそんな所。いいから帰ろつ！」

逢瀬が少し不機嫌になつたが自分には関係ないと判断した碓氷は鞄を掴みそのまま教室を出た。その後には当然のように逢瀬がついて来たわけだが。

逢瀬の話を聞き流しながら碓氷は昨日の事を思い出していた。

(やはりあれはおかしいよなあ・・・。つつても逢瀬に話すわけにもいかないしな・・・。)

やけに楽しそうに何かを話す逢瀬を横目で見て小さくため息をつく。

(どうしたもんかなあ・・・。・・・ん?)

このもやもやをどうしたものかと考えていた碓氷は通りかかった林の中からこちらを覗く少女を見つけた。

(あの娘・・・あんなところで何を?)

立ち止まってよく見ようと顔を向けると少女は既にいなくなつて

いた。

「ん？ 碓氷くん、どうしたの？」

急に立ち止まつた碓氷に気づいた逢瀬が振り返り尋ねると碓氷は既に走り出していた。

「すまん、逢瀬。先帰つてくれ。」

碓氷はそう言い残して林へ向かつて駆けていった。

「え？ あ、ちょっと！ ……どうしたんだろう？」

自分でも何故追いかけているのかわからぬいが、碓氷は彼女を追いかけないといけない気がしていた。

「ハア・・・ハア・・・・・・・いた！」

少女は林の中でも特に大きな樹の前で立ち止まっていた。

「君・・・。」

「・・・夕緋。」

碓氷が話しかけるのを遮り少女が咳く。

「は・・・・？」

「・・・名前。・・・夕緋。」

碓氷が意味もわからず声を上げると少女・夕緋が自分の名前だと告げる。

「え？ あ、ああ。俺は碓氷夕夜だ。」

「・・・夕夜。・・・待つてた。」

碓氷が名乗ると少女は碓氷の名を囁み締めるように何度も咳いた後、碓氷を見つめてそう言った。

(・・・今なんて言った？ 待つていた・・・？ 俺をつて事か？ 何故・・・？)

夕緋は碓氷をただ見つめているだけだった。

思考を巡る疑問に首を傾げながら、碓氷も夕緋を見つめる。

見た目10歳くらいの小さな女の子。白いワンピースから伸びる両腕と両脚は、ひとひねりで折れてしまいそうなほどに細い。長い髪を後ろで一つにまとめていて、それはいわゆるボーテールという髪型である。

碓氷はじつくつと容姿を確認するも、やはりこの少女に見覚えはなかつた。

けれど彼女は、自分を待つていたと言ひ。

その理由も、彼女の要件も分からぬ。

(……まあ、聞いてみればいいか)

分からぬものはいくら考へても分からぬのだから仕方ない。そうして碓氷が尋ねようとする。

「……あらかじめ、教えておこうと思つて」

碓氷の胸中を察したかのように、先に夕緋が口を開いた。

囁くような声量だつたが、人もいなければ風もない林の中なので聞き取ることはできた。

「……近いうち、夕夜の日常が壊されるわ」

「……え？」

突如放たれた不穏な言葉は、すぐに理解することができなかつた。

「……決して小さくない渦に巻き込まれて、夕夜はもがき苦しむの」

まるで記載された事項を音読するよつた、淡々とした口調。

訳も分からず胸がざわついて、落ち着かない気分になる。

「……最初は苦労も多いと思つ。普通はしないような体験をして、怖くなつたりするかもしねれない」

不意に、碓氷は今いる場所を意識した。夕緋の声以外に音がなくて、自分たち以外に動くものはない、この不安なほどに静寂なる空間を。

「……でも、安心して。きっと、夕夜の日常は取り返せるし、戻つてこられるから」

それだけで話は終わりなのか、夕緋は口をつぐんだ。

それきり、お互に身動き1つしなくなる。いや、2人だけではない。風が吹かないせいか、林の枝葉もまた、1つとして揺れ動くことがない。

沈黙……というよりは、純粹な『静』が2人を取り囲む。

感覚的には数十分、実際は数十秒の時間が経過した頃、碓氷が『静』を破った。

「お前……」

ゆづくじとした歩調で、碓氷が夕緋に近寄る。夕緋は動かず喋らず、無反応を維持。

碓氷が彼女のすぐ目の前に立つ。

そして……その小さな額に、手を当てた。

「ひょっとして、熱でもあるんじゃないのか？」

「…………」

「ううむ……こうして他人の熱なんて計つたことないからよく分からんなあ……。いてつ」

ペシッ、となんだか不愉快そうに手を払い除けられた。

つい痛む箇所を擦るもの、そんものは不要であつたらしく、痛みはすぐに引いていった。

「……一応、教えたからね。これでの局面に佇んだ際、少しでも冷静になりやすくなればいいのだけれど」

少女が背を向けて、林の奥へ進み始める。

「あ、おい！ ちょっと待 わふつ」

碓氷が少女を追おうとした直後、突風が吹きぬけてその流れに乗つた葉っぱが顔面に襲いかかってきた。
貼り付いた葉っぱを払い落として田を開けた時には、既に夕緋の姿は跡形もなく消えていた。

「え？ いつの間に？」

足音は全く聞こえなかつた。突風の唸り声や葉の擦れる音があつたとはいえ、走り去つたのなら普通氣づくはず。

もしかして木の裏に隠れているのかと考えてそこいら辺を歩き回る。が、目的の人物はどこにもいなかつた。

「んー……なんだつたんだ、一体……？」

狐につままれたような気持ちで立ち尽くしながら、少女の言つていたことを思い出す。

漠然としていて、現実味がなくて、信憑性もない話だった。正直なところ、相手は子どもだし、適当なことを言つてからかわれたと判断するのが妥当だらう。

しかし、碓氷はどうしても、彼女の荒唐無稽な発言を一笑に付すことができなかつた。

無論、彼女の話を信じるか信じないかと問われれば、考えるまでもなく信じないと答える。

ただ、程度の問題なのだ。

夕緋の話を聞き終えたとき、頭の隅で確かにその話を受け入れている自分がいた。そのことに言ひのない疑惑を覚えて、少しの間だが体の自由が利かなくなつた。

ある程度整理がついて冷静になると、やはり馬鹿げた話だと思つて、つい相手の容態を心配してしまつた。

今だつて馬鹿げた話だと思つてゐる。しかし、何故かあの話の全部を否定する気になれない。

自分は、一体どうしてしまつたというのだろうか。

「……まあいいや。せっぱり考えても分からんことは、いくらく考
えても分からんし……さつさと帰る」

さつと踵を返す。が、すぐにぴたつと止まる。

「…………あー…………」

碓氷は、一度木々の屹立する空を見上げて、次に周囲に首を巡ら
した。

林の中なのでやはり樹木以外何もないが、視界に映つてゐるのは夕緋の話を聞いていた場所とは異なる光景だ。彼女を探すために歩き回つて自然と立ち止まつた位置に、自分はいる。

なんとなく後頭部を搔きながら、碓氷はやや途方に暮れた様子で呟いた。

「……帰り道、どっちだっけ…………？」

日常からの脱線 2（後書き）

名前を見ても「あえればわかる通りヒロイン登場ですね、正直超はやいですね。」

この子がどう動かすかなんて全く予想もつかないです。w

次回：一番キャラ濃い人登場

感想・ご意見などあれば遠慮せずにどんどん書いてください！

口算からの脱線 3（前書き）

今回は友月義人さんの番です！

読み方は「ともつきあきと」さんですよ？ｗ 決して「なんかへド
口とかそんなもの」さんではありませんからねｗｗ

「クハツ！」

俺は木の上から見ていた少女の行動を田の当たりにして、ついつい噴出してしまった。その様子を見て少女 タ绯が俺を睨みつける。

「おつと失礼」

俺は木から飛び降りると、少々不機嫌な様子のタ绯に近づいて会話を試みる。

「夕夜君だつけ？ へえ～彼がそうなのかい？ 中々面白そうな子じゃないか。どういう子なのかなあ？ 楽しみだよ」

しかし、いつもの事ながらこの無口で無愛想な少女は俺と会話をする気は無いらしい。タ绯は俺の前だと一切と言つていい程言葉を発さない。

周囲から見るとひたすら喋り続ける男と一言も発さない女の子という非常にシユールな光景になっている事だろ。

「まあ、知つての通り、彼についての情報なんてとっくに揃つてるんだけどね。何なら家庭環境や交友関係、普段の行動パターンからちょっとした癖まで愛しの彼の情報を君に教えてあげてもいいよ

」

再び俺を睨み付けるタ绯。

「怖い怖い……そんな睨みつけるなよ、おにーさんは怖くて泣いちゃうぜ？ ……まあ冗談はともかくだよ。彼が特別とは言え、まさかいきなり君が会いに行くとは思つてなかつたから聊か驚きを隠せないんだよ、俺は。ぶっちゃけ、予測の範疇かそうでないかで言えば予測内ではあるんだけどね」

タ绯は俺を睨みつけたまま、やはり何も言わない。段々と会話をものが面倒になつて來たので本題を伝える事にした。

「最初は俺が相手するよ」

夕緋の表情が強張つていいくのがわかる。その表情があまりにもおかしく感じられて俺は思わず腹をかかえて笑ってしまった。

「クハツハハハ！　いいね、最高だ！　普段、無口無表情で一体何考えてんだかわからりゃしないって言つのに……たつた一言で」ここまで判り易く表情が変化するものかよ！　全く傑作だ！」

「…………！」

夕緋を中心に大気が歪んで行くのを感じ取る。

「おつと、やめておきなよ。止めるにしても俺相手に実力行使つてのは少々浅はかとしか言えないんじやないかな？　第一に今の君に過去程の力は無いじゃない？　まあ、最も君の全盛期ですら俺に勝てる見込みがあつたかわからぬけどね」

俺は無用意に夕緋に近づくと彼女の髪を片手に弄る。

「で、どうするの？　殺り合つ？　まあ俺としては構わないんだけど、どうせなら俺相手に懇願する君の姿を見るのも乙なモノと思つてゐるんだけど、そつちのコースとかどうかなあ？」

と、夕緋の周囲の空気が変化したのを敏感に感じ取つて俺は後ろに下がる。どうやら少々弄り過ぎたようだ。

「冗談だよ、冗談。まあ、君に懇願されたつて止まる気は無いけどね、俺、君の事嫌いだし。つかさあ」

俺は夕緋の喉元に不可視の剣を突きつける。

「君だけがパンドラの箱の所有権持つてる訳じゃないよ」

数秒……俺と夕緋はその状態のまま睨み合つた。

「…………クハツ！」

馬鹿馬鹿しい。そう思つて、俺は剣を消した。

「んまあ、君とは目的は違う上に犬猿の仲だし、正直今すぐ死んで欲しこつて思つてるくらいだけど、今はまだ利害が一致してゐる訳だからね、協力はするよ。ただまあ……方法までとやかく言われるつもりは無いねえ……」

俺は軽く跳ぶと、何も無いはずの宙に地面と逆さまの状態で立つ。

「ま、とりあえずは安心しなよ。俺にとつても彼は必要な訳だし、

うつかり殺したりはしないって 「

それだけ告げると、俺はそのままの状態で夕緋に背を向けて宙を歩く。

「 わてと、といあえずは～ 」

ウエストポーチから一枚の写真を取り出す。

そこにはカチューシャを付けを付ける位置に大きめのリボンを付けた女の子の姿……確かに名前は逢瀬優夏だつたかな。

「 この子でも利用して誘き出すかな? 」

初めてのパンドラの箱との出会いを想像すると口がニヤケて来る。碓氷君はどんな表情をするかなあ……。焦燥感……絶望に歪んだ顔? まあどんな表情しても彼は俺の敵になるだろう。

ああ、最高に気分がいい。

長年この街で暮らして来たが、やはりこの不思議に溢れた街は面白い。

時にはこんなプレゼントをもらひえる。
だからこの街から離れられない。

「 最つ高だねえ……最高だ……！」

ついつい口から言葉が漏れる。

「 この街もここの人間も皆最つ高! 」
そうだ。

俺はこの街と共に生きてこの街と共に暮らして、この街の為に生き、俺の為に街は存在し続ける。

俺が街であり、街が俺だ。

「 クッハハハハハハハ ! 」

世界なんてどうでもいい。街が無事ならば。
誰が死のうがどうだつていい。住人が無事ならば。
ああ……最高のプレゼントだ……。

「 素晴らしいプレゼントだ、神様……」

無神論者だが。

「 さて、行こうか。警鐘を鳴らしだ……！」

俺の名はシグナル。色はグレー。ただの信号

口常からの脱線 3（後書き）

「さうも遅れてしましました。本当に申し訳ありません。言えない、うつも忘れてフレメモやつてたなんて言えない。・・・ orz

次回：犠牲者その2
職場に停滯ムードが・・・w

口常からの脱線 4（前書き）

今日は翡翠さんの番です。あと一人で一周しますねw

「やつと出れた・・・。」

あの夕緋と名乗った少女のよく分からぬ話を聞いた後、林を出るのにかかった時間は15分ほどだ。景色が変わるわ、そのせいでお角は分からぬいで迷ってしまったのだ。林も意外と深く、夕日なんて届くはずも無い。仕方なく携帯電話の地図機能を起動してやつと外に出ることが出来た。圈外にならなくて本当に助かった。

(それでも、二二二日・・・図書館で三つ編み、今日は林で

電波話か・・・まあ関係ないだろうが・・・。)

夕緋との話を思い出し、まあ大したこと無いだろうと結論付ける。彼女の話を全否定する気になれなかつたが、かといって肯定する氣にもなれない。というより信じるには信憑性がなさ過ぎる。

「ウダウダ考へても仕方ないし、帰るか。」

やつとの思いで道に出れたので、そこからまつすぐ家に帰る予定だつた。

「よう、碓氷じゃないか。しょつ引かれたあとどうなつたのか教えてくれよ。」

「黙れ天月。なんことより『リラ』に没収された分の唐揚げ弁当奢れ。」

話しかけてきたのはツンツン頭の少年・・・天月響矢あまつきやよいだ。同じクラスで風紀委員をやつてゐる。とてもそんな性格でもないし、成績でもなく、何で風紀委員会を勤めているのか、謎である。

「いや、ソレは無い。そういえば逢瀬がお前のこと探してたぞ。

『マイダーリン見てない?』とか言つてた。もうお前ら結婚しろよ。」

「そりか、ちよつと歯あ食いしばれ。」

「悪い、冗談だつて。ところで、なんで林から出てきたんだ?」

そこを聞かれると返答に困る。流石にこつちみてた女の子が気に

なつたので林の中にホイホイ行つてしまつたとか言いづらい。

「まあいいや、どうせ都市伝説が気になつたんだろ。」

天月は歩を進めながら疑問を自己解決する。

またその話題か・・・・・。正直うんざりする。授業中の逢瀬もだが、どいつもこいつも好きすぎるだろ。都市伝説。

「いや、知らん。といつか都市伝説つて図書館のやつだけじゃなかつたのか？」

まあ、あつちばどちらかと云つと七不思議に分類されると思つが・・・。

「あ、それは知つてゐるのか。まあ信じるも信じないも好きにすればいいけど聞くか？」

言われるとなになつてしまつ。本心から都市伝説とかそういうのには興味は無いが、図書館の一件があるので気にならないといったら嘘になる。

「この林にいる女の子の話なんだけど・・・」

「え・・・・?」

「稀に現れるその女の子に会つと、会つた人の日常は壊される。どんな形かは分からぬけど、不幸な目に合つ人もいるらしい。・・・とかなんとか。俺も噂で聞いただけだからよく覚えてないけどな。

「どういうことだ・・・? たしかあいつも俺の日常が壊されるとか言つていた。そして戻つてこられるとも言つっていた。分かることはあの子の言つていることが都市伝説と一致していることだけだ。

「つーか今の話知らないのに何でそつから出てきたんだ?」

リアルに都市伝説の子に会つたとか言つていいのだろうか。絶対ダメだろ。なんか適当ないわけを・・・

「そこで小銭見つけたんだよ。」

「マジか。それで唐揚げ弁当買えばいいだろ。」

適当な嘘をついたら案外簡単に騙されてしまった。もう少し疑わることも覚悟していたのだが・・・。ただ、唐揚げは自分で買う

しか無さそうだ。正確には唐揚げ弁当だが。

そんなことを話している間に林からは大分離れ大通りに出た。

「碓氷ー俺ちょっと買つもんあるからじゃあなー。」

「ああ。じゃあな。」

日常からの脱線 4（後書き）

だんだん日常キャラが充実してきましたねw
まあ日常キャラを出す＝犠牲者という概念ができるがあがりつつあるの
ですが・・・w

次回：ヘンな人
確かに、そんな人だった気がする・・・

口説かりの脱線 5（前書き）

すみません本当にすみません！

う〇遅れました、定期更新などと書いたおきながら一〇も遅れてしまったことについて深くお詫び申し上げます。

今回は『魄』さんの番です。

天月と分かれた俺は、一人帰路に着いた。

今日はなんだか疲れる日だ。

そんな事を思いながら……俺はただいつも良く歩く通りを歩いていた。

ただ……いつも通る道だからこそ、今俺の目の前にある違和感に気がついた。

「なんだ……この店」

後数十メートル歩けば自分の家。

もう目と鼻の先に安らげる自分の家があり、色々な出来事があった今日は正直直ぐにでも家に入り、自分のベッドの上で横になりたい気持ちではあった。

「…………こんな店、こんなところにあったっけ？」

そう呟きながら店の前に立つ。

俺の目の前にあるのは、黒い外壁にところどころに赤い模様がついている……お洒落なカフェのよう見えた。

……から揚げ弁当は、明日でいいか。

そう思われるほど、その店は回りの家々には無い、独特の雰囲気を放っていた。

俺はゆっくりドアを押し開けた。

「……つらつしゃーい」

こなれた感じの店員の声。

内装は思った以上にシンプルで、そして純粹にカツコイイと感じる者だった。

俺はカウンターに歩み寄りながら店員に声を掛けた。

「こいつて何時出来たんですか？」

「こい？ 昨日工事が終わって、今日初開店だよ」

「カツコイイ内装ですね」

「……ありがと。君がこの店の第1のお客さんだよ」

そんな、ちょっとテンションの低い店員と他愛も無い話をする。外はだんだんと暗くなり始め、俺は普通にカフェで初の客という事で特別に一つ奢つてもらっていた。

……まさか、こんなカツコイイ店に唐揚げ定食が出て来るのは、俺は思わなかつた。

食べ終わり、辺りもすっかり暗くなつた午後6時ごろ、店員は俺が食べた食器を洗いに奥に行つてしまい、俺は一人ポツン……と座つていた。

「……こい、いい所だなあ」

そんな事を呟きながら……。

俺がそんな事をして、ボンヤリと着たばかりの店でくつろいで入

ると、ドアが開いた。

店員さんは戻つて来る気配は無い。俺は首だけドアの方に向けた。

……向けて、そのままその“人”を凝視してしまった。

入ってきたのは、黒い上下のスーツに中の黒っぽい普段なら見る事の無い色のワイシャツ。そのいつた“黒”尽くめの中で飛びきり目立つ、赤いネクタイに赤い手袋、はたまた赤いシルクハットを被つた、身長が高めの男性だった。

……一瞬じゃない、完全に“見とれて”しまった。

俺は意識を戻し、首を軽く振った。

あれは男じゃないか。なに見とれてんだよ俺！

その男性はゆっくりと、黒のローファーを床に鳴らしながら、

カツン カツン

と席に座るわけでもなく俺に近づいて来る。

相変わらず店員は戻つてこない。

俺はその“人”とは思えない風貌の男性を間近で見ながら、つばをゆっくりと飲み込んだ。

「あの子に会つたのか……」

何を言つて……いるんだ?

「まだ無自覚とは……まあいい、”今”からお前に一つ二三事を教えてやる」

なんだ……? 声が出ない。この場の空氣自体を支配されている感じ。あの『コラ教師よりももつと……別の怖さが体の奥から沸きあがつて来るのを感じた。

「お前、死ぬぞ?」

突拍子も無い事を言われて、だけどそれに対しても言つ事が出来なくて……正直、今日こいつ事がありすぎるだろ。と、ただボンヤリと考えるだけになつていた。

「ハツ、お前が死のうが何しようが俺には関係無いんだけどね」

そう、さつきよりかは幾分軽い調子で言つた……その瞬間だった。

「お前が“死ぬ”事自体は簡単なんだよ。何故かつて? 俺が今“この場”でお前を殺せばいいだけの話だからな。なあ……“碓氷夕夜”君」

俺の喉元にあるのは……どこから出したか分からない刃物の刃先が1つ。

一瞬の出来事だった為か、俺は驚く事も何する事も分からず、ただ矛先を突きつけられているだけだった。……正直に言おう、若干漏らしそうな心境なんだが。

「んで、お前はどうしたいんだ? “生かされる”かこのまま俺…

……じゃない別の誰かに“殺される”か……

俺は、若干の涙目を浮かべながら生きたい……と、声は出せなかつたが首を振つて伝えた。

「まあ……よく考えるよ？　俺から“情報”を受け取ると言ひ事は、俺の“情報”によつて“生かされた”と同意義なんだ」

そう言つてその男性はゆっくりと刃先を俺の喉元から離し、適当に地面に投げ捨てた。

「さて……“生かされたい”と言つ碓氷君には、今現在置かれている状況について少しばかり教えてあげよつ。ああ、勘違いするなよ？　今俺が教えるのは“お前”が現状知つている事に“補足”を加えるぐらいだ」

店の雰囲気が、この男性が入つて来る前の状態に戻り、出そつと思えば声が出せる状態にはなつた。……ただ、もう既にしゃべる気力などは無かつたが。

「さてさて、今この“街”で起きている事は、謎に包まれた嘘か真かの“都市伝説”なんかじゃない。それと、君はもう既に連れられない事に包みこまれている。程度かな。ああ、お前が死ぬつて事態はもうしばらくはない。と言つても、明日、明後日ぐらいまでだが」

……意味深な事を言つてゐるから、もつとちゃんとした情報が来るのがと思っていた。

しかし、そんな若干まじめに話してくれている中、俺は我慢できず、その男性に初めて言葉を発した。

「……トイレ、行かせて貰つて良いですか」

これを聞いたその男性は腹を抱えて笑い、俺をトイレに行かせてくれた。

あの刃先を受けてもれそうになつた尿意を慌てて解消し、カウンターに戻つた時には、もう既に“人”かどうかさえ、怪しみはじめたあの男性の姿はどこにもなかつた。

「時間は大丈夫なんですか？」

そう店員に話しかけられるまで、ただボンヤリとドアを見ていた俺は、慌てて時計を見て、7時半を回つている事を確認し急いで店を出た。

月明かりにが夜空で輝き、街灯が数十メートルの道を照らす中、俺は若干小走りになりながら空を見て、ボンヤリと思つた。

……月が、今日は何でこんなにも“紅い”んだろうか……。

口算かりの脱線 5（後書き）

「うつられた理由ですか？」
「べ、別に忘れてたわけじゃないんだからねつーー。
(詳細は後で活動報告に記載しておきます。)

感想などいろいろ書きましたので、それについてーーー。

行間一（前書き）

久しぶりにこの時間にうづ。
今回は丸樽さんの一回目です！！

光が全くといっていいほど入らない林を奥へ、さらに奥へと入った先にその展望台はあった。

それほど大きくもない展望台には、窓は割られ所々にひびが目立つ小さな教会がある。管理人が息絶えてから数年経った教会はまだその姿を残してはいるが、街の住人達からは完全に忘れられてしまつていて。

果たしてここに教会があることを知っている人はどれ位入るのだろうか？

教会と同じように、古くなり雨水の影響で赤錆に盛大に侵されている落下防止用の柵を嫌がりもせずに握りしめながら、少女。麻野夕緋はそんな疑問を浮かべる。

夕緋は教会を横目で見て考えるが、興味がなくなつたのか、直ぐに目の前に広がる街の夜景を見下ろす。

「ここは昔、綺麗な夜景を見るデートスポットとして有名だつたのが、何時しか人が来るのも疎らになり、今では思い出したかのようにくるカップルしか来なくなつてしまつていた。

そんな展望台から見える夜景は当時と変わらず。街は美しく人間の輝かしい発達を照らし出している。

景色をしばらく考えなしに眺めていた夕緋はおもむろに顔を、空中に浮かぶ真っ赤に輝く月を見上げる。

科学的には、赤い月というものが存在する」とは証明されているのだが、今宵の月はそんな科学の証明を忘れるほどに幻想的で見た人を狂わせるように赤く、紅く、緋く染め上がっていた。

高台に位置する所に展望台があるからだらうか、夜風が絶え間なく夕緋を包み、髪を揺らす。前髪が眼の前を通り過ぎ、視界を悪くさせる。それでも赤い月を見続ける。まるで、何かに祈るように。そこそここれまでのより一段と強いものに夜風が吹き強制的に眼を開じることになる。

後ろのほうでは、この展望台を囲むように生えていた林の葉が耳にやさしくない音を奏である。

葉の擦れる音はしばらく続き、^留つよつよつと夕緋も眼を閉じ続ける。音が徐々に弱くなり、それに合わせて眼を開けていく。

音が止み、夕緋が眼を全開まで開けた。その時、

「もう言え、今日でしたね」

唐突に夕緋の真後ろから声を掛けられる。
とつとつに反転し相手が誰なのかを確かめる。

そこにいたのは眼鏡と今時珍しい三つ編をしている少女だった。他に特徴を挙げるのならば、胸元のボタンを壊さんばかりに実った胸と夕緋が今心配している少年が通っている学校の女生徒の制服であつたことと林を抜けてきたくせに新品同様に不自然なくらい綺麗な靴だらうか。

少女は警戒している夕緋を全然気にせずに挨拶をする。

「ほんばんわ、夕緋ちゃん」

自分の名前をちやん付けで呼ばれたことに不快感を覚えるが、夕緋は顔には出でず口に少女の名を言い当てる。昔から知っている名を。

「…………近衛この」

「いやだな、フルネームじゃなくて、このちやんかこのたんつて言つてくださいよ。古い仲じゃないですか～。あつ、でも出来ればこのちやんがいいんですけどね」

せりりと笑顔で理不尽な要求をしてくる近衛。笑顔は赤い月で照らされてこるためだらうか、ビニカ狂氣じみてこるよつて見える。

しばらぐの沈黙。

先に喋り始めたのは、やはり近衛だった。

「そう言えば、今日でしたね」

先ほどとまつたく同じ言葉を繰り返し、続ける。

「そり。今日は、碓氷くんが事件に巻き込まれ……いや、中心は彼になるのかな？ まあ、いいですが。その彼がある種の覚醒をする日……。ですよね？」

夕緋に対して、今日という日がどんなものになるのかを、全く崩れない笑顔で問う。

一方の夕緋は対抗するかのようにこちらも全く崩れない無表情の

まあ、

「…………用件は何?」

問い合わせいで返し話の流れを強引にぶつた切る。それでも近衛は笑顔を微笑みを絶えさない。

「用件がなければ会こに来ては駄目なんですか?」

再び、聞いて返せる。お互いがお互いを牽制しあうため、一向に話が進もつとしない。普段の夕緋ならば、ここにまた沈黙になつてもどうとも思わないだらうが。今日とこいつ日が影響しているのだろうか、近衛にイライラを覚える。

近衛のせうは、そんなこと一切気がつかないよう、また問い合わせをする。

「あれ? 今日はシグナルさんと一緒にやないんですか?」

そつときから、質問が多くさる。ここつは昔から好奇心旺盛なためか、何で? どうして? といつねそこせつだ。と内心で嫌味を垂れる。

「…………シグナルは…………あいつのところへ行つた

「ああ、シグナルさんからなんですか。何時もは、夕緋ちゃんの周りを飛び交うようにひつひつしていたので、姿がないから驚いたしました」

少しばかり会話が成立する、それを利用して夕緋から話しきり

出す。

「…………」ソーリーで聞こえておけないと想つ。あなたはびっくりするの？」

質問。これで何度もになるのだろうか、数えてないので分からな
いがこれだけは絶対に流せない。これからの方が掛かっているのだ。
有耶無耶にされるのではなくハッキリとした解答が欲しい。

近衛もそんな夕緋の質問に隠されている、思いを読み取ったのだ
らうか。

笑みを崩し、じりりとも無表情ではないが真剣なものに顔を変える。

「えひひ付くとは……。どういう意味ですか？」

「…………」質問で返すな。ちゃんと答える。返答によつて、お前
への対応が決まる

釘を打たれ、眼を閉じて中指で眼鏡の位置を戻す。
完全に空気が変わつていた。先程の中途半端に張られた緊張感の
ある空氣ではなく、緊張感をこれでもかと主張するような物へと変
貌する。

眼を開ける近衛、そして返答を告げる。

「やうですね。私は今のところはどうに付くか決めかねています。正直、どうに付くかすら悩んでいます」

予想通りの返答だった。ここは一番物事を決めるのが不得意で
最後は結局その場に流される傾向がある。

「……」こいつなら、もしかしたら仲間に出来るか？と思案し。

「……………だつたら」

「ですが！」

強引に言葉を遮られる。普段の近衛からは想像も出来ないほどの大声に驚き眼を見開く。

近衛は流れに乗つたまま、言葉を続ける。

「ですが、今回は最後まで私が悩み、その上で決めます。貴方達の意見は一切聞きませんのでよろしくお願ひします。これは……私の問題なんですから」

「……………そう、分かつた」

久しぶりに意思の強さを出してきた近衛を冷たい眼差しで見つめ、片手を静かに水平に持ち上げる。

「……………なら、ここで暫く大人しくしていて貰う。この場面で中立なんて言う、不確定要素は排除しておいたほうがいいだろうから」

「おやおや、ホント見た目と変わらずに子供ですね。大人ならそんな者も計算に入れて動くものですよ。いやはや、強引ですね」

まるで、忍者のように制服の袖の下から万年筆を取り出し、夕緋に向けて構える。

お互に静かな殺氣を放ちながら、近衛の方から近づいていく。それを待つかのように赤い月をバックにして待ち構える夕緋。

一步一歩踏みしめながら相手との距離を詰めていく。

「……………私に勝てると思ってるの？」

「ふふっ、知っていますよ。例え、今あなたが以前より弱ついたとしても私は勝てないことも。でも、あなたに深手くらいは負わせるつもりです」

言い合いながら、一人とも笑みを浮かべる。夕緋にしては珍しく可愛らしい笑みだった。

二人の距離が各々の獲物の範囲に入る。

同時に攻撃のモーションに移ったところで、帽子を被った全身黒尽くめの男が両者の間に割り込む。一人は強制的に攻撃を取りやめ、突然現れた男に警戒の牙を向ける。男はそんな女子一人の反応を気にする様子はなく、平然としている。

「はいはい、女の子同士のキヤットファイトも俺は好みなんだけどさ。あそこにさ、俺の家があるんだよ、だから壊されるのはマジ勘弁。別のところにしてくんない？」

そう言つて、指差した場所は展望台の隅にある教会だった。一人ともぽかんとした表情で教会を見やり、近衛が男に口を出す。

「あの、あそこ潰れてるんですけど……」

「あん？ 何言つてんの、そんなの見れば分かるじゃん。ああ、大丈夫。屋根さえあれば俺は問題ナッシングだからさ」

自然体をまつたく崩さない男に近衛は呆れつつ、

「あの教会。近々取り壊されますよ」

「えつ、そうなの。なら、新しいとこ探さないとな」

軽く嫌味っぽく言ったのだが、男は気にせず歩き続け教会の中に
入つていき、重々しい扉の音が辺りを包んだ。別れの言葉すらなか
つた。唐突に現れて颯爽といなくなつた。あれは、果たして何者だ
つたのだろうか。二人は考え、知らない人として定義した。

「ふう、何か白けちゃいましたね……」

「…………そうね」

脱力する。先程の殺氣で満ちた空気は萎びれ、もう何も感じなく
なつてしまつた。

ふうっと近衛が嘆息し林の方へ歩き出す。

「…………ビニール行く？」

「帰るんですよ。もう場が白けちゃいますぎて、つまんなくなりま
したからね」

「…………そう」

夕緋も空気が壊されたことが分かつてゐるのか、深追いはせず見
送る。

だが、近衛がござ林の中に消える寸前で背中に向けて言う。

「…………中立のままでいられるとは思わないことね」

重々しい台詞を背中で受けた近衛は笑顔で、

「そうだ、知つてます？ 碓氷くん、からあげ大好きなんですよ

「…………はあ？」

どうでもこい話を吹っかける。

「あれあれ？ 知らないんですか～」

「……はあ、え？ そ、そんな事知つているに決まってるーーー！」

「ふふふ。それじゃ、また会いましょうね」

「お、お前なんかとはもう会いたくない。しつちから願い下げだ！」

最後に夕緋が女の子っぽい反応を見せたのを確認してから林に入つていく。

碓氷がからあげが好きだと知ったのは今日の昼休みに、彼を見に行つた際に、何が有つたのだろうか、うわ言のようにからあげと言う単語を連呼し机に終止突つ伏していた。その尋常ならざる落ち込みつぱりに声を掛けることすら出来なかつた。

彼の事を思い出し少し笑う。林の中を進みながら近衛は思つ。

（さて、中立ですか……。彼の敵になるつて言つのもいいですし、味方になつてみるのもいいかもですね。さて、私はどうひきこむんでしょうね）

選択肢の有ることに対する喜びを噛締めながら、暗い林を歩き続けていく。

一方、近衛の背中を見送つた夕緋は教会を睨んでいた。
近衛の他に現れた、不確定要素……。この男はどうここまで関わつてくるのか予想すら出来ない。

そして、今まさに動き出そうとしているシグナルの動向も気に入る。彼は、嫌いだが実力は認めている。

夕緋はただ何も言わず。高台から吹く風に晒されながらも、その

場を後にすることになった。

逢瀬優夏は誰も通らない暗い歩道を歩いていた。歩道には街頭もあるのだが、それでも暗闇は一掃出来てはいない。

逢瀬はある後、突然変な言い訳で分かれ林の中に入つていった碓氷をしばらく探していた。だが、結局見つけることが出来ず、気づけば何時もなら夕食を済ませお風呂でのほほんとしている時間帯になってしまっていた。

「はあ～、まったくあの、バカマイダーリンは……。普通女の子置いていくかね普通」

愚痴を垂れながら、夜道を一人歩く。怖いわけではないが、一人でこういつ暗い道を歩くのはやはり心寂しい。なので、この状況に陥れた碓氷にどう落とし前をつけようかを考え始め、うししつと半笑いになりながらも慌てふためく碓氷を想像して気を紛らわせる。

しばらく笑つてから顔を上げ、月を見上げて、何時もより赤いなと漠然と感じる。

「よし、ひとつと帰つて。ドラマ見ますかー！」

月から顔を下げる、帰路を行く。

その様子を確認しながら、シグナルは笑う。

「クハハっ、青春してるね～。御嬢ちゃん」

空中を闊歩しながら、地上の人よりも大きく見える、赤い月を見て。

「クハツ、赤い、赤いね。さてと、そろそろゲームスタートだ」

本当に心の底から楽しそうに笑い、夜の街を見下ろす。

こうして各自の想いや策略を渦巻かせながら、赤い月の夜が始ま
る。

朝日は遠く見る影すらもなかった。

行間一（後書き）

そろそろ日常から非日常へと変化します。
正直一章の内容とタイトルがあまり関係ないような・・・
W

災禍の幕開け 1（前書き）

黒歴史回。

今回は僕と白川さんの分を回りでうつロードす！

カフフのような喫茶店のような店で適当に夕食を済ませた碓氷は、とりあえず帰路に就くことにした。

紅い月のことについては考えていても仕方ないので、とりあえず頭の中では『科学的には証明できるが、今の自分にはその知識がない』という力タチで片付けておく。

「それにしても“紅い月”ねえ……」

ふと、人通りの少ない3mくらいの横幅があるビルに挟まれた路地割と広めの通路の中央で足を止めて紅い月を見上げる。

この街にはたくさんの都市伝説や七不思議というものが存在している。

いずれも信憑性の類は皆無に近く、それについて調査する好奇心旺盛な少年少女の集まりの『伝説狩り』というグループがいろいろ調べてはいるが、一つも解明されてはいない。それを聞いて誰かが適当に噂広めただけだろう、と呆れ返る否定派もいれば、都市伝説は簡単に発見できるものではないから都市伝説なのだ、と主張する肯定派も存在している。

ちなみに碓氷の場合は前者だと言えるだろう。

その都市伝説の一つに、『紅い月と銀の十字架』というものがある。

前に逢瀬から聞いた都市伝説なのだが、あの時の碓氷は極めて厨二臭い名前に呆れ返つて詳しく聞いていなかつたので、それについてよく知らないのだが、

「まああんな“紅い月”を見せられたる都市伝説ってのもバカにできないモンなのがもしかれないな」

今度逢瀬に詳しく聞いてみると、と適当に考え、月から視線を下ろすそのまま帰路を歩き始める碓氷。

季節が夏の終わりといつだけあってまだ少し暑さが残っていたが、

そのおかげで時々吹く風が妙に心地よい。風が止んでも周囲の温度は昼間ほどのものではなかつたため、なかなかに快適だ。そのためか、碓氷の気分は極めて晴れ渡つていた。

だが、碓氷の心が晴れ渡つていたのはおそらくそれだけが要因になつたわけではない。

単純に気分が良かつたのだろう。授業中に逢瀬の仕入れてきた新ネタについていろいろ語り合つたり、天月とバカ話をしたり。そんないつも通りの日常をいつも通りに過ごすことに彼は満足していたのだろう。

だからこそ気分が良かつた。できれば、こんな日々が続きますよううにと心の奥底で願つていた。

が、そこで、

「クハツ、クハハツ！！　いい夜だな少年」

耳触りで愉快な声が掛けられた。

声の主を探そうと周囲を見回してみるが、人影などどこにも存在していない。

「クハハツ！　こっちだよ」

もう一度与えられたヒントを元に声のした方に視線を向けてみると、そこは本来何もないはずの空中だった。

だが、そこには確かに人が存在していた。

あまりにも異様な光景だつた。そこには台になるようなものは何もないし、紐か何かで吊るしているようにも思えない。だが、その人物は確かに空中で、まるでそこにイスでもあるかのように、右膝を立て、左足をぶらんと垂らして座つていた。

ラフな格好だつた。適当なデザインの入つた赤のインナーに、前のチャックが全開になつてている黒い長袖パーカー。それに合わせるように、長袖ズボンも真っ黒だつた。右腕に巻いている特徴的なシリバーアクセがジャラジャラと耳触りな音を立てているが、それよ

りも気になるのは胸の中心辺りにぶら下がっている銀の十字架のネックレス。

(紅い月と・・・銀の十字架ー?)

思わず身構える碓氷。

「おいおい、」

対して、十字架の男は極めてひょうひょうとした態度で、

「そう身構えるなよ、せつかくの素晴らしい夜が台無しだらう。もうこの状況を愉しんでみたらどうだ?」

にやにやと、男は大きく表情を歪める。わかつていてやつているのか、それともわかつていても抑えきれずに漏れてきてしまったのかは定かではないが、その表情は確実に悪質な印象を碓氷に与えていた。

やがて男はまるで堀から飛び降りるかのように空中から地面へと着地すると、やはりにやにやとした歪んだ表情を浮かべたまま、

「そうだな、まずは自己紹介をしよう。俺の名前はシグナル、この街のご意見番のようなものだと思つてもらえればそれでいい」

教科書を読むかのような口調でシグナルは言つ。

「自己紹介をする時は自分から名乗るものだ。俺はその礼儀を果たした。ならば次はお前が礼儀に応じる番じゃないか?」

あからさまに怪しい男に対し、碓氷は一瞬どうじよつかと悩んだが、やがて構えを崩すと、

「碓氷、^{いし} 夕夜だ」

警戒心の籠つた声だった。

だが、男の表情が変わることはない。いや、もし仮に変わつていたとしても、もう変化がわからなくなつてしまつぐらじに歪んでいる顔が、さりに歪んでしまつただけだろう。

「いいね」

愉快な声は続く。

「最高だ、これだからやめられない」

その声が放たれる度に碓氷の心に何か嫌なものが積もつていく。

「そう、そうだ。今日は月が紅い。実際に美しい月だ。普段の淡い光を放つ月も美しいがこの月はどこか別の美しさがある」

言いながら、男は天を見上げて両手を大きく広げる。その姿はまるでの紅い月から何かを受け取っているかのようにも思えた。男はその体勢のまま、首だけを動かしてこちらを見る。

「だが俺はこの月が嫌いだ」

こちらに向けられた男の表情は先程の歪み切った表情とは違い、呆れ返ったものになっていた。

実に、本当につまらなそうな表情で、つまらなそうに男は続ける。「なあ少年、『紅い月と銀の十字架』って都市伝説を知っているか？」

「・・・名前だけなら^{タイトル}」

「そうか、まあいい。たまには何も知らない少年に何かについて語るのも悪くはない」

男の表情が元に戻る。

大きく歪んだ表情が、再度碓氷に嫌悪感をあたえるが、男は気にしない。

「この街にはいろいろな不思議がある。例えば、『放課後、図書室に現れる謎の少女』や『林の中に吹く一迅の風』。ああ、お前は既に後者とは関わっているのか。まあそれはどうでもいい、そんなくだらない都市伝説とやらの一つが『紅い月と銀の十字架』。クハツ！ 実に痛いネーミングセンスだ。これはあれか、いわゆる厨二病というヤツか？ クッハハハ」

「・・・何が言いたい？」

「そうだな、強いて言うなら俺はこの街が大好きだ。この街が俺であり、そしてこの俺こそが街だ」

もはや意味がわからなかつた。

酔っているのかと一瞬考えたがおそらく違う。それにしても妙に

言葉に乱れがない。

いつもの碓氷ならこの時点で『氣味の悪い妙な変質者』扱いして華麗にスルーを決め込み、道を引き返して遠回りをしてでも家に帰らうとしていただろう。だが、何かがおかしい。妙な圧迫感が碓氷の胸の辺りを締め付ける。

そんな碓氷の心情を知つてか知らずか、男は表情を歪ませながら続ける。

「だから都市伝説 자체は嫌いではない。この街の住人が造り上げたものは全て俺にとつて価値のあるものとなる」

だが、と。男が補足すると、一瞬でその場の空気が変わった。

凍てつくような鋭い空気。

殺氣とやらを察知できるような人間ではない碓氷でも、それが殺氣だと氣付くのに一秒もかからなかつた。

そんな張りつめた空氣を放つ男は、残念そうな表情を浮かべて、「この街はおかしい。最初はおかしくなかつた。そう、何かがおかしくさせたんだ。それこそ、この街である俺が全く無関係なものと合わせて『都市伝説』となつて表舞台に出てしまつほどに、な」やはり言つてはいる言葉の意味は理解できない。

男もそれをわかつているのだろう。だからこそ、男は虫食いを埋めていくかのように言葉を継ぎ足していく。

「『紅い月と銀の十字架』。これはおかしい、俺は紅い月とは何の関係もない。いや、違うな。『紅い月と銀の十字架』は“銀の十字架を胸に下げた男が紅い夜を生み出し、その力をもつて闇を打ち払う”という極めて幼稚な都市伝説だ。だがそれは間違いだ。確かに俺は紅い夜に動くがこの“紅い月”を生み出しているのは俺ではない

つまり、と男は前置きして、

「この街にイレギュラーな何かが入り込んでいる。それがこの街の形を強引に浮き彫りにさせ、そして一街（俺）自身も都市伝説として扱われることになった。これはどう考へても異常だ。事は既に

お前の知らない場所で深刻なものへとなりつつある

男の言葉に迷いはない。最初からセリフが用意されていたスピーチとも違う。彼の強い想いと明確な志が胸の内から言葉を生み出し、それを口から吐き出しているに過ぎない。

「本来俺は表舞台に出るような存在ではなかつた。だが体を蝕むウイルスに対抗するように熱が上がると同じように、俺は都市伝説の一部となり、そして表舞台に出ることになつた」

「そんな意味のわからないことを俺みたいな一般人に語つて何になる？」

「わからないのか？」

疑問を疑問で返され、そしてその答えを持ち合わせていなかつた碓氷は思わず押し黙る。

その様子を見ていた男はにやりと表情を歪め、そして次の言葉を口にした。

「お前自身がそのウイルスの一つだと言つていいんだよ」

端的に、そして簡単に言い放たれたその言葉に碓氷は思わず自分の耳を疑つた。

この男の言つていることは全て嘘なのかもしない。街が人間だなんてありえないし、そもそも特に変わつた生い立ちがあつたわけでもなく、今まで平凡に暮らしてきた碓氷が突然この街を危機に追い込むようなウイルスだなんて言われても『はいそうですか』と簡単に飲み込めるわけもない。

だが、この男の言葉にはどこか妙な説得力があった。

危険。

自然とそう判断した碓氷は一步、二歩と後ろに下がり、その場から逃げてしまおうかと思ったが、

「クハツ！」

それ以上動くことはできなかつた。

理由は単純。

碓氷の視界にあるものが映つたからだ。

それは少女だった。赤い紐状のリボンが特徴的な少し変わったデザインの白いセーラー服に、膝の少し上あたりまで長さのある紺色のプリーススカート。そして、カチューシャのような位置にリボンをつけて頭を装飾しているその少女は、

「逢瀬……？」

思わず目を疑つた。これは夢なんじゃないかと思った。

その少女は、シグナルと呼ばれた男のすぐ横で宙に浮いていた。意識を失っているのか、全身から力が抜けたかのように手足や頭はぶらんと垂れ下がっていて、碓氷の位置からではその見知った顔を見るることはできない。

すぐにでも解放してあげようと思わず駆け出そうとした。だが、それはできなかつた。

「おつと、動かない方がいい。それがお互いのためだ」

理由は逢瀬の喉元(のどもと)につきつけられた黒い刃。そしてそれを持つシグナルと名乗つた黒い男の存在。

「て、めえ……」

「クハッ！ クハハッ！ そう怒るなよ、俺の言いたいことは簡単だ。そう、ゲームをしよう。ルールも簡単なものだ。今からお前と俺が殺し合いをする、もしお前が負ければこの女も死ぬ。だがお前が勝てばコイツは自動的に解放される。どうだ？ シンプルかつ合理的なゲームだろ？」

突然出された提案に、碓氷の内から湧き出た感情は怒りだった。

「ふざけやがって……」

思わず声が漏れた。予想していない答えだつたためか、男の口から返事が飛んでくることはなかつた。

だが、それでいい。飛んできたところで碓氷はそれを無視して続けていただろう。

意図していなかつた展開に怪訝な表情を浮かべている男を無視し

て、碓氷は言葉を紡ぐ。

「ふざけやがつて！！ お前が逢瀬を人質に取つてゐる時点で絶対的に不利なのは俺の方だろ。いや、この際そんなことはどうでもいい。殺し合いをしようだ？ サツキから意味わからねえことをべらべらべら語りやがつて、いい加減うんざりだ。目的を言えよ、金が欲しいなら金が欲しいとハッキリ言え、そしたら一発ぶん殴るだけで勘弁しておいてやる！」

だがな、と碓氷は前置きをして、

「その過程で逢瀬を傷つけることになるなら俺はお前を許さねえ、氣い失うまでぶん殴つてきれいな川でも拝ませてや

「 ガンッ！ 」 という轟音が鳴り響いた。

そこで碓氷は思わず言葉を切つてしまつたが、驚くようなことはない。

ぞわり、と嫌なものが背筋に走つた気がした。

だが怯むことはない。まっすぐと相手を見据え、拳を握る。

「いいね」

刃は地面にめり込んでいた。音の原因はおそらくそれだろう。小さな石と砂利の中から剣を引き抜きながら、男は笑っていた。

「ああ、そうだ。楽しい。俺は今人並みに『楽しい』という感情をむき出しにしている。俺の目的はお前と戦うことだ。コイツを人質に使うようなことはしない。街を守るために街の住人を傷つけていては本末転倒だからな」

男は1・5mはあるであろう黒い刃を片手ひょいと持ち上げると、それを肩で担ぐ。

「別にお前と戦えるといつこの展開に対して『楽しい』という感情をむき出しがしているわけではない。それは一種の要因に過ぎない。俺が『楽しい』という感情を向けているのはこの街を救えるといつこの展開に対してもうけているものに過ぎない」

地面を踏む音がした。男が一步前に進んだのだと脳が理解するのに一秒もからなかつた。

対して、碓氷は身構える。その足を動かすことはない。動かす必要がないと判断したわけではない。動かすのは危険だと判断したからだ。

「さて、それじゃあゲームスタートだ」

愉快な声と共に、ものすごいスピードで男は碓氷へ向かつて突き進んでくる。

驚異的なスピードだったが、視認できないものではなかつた。突然現れた黒い剣や、自分の身長ほどの長さがある物質を片手で軽々と持ちながらそんなスピードでつっこんでくることのできる驚異的な身体能力も気になつたが、今はそれについて考えている暇はない。

ブウーン！と、シグナルが右手で持つ剣を振る。

横薙ぎの一撃。当たればもちろん胸の上あたりを境に碓氷の体は真つ二つになつていただろう。

だが、この場面で碓氷の下した判断は至つて冷静なものだつた。ただ下にしゃがむだけ。路上でのケンカでの経験もあつたが、この時の碓氷は極めて冷静に判断を行うことができていた。

原因はわからない。だが、考えている時間もない。

剣が風を切る音を聞いた碓氷はすばやくバネのように体を伸ばし、握つた拳を上に振り上げる。

ボクシングで言えばアッパー。それも、バネのように体を伸ばす勢いもプラスされているため、威力は相当なものになつていただろう。

大きい剣を振つた後の遠心力や体勢で男はそれを避けられるハズがない。振り上げた拳はそのままシグナルの顎へとヒットし

「クハツ！ 残念ハズレだ」

なかつた。

愉快な声が後ろから聞こえた。そう思つた時には既にシグナルは本来いるべき場所にはいなかつた。

後ろを振り向いている余裕なんてなかつた。脇腹に鈍い痛みが走つたと思つたら、そのまま碓氷の体は宙に投げ出され、一秒も経た

ない内にノーバウンドでコンクリートの壁へとぶつけられる。

背中に鈍い痛みが走った。脇腹あたりの痛みもまだ消えてはいない。体内から一気に酸素が吐き出され、少し呼吸が困難になつたため、声を上げることもできない。

何が起つたのか、全くわからなかつた。

コンクリートの壁からずるずると背中を引きずるようにして地面に落ちて、体の一部が地面についたと脳が認識したと同時に口の中に血の味が広がつた。

「がはっ！ げほっ！」

そこでようやく体内に酸素を取り込むことに成功した碓氷は、思わず咳き込むと同時に口に逆流してしまつた血を地面に吐き出す。

「クッハハハ！！」

そこで、嫌な声が聞こえた。

そちらを見ている暇もなかつた。

碓氷の真横、ちょうど左耳から30cm離れたあたりに黒い剣が激突し、コンクリートの壁が大きくえぐられる。

ガコツ！ といつ音が辺りに響いた。

その状況に一瞬目を見開いた碓氷だが、すぐに我に返ると体中が痛むのを無視して跳ね上がるよう立ち上がり、シグナルの顔面へと拳をぶつけようとする。

だが、

「遅い、それじゃ一生追いつけないぞノロマ」

バチーン！ と、肌を叩く音が響いた。

碓氷の左頬を、シグナルの左手の甲が叩いた音だった。

だが、たつたそれだけで、碓氷の体が先程と同じように吹き飛んだ。

今度は1mくらいふとんだところで、1、2回地面にバウンドしてようやく止まる程度の威力だったが、碓氷の左頬から遅れてじんじんとした痛みがやってくる。

路上のケンカというレベルではなかつた。

何もかもが異常だつた。そもそも、人間の体が簡単にふつとぶようなケンカなど前代未聞だつた。

まさに桁違い。

碓氷は路上のケンカには慣れている。おかげで、そこいらへんの不良相手に1対1なら絶対に勝てるし、2対1でも状況によつては勝てるという自信もある。つまり、ケンカが弱いというわけではない。だが、これはもはやそんな領域ではなかつた。

例えるなら、20歳くらいの大人が5歳くらいの子供を本気で相手して蹴散らしているようなものだ。

勝てるわけがなかつた。

「違うな」

ポツリ、とシグナルが呟いた。

彼は黒い剣をコンクリートの壁から引き抜き、そしてもう一度肩で担ぐと、

「違う、これは俺の知つている碓氷夕夜ではない。情報の手違いか？」『パンドラの箱』は碓氷夕夜が窮地きゆうちに立たされた時に開くといふ話だつたハズだ

相変わらず言つてゐる意味がわからなかつた。

だが、碓氷にはもう何もできない。ここで立ち上がり戦おうとしたところで、絶対に勝てるわけがない。

もうあきらめるしかない。そんなことを考えていた時だつた。

「なら仕方ない、アレを殺すか。街の一部を削るのはかなり痛いが人質を殺して強引に精神状態を不安定にさせれば『パンドラの箱』が開くかもしれないしな」

嫌な声が、妙に鮮明に碓氷の頭の中に入ってきた。

よくよく見てみると、碓氷の目の前に逢瀬はいない。ということは守るべき人物は後ろにいる。

嫌だつた。

何が嫌なのかはわからない。ただ、そんな気持ちに応えるように、
碓氷の全身に力が少しだけ戻ってきていた。

だから彼は立つた。何ができるのかなんてわからない。こんなボロボロな体で挑んだところで勝てるとも思わない。だけど、その結果、逢瀬が助かればそれでいいと思つた。

全身の力を振り絞り、男に向かつてほぼ転がるような形で突撃する。

男は碓氷の拳を少し横にズレるだけで簡単にかわすと、そのまま碓氷の襟を掴んで思い切り投げつける。

碓氷の襟を掴んで思い切り投げつける

体がふわりと浮いた。夜の冷たい空氣に心地よさを感じたと思つたら、一秒後には一転して背中に激痛が走つた。コンクリートの壁にぶつかつたと理解するのに何秒かかったのかわからなかつた。確氷の体はそのままずるずるとコンクリートの壁を伝い、地面に落ちる。だが、倒れるのではない。確氷は一本の足で地面に立つと、ふらりとコンクリートの壁から背中を離し、自身の力のみで立つ。

「・・・ナメているな

再びシグナルの声が聞こえた。

頭を上げることも困難なので、男の表情を窺つることはできないが、
声の質から苛立つているのがわかる。

「僕は死んでもいい、その代わり」の子だけは助けてくださいといふ展開か？おもしろくない、俺の求めている展開はそんなくだらぬものではない。『パンドラの箱』を開かないお前などただのゴミだ。できないなら勝ち目はない。そしてお前の死は同時にソイツの死を意味している

(違う)

ふと、そんなことを思った。

ふと、そんなことを思った。

『パンドラの箱』を開くことができないということに対しても、で
はない。そもそも『パンドラの箱』なんて知らないし、どこにある
のかもわからない。仮に目の前に突然現れたとしても、開くことな
どできないだろう。

勝ち目がない、ということに対してもない。勝ち目がないとい
うのはわかりきっている。だからこそ、立ち上がり、必死に少な
い可能性に賭けているのだ。

(全然違う)

全てが違う。シグナルという男が言つた言葉の全てに対しても言つ
ているわけではない。

むしろ、碓氷がこの時点ではシグナルの言葉を聞いていたのかどう
かすらわからない。

彼が違うと言つたもの、それは数秒前の自分が思ったこと。

もし仮に自分が助からなかつたとしても、逢瀬さえ助かればそれ
でいい。

(そんなものじゃない！ 僕が守りたいものはそんなもののじゃない！)

何がが、動いたような気がした。

それを『動いた』と表現していいのがどうかはわからない。もし
かしたら『すり抜けた』というのが正解かもしないし、『落ちた』
というのが正解なのかもしない。

だけど、そんなことはどうでもよかつた。

「まあいい」

無言の碓氷に対し、男はつまらなさそうに言葉を紡ぐ。

「少しばやいが、これでゲームオーバーだ」

言い終えると同時に、男は剣の柄^{つか}を握る手の形を変え、大きく振り
かぶるとそのままブウン！ と槍投げのように碓氷へと剣を投げつ
ける。

殺すつもりはなかつた。ゲームのルールは全てハッタリ。碓氷を殺すつもりはなかつたし、少女を殺す気もなかつた。

だから、狙いは碓氷の右腕。そこに刺さればひとまず碓氷は戦闘不能だ。

剣はものすごいスピードで夜の闇の中を突き進み、碓氷の右腕へと向かう。

そこで、シグナルは思わず目を見開いた。

妙だった。

碓氷の右腕が、妙に上にあがっている。

その姿はまるで右腕で剣を掲もうとしているように見えた。

そして、その比喩表現は間違つてはいなかつた。

漆黒の剣が碓氷の右腕へと突き進み、そして右手へと突き刺さるうとした瞬間、碓氷がそれを握りつぶすような動作をしただけで、それは消えた。

「なん・・・!?」

シグナルの顔から余裕が消える。代わりに浮き出てきたのは『驚愕』。

ありえない光景に思わず絶句するシグナルに対し、碓氷は『ブラリ』と下げる左腕を何かを払うように横に動かす。

そこから、何か黒い粉が現れた。

シグナルにはそれが何なのがわかる。自分が今まで使っていた漆黒の剣。その正体は自身の能力を使って具現化させた刃に、砂鉄をとりつけることによって生み出された『視認できる刃』だつたからだ。

即ち、黒い粉の正体は元は刃だったもの。

何が起こったのかはわからなかつたが、とりあえずこれで『パンドラの箱』は開いた。

そして、それを開いてしまつた人物は、ゆらりと一步足を前に踏み出す。

明確な戦意が伝わってきた。それだけでシグナルは笑つた。

だが、田の前の人物はそれを気にしない。

「違う」「違う」

ポツリ、と。碓氷が小さく呟いた。

「全然違う！」

その声に、明確な意志が宿る。

シグナルに向けられたものではない。今の碓氷に向けられたものでもない。おそらく、それは碓氷の中に残っている『過去の自分』、それを全て拭い去るために向けられた言葉。

「俺が守りたかったのはそんなものじゃない。俺が守りたかったのはもっとちっぽけで、でもとても大切な、かけがえのないものだつたはずだ！」

瞳に力が宿る。目標は定まつた。いや、元に戻つたと言つべきだろつ。

「それを守るために俺は絶対に死なない。その上で逢瀬を絶対に助け出す！ そのためにお前をぶん殴る、以上だクソッタレ！！」

ダツ！ と、碓氷の足が力強く地面を蹴る。

戦闘が始まつた。

自分の守るべきもののための戦い。シグナルの守るべきものはこの街。

そして、碓氷の守るべきものとは、例えば授業中に眠つたり、起こされて逢瀬と会話したり、天月どバカをやつたりするちっぽけな日常。その日常を作るためには誰一人として欠けてはならない。

だからこそ、碓氷は戦う。

ガキイイイイン！！ という甲高い音が、夜の路地裏に響き渡る。一方は鉄パイプ。一方は黒い刃。

どちらが強いかなど一目瞭然の武器がぶつかり、そして音を立てる。

鍔^ゼ(つば) — 迫り合いになることはなかつた。当然だろつ、ぶつ

かつた衝撃だけで鉄パイプはぐにやりと直角に曲がり、使い物にはならなくなる程度の強度しかない。

元々そこらへんに落ちていたものを拾つて使用しただけなので特別な力などあるわけではなく、そんなもので特別な何かに対抗するなど無理な話だったのだろう。

対し、黒い刃は鉄パイプの強度をすり抜け、そして主へと襲いかかる。

が、刃が碓氷を斬り裂くことはなかつた。彼は既に鉄パイプから手を離していて、そのまますべりこむように強引に体を安全なスペースへと避難させ、そこから反撃の一撃を放つ。

今回もアッパー。地面をすべるように拳を振り上げ、握った拳を一気に相手の顎^{あご}目^めがけて思い切り振り上げる。

しかし当たらない。

そしてこれも予想の範疇^{はんちゅう}だ。

既に目の前に相手はいない。ブウン！ といつ空気が妙に乱れた音が聞こえてきたことから予想するに、身体強化でもしているのだろう。でなければ、アニメやマンガのようなあのスピードをどうやって出しているのか説明がつかない。

だが問題はない。シグナルの攻撃が命中する前に、碓氷の拳も既に動いている。だが、今度は右手ではない。

つまり左手。握った左手を、そのまま体ごと回転させてそれを背後へと送る。

簡単に言つてみれば裏拳。そして、相手にとつてもこれは予想外だつたらしい。ものすごいスピードで碓氷の後ろへと回りこんでいたシグナルは、咄嗟に左腕で顔面をガードし、碓氷の裏拳が腕にヒットすると同時に一気に後ろに下がる。

ズザザア！！ と、靴が地面を削る音が聞こえた。

追い打ちはしない。乱れた呼吸を整え、眼前にいる敵を互いに睨めつける。

「クハツ！ 少しだけとはい『パンドラの箱』を開いただけで

まるで別人だな。なるほどこれがアイツの言つ覚醒というヤツか？」

「相変わらず意味のわからないことはかりほさきやかって、『ハンドラの箱』やら覚醒やらが何なのか知らねえが俺の身体能力が上がったわけでもなければ念じただけで物が浮くような超能力を使えるようになつたわけでもない。つまり俺は俺に変わりねえ、『パンドラの箱』とやらが何なのかは知らないが勝手に人を超人扱いするんじゃねえよ」

「確かにお前の身体能力は上がつてはいない。だが超能力が使えないというの間違つただ。いや、正確には超能力ではないがこの際それはどうでもいい」

ダンツ！ と、誰かが地面を蹴つた。

碓氷ではない。それはシケナルの足元から発せられた音だ。

この瞬間、決して戻れない日が前にいたのではなかつたのではないかと思えるほどの速さだつた。

へと意識を集中せらる。

それだけで、黒い刃がまるで手品のよつに消えた。

氣付いていないのか、シグナルの右腕がそのまままるで見えない
剣があるかのように振るわれる。だが、そんなものはない。シグナ
ルの右腕が虚しく空を切ると同時、碓氷は迷わず握った拳を前に突
きだす。

狙いは顔面。ルートは確実に確定していたし、そのままそのラインに吸い込まれるように拳を振り抜けば一撃でしとめられるはずだった。

だが、やはりそう簡単にはいかない。

シグナルは咄嗟に左手で碓氷の右手首をつかんで拳を止めると、そのまま一本釣りでもするかのように碓氷の体を思い切り自身の後方へと投げつける。

体が宙に浮くなどといつレアな体験をした碓氷だったが、それでも彼は妙に冷静だった。

空中でなんとなく体を安定させると、そのまま地面に着地する。靴が地面を大きく削りながらも、なんとか無事に着地するという驚異的な大技を無意識でやつてのけた碓氷は、次の攻撃に備えようと体勢を整え、シグナルがいる方向へと視線を向ける。

だが、攻撃は来ない。

シグナルはただにやにやとした笑みを浮かべてこちらを見つめているのみで、動く様子はまるでない。

不思議だった。

今まで圧倒的優位に立っていたシグナルが、思い切り隙を作っている碓氷に攻撃を加えないといつ状況に、碓氷はなんとなく違和感を覚えた。

「クハハッ！ 超能力が使えないだと？ 立派に使っているじゃないか。お前は自身の能力を使って俺の剣を消した。いや、正確には『吸収した』というべきか？ そして……」

シグナルが何かを言いかけたところで、碓氷は左腕を横に大きく振った。まるで何かを真横に投げるような動作だった。それだけの動作で、碓氷の左腕から何か黒い粉のようなものが周囲に飛び散った。

その正体は砂鉄。

シグナルが自身の剣を視認できるように、自身の武器に取り付けて扱っていたもの。

碓氷はそれを周囲へとちらりばめながら、

「これで『放出』ってワケだ。まだ2回しか使ってねえのにタネを見破られるとは思いもしてなかつたけどまあバレちまつたもんは仕方ない。形あるもの・ないもの問わずどつかの空間にものを『吸収』し、それを『放出』する。それが俺の能力らしいな」

言い終えると同時に、勢いよく地面を蹴る音を合図に碓氷がシグナルに突撃した。

勢いはそこまでのものではなかつただろう。能力を手に入れたとはいえ、急に体の傷が癒えたわけではないし、急にパワーアップを遂げて傷が気にならなくなつたということもない。

碓氷の体は実質ボロボロだ。だが、それでも精一杯の力を振り絞つて、碓氷は守るべきもののために走る。

拳を握つた。走つて拳をぶつけるまでに時間はそつかからなかつた。

だが拳がヒットすることはない。握つた拳は思い切り空を切り、シグナルの姿はどこかへ消える。これまでの経験から察するに、身体能力を強化して回避し、攻撃に転じようと驚異的なスピードで移動したのだろう。

しかし、それでいい。碓氷が狙つていたのはそれだ。

碓氷はそのままの勢いで思い切り前にダイブする。その上ギリギリを、背後から迫つていたシグナルが放つた左手の手刀が横切つた。

「なつ　！？」

かわされることを予期していなかつたのか、思わずシグナルが驚愕に目を見開くが、そこで止まる碓氷ではない。彼は受け身をとるように地面を転がると、体勢を整えてシグナルへと再度突撃する。前と同じ右手による一撃。何度もかわされ、全く通用しなかつた一撃。

だが、シグナルはそれを避けずに左手で受け止めた。

（予想通り・・・つ！）

しかしここで止まるのもダメだ。今度はシグナルの持つ剣へと意識を集中させると、それを『吸収』する。これで反撃で即死する可能性はなくなつた。

そしてそのまま空いた左手を握ると、それをシグナルの腹へとい切りたたき込む。

「が、はつ　！？」

予想外の一撃だったのだろう。慌てたシグナルは、碓氷の右手を離すと大きく後ろへと飛び、距離を空ける。

その様子を見ていた碓氷が浮かべた表情は、あまり良いものではなかつた。

思ったより効いていない。せいぜい鳩尾みぞおちに衝撃を与えられて咳き込んだ程度だろう。原因はおそらく効き手ではなかつたことと、体に蓄積されたダメージ。

それでも一撃は一撃。今まで勝負にもなつていなかつた相手に、始めて一撃をお見舞いした。これは大きな前進だ。

「ク、ハッ・・・流石『パンドラの箱』と言つべきか？ 僕に一撃を与えるとは思つてもみなかつたぞ」

「お前は弱点晒しそうなんだよ、俺はそこをついただけだ」

吐き捨てるような碓氷の言葉に、シグナルの表情が少し歪む。どうやら的を得ていたのだろう。碓氷は乱れた呼吸を一度整えると、

「まずお前の行動パターンがおかしい。確かに背後に回り込んで攻撃するつてのは効果的だ、だが同じ手を何度も使いすぎている。その理由はお前は自身の能力で身体強化か何かしているらしいがそれをコントロールしきれず、そのためには経験に頼つていたからだ」「・・・」

「簡単に言つてしまえば、お前はあの高速移動中に狙つた箇所に攻撃を与えることができない。そりやそうだろうな、あんなスピードで攻撃を正確に狙つた箇所に命中させることができんならそれは神業だ。だからこそあんたは自分が一番経験が多く、やりやすい『背後に回り込んで攻撃』することしかできなかつた。まあこれは主にカウンターの時だけしかやって来ないからわざわざ攻撃してそれを誘う必要があつたんだけどな」

シグナルの表情がさらに歪む。既に彼の表情に余裕はない。

「あともう一つはお前の能力制限だ」

ピクリ、とシグナルの肩が動いた気がした。だが、碓氷は気にせず続ける。

「お前は俺が能力を使えるようになつてから初めて不意打ちをし

た時、つまり身体能力を強化して投げ飛ばした俺が地面に着地した時に、俺が体勢を崩していく隙だらけだったにも関わらず、もう一度身体強化能力を使って追い打ちを加えずにつの場で立ち止まつて一度様子を見た。あといちいち俺の攻撃を腕や手を使ってガードした時のも同じだ」

つまり、と碓氷は前置きして、

「お前はその能力を連續して使用することはできない。身体強化していられる時間は大体10秒くらい、そして次の能力を使うまでに必要な時間は大体30秒くらいだ」

考えてみれば簡単なことだった。

あんな強すぎる能力がそうポンポン使えるのであれば、碓氷はほんの数秒でやられていたはずだ。だが、シグナルはそれをしなかつた。それにはそういう理由があつたからだ。

「クハッ！ 思つたよりやるじやないか『パンドラの箱』・・・

そこまでわかつているのならもう遠慮はいらないよな

ゆらり、と。シグナルの体が揺れた。

それと同時に夜の裏路地に一迅の風が吹いた。

「・・・？」

碓氷が怪訝な表情を浮かべるが、目の前の光景を見てすぐにその表情は変わる。

驚愕。

そんな碓氷の表情を見て、シグナルはにやりと大きく表情を歪める。

「クッハハハ！ お前が長話をしていくてくれたおかげで用意するのは簡単だつたぞ。流石にこれだけの数を揃えようと思つたら時間がかかるからな

黒い刃があつた。

それも一つではない。無数の刃がシグナルの後ろに浮いている。

「さて、そろそろ紹介しようか。これが俺の能力『增幅くブースト』。本来はあらゆる現象をゼロから無限に増幅させることができ

能で逆に減少も可能だ。つまり簡単に言つてしまえばほとんどの事象を操ることができる能力と思つてくれればいい。身体強化はそれの一部に過ぎない。この刃も風を增幅、減少させることによつて刃を作り、そこに砂鉄を加えて視認できるようにしているだけに過ぎない」

そして、**ビシグナル**は前置をして、

「これが俺の本来のバトルスタイルだ。まあ存分に味わってくれたまえ！」

シグナルの指が動いた。それを合図にするように、無数の刃も動き出す。

怒号を聞いた気がした。

ブウン！ と思い切り碓氷が何かを投げた。それはくの字型に折
れ曲がった鉄パイプだった。

ブーメランのようになれば、本来より安定した速度で空中を進み、やがて黒い刃に激突する。

そして
切り裂かれた

たが、切り裂かれたのは鉄バイブではない。

驚いたのはシグナルの方だった。黒いカーテンをつきやぶり、飛んできたそれを思わず身体強化した右腕で弾き飛ばす。

そんな彼の視界に次に入ってきたのは、一人の少年の姿だった。声を出す暇などなかつた。既に少年の拳は強く握られている。も

う身体強化は使えない。先程の一撃が効いているのと、鉄パイプをはじいたせいでガードが間に合わない。

そんな中で、彼はこんな言葉を聞いた気がした。

「最後は自分の拳に頼るのが常識だクソヤロウ、わかつたら黙つてそこらへんに転がつてろ」

轟音が炸裂した。

それは碓氷の拳が確実にシグナルの顔を捉えた音だつた。
思い切り地面を転がり、数メートル離れたところでようやく止まつたシグナルが起き上がる様子はない。

それと同時に、今まで宙に浮いていた逢瀬が解放され、地面に落ちようとしていたのを、碓氷は優しく受け止めていた。

碓氷は逢瀬に特に傷などが見受けられないのを確認すると気が抜けたのか少しふらついた。

（ヤバいな…。安心したら痛みだしやがつた…。）

碓氷は体の痛みを堪えながらも、この場所から離れるために歩き始めた。

がすぐに蹠^{すね}走りで倒れてしまった。

（駄目だ…。力が…入ら……。逢…瀬…。）

薄れ行く意識の中で碓氷が最後に見たものは林の中で出会った少女だった。

「…お疲れ様。」

夕緋は小さく咳くとシグナルに目を向けていた。

災禍の幕開け 1（後書き）

正直に言おう。

このバトルシーン、書きなおしたい・・・orz

ちなみに一章タイトルはつゆ一時間前くらいに決まったものだったりw

災禍の幕開け 2（前書き）

新キャラ登場。

今回は神無月さんの番です！

仰向けに倒れているシグナルは見上げる形で視線を返すことになり、いつもは自分が見下ろす立場なのでそれは少し屈辱的であった。

同時に、わずかな疑問が浮かぶ。

「……どういう風の吹き回しかな？　お前が、忌み嫌つてははずの俺にねぎらいの言葉を掛けるなんてよお」

「……別に深い意味なんてない。『パンドラの箱』を開けるのは私の目的の一つでもあったから、それをあなたが果たしてくれて楽が出来たわ」

「ハツ。つまり、私の代理で仕事をしてくれてありがとう、ってか？　律儀だねえ。いつもはつれない態度の夕緋ちゃんが『でレてくれてお兄さん感激だぶほつ！？』

「……調子に乗らないで」

寝転がっているうえに不意打ちで繰り出されたキックを、なす術もなく受けたシグナル。見た目は幼いものの、容赦のない一撃に横腹がじくじくと痛み始めた。

「てめえ……それが満身創痍の相手にする行為かよ……！」

「……ええ、辛^{つら}そうにしている嫌いな人を苦しめるのは、気分がいいわ」

「お前、後で泣かす……！」

「……大人げないわね。大体、本氣で戦つてもいのに満身創痍とかよく言つわ」

その言葉に、シグナルが押し黙る。

「……確かにあなたの能力は弱点が多いし、強力ゆえに制御が難しい。でも、一般的な喧嘩程度にしか戦闘経験のない高校生が相手なら、今みたいな体たらくなれるはずないわ」

夕緋は本当にねぎらいの言葉をかけるだけの用件だつたらしく、踵を返して立ち去ろうとする。

その背中に向かって、シグナルは問いを飛ばした。

「にしてもよお、本当にこれで良かつたのかい？　まだ留め具の1つを外したに過ぎないとはいえ、碓氷夕夜は『パンドラの箱』を開けた。こうなつた以上、あいつはもうこれまでの日常から乖離せざるを得ないぜ？」

「……出来ることなら回避したかつたけど、仕方のないことだから」「クハハッ！　そうかいそうかい」

「……それに、私の考え方や気持ちに関わらず、あなたは『パンドラの箱』を開けさせるつもりだつた。悔しいけど、私ではあなたを止められないから」

「クハハッ。その通りだ。俺は街^{おれ}のために碓氷夕夜を利用する。それが俺の目的を果たすための手段。誰であろうと、邪魔はさせねえ。もつとも」

シグナルは倒れ伏す碓氷を横目に捉え、歪^{ヒガ}な笑みを引っ込める

「あいつが街^{おれ}の害毒となるなら、その時は手加減なしでぶつ潰してやるけどな」

無感情な殺意を乗せて、そう言い放った。

それに反応して、夕緋がシグナルを射抜くように睨みつける。

「……その時は、流石に私も邪魔をするわよ」

「止められないと分かっているのに、か？」

「……言ったでしょう？　あなたの能力はとても強いけど、制御が

難しく弱点もある。私一人では無理でも、覚醒した夕夜と共闘すれば勝てないことは無いわ」

「クハハッ！　面白え」

夕緋の言葉を受けて、歪な笑みを取り戻すシグナル。

「だが、俺は夕緋は殺さない。害毒となり得ない住人を殺すのは、俺の主義に反するからな。ただし、長期の病院生活は覚悟しどけ。

……つて、寝転がつたまま言つても示しがつかねえな。よつと

シグナルが起き上がり、衣服に付着した埃や砂粒を払い落とす。ポケットから白い清潔なハンカチを取り出して、シルバーアクセサリの微かな汚れも拭き取る。

特に、銀の十字架のネックレスは念入りに。

「……そのネックレス、大事にしてるのね」

「当たり前だ」

短く答えるシグナル。

直後、その姿が突然消えた。

しかし、夕緋は微塵も驚かない。いたつて冷静に、空中のある一点を見つめる。

空氣以外何もないその位置に、シグナルが立っていた。
シグナルは夕緋を見下ろしてニヤニヤとしている。お互いの視線の高さが逆転して気分がいいのだろう。加えて、背の小さい夕緋へのいつものちょっとした意地悪もある。

だが、対する夕緋はもはやこの程度では怒りも苛立ちもしない。それどころか何の感想も抱かないほどにこの意地悪には慣れている。もつとも、好感度ならぬ嫌感度はいつものように上昇したが。

「それではまた会おう、夕緋。少年も、なかなかに楽しい夜だったよ」

そう口にして、今度こそシグナルは消え失せた。

夕緋も立ち去ろうとして……ふと、地面に倒れている2人の人物に視線を向けた。

碓氷夕夜と逢瀬優夏。両方氣を失っているものの、夕夜が優夏に覆いかぶさるという、ちょっと大変な格好になつている。

「…………つ」

夕緋はそれを目視して、シグナルに意地悪されても湧かなかつた怒りや苛立ちを感じた……気がした。

とりあえず、2人を引き剥がすことにする。親切心。そう、これは親切心からの行いだ。もし誰かに見つかったら夕夜の世間体が危うくなるから、それを未然に防ぐためだ。

「……手加減されていたとはいえ、一応あのシグナルを倒したんだから、あなたにも言っておくわ」

夕緋が仰向けにした夕夜の顔を見つめる。

そして 優しく微笑んだ。

「……お疲れ様」

(結局、なんだつたんだあの男は……?)

4時間目の授業の終了と、昼休みの開始を告げるチャイムを聞き流しながら、碓氷は考えに耽る。

帰宅中の路地に突然現れて、何かよく分からぬことをのたまつて、理不尽に喧嘩……いや、戦闘を売つてきたシグナルという男。(何かがこの街をおかしくさせたとか、俺がそのウイルスだとか、いつたい何のこっちゃ……)

推測しようにも材料が少なすぎてさっぱり分からない。

ただ、1つだけ気になる単語がある。

(『パンドラの箱』……ねえ)

パンドラの箱。その単語自体は碓氷も少しだけ知っている。パンドラという女性が様々な災厄の詰まつた箱を開けてしまい、世界に絶望が広がった。しかし、その箱の底には一つの希望が残っていた、とかそんな話のはず。

ただ、シグナルの言ひ『パンドラの箱』が何を指しているのかは分からない。あの男の口ぶりからすると碓氷が所有しているらしいが、それでもやはり分からないのだから仕方がない。

そしてあの男の出現は、碓氷に1つの変化をもたらした。

クラスの皆が持参の弁当を広げたり、購買部へパンを買いに求めたり、食堂へ向かつたりと各自が昼食を楽しもうとする中、碓氷も

昼食の準備を進める。

とはいっても、登校中によく利用する「コンビニ」で買ったから揚げ弁当を取り出すだけ。コンビニ弁当の割にはやけに瑞々しい野菜や甘く柔らかいご飯も魅力的だが、碓氷の目には大好物のから揚げが中央に映る。

そのから揚げへと手を伸ばすと　　から揚げが、1つ消えた。
別に目にも止まらぬ速さで食べたのではない。これが変化　超
能力の取得だ。

今度は左手を伸ばすと……突如、消えたはずのから揚げが出現し、元の位置に身を置いた。

「わ、わ、なに今の！　手品？　碓氷君ついぱいつの間にそんなス
キルを！」

「……見てたのか、逢瀬」

どうやら、能力の行使　『吸收』と『放出』の一連の流れには、
逢瀬という観客がいたようだ。しかし本人は手品だと思っているら
しいので、首肯しておぐ。

「ま、そんなどうだ」

「なに？　碓氷君はいま手品にハマってるの？　ゆくゆくは世界的
有名マジシャンになる予定？　そして私がその妻になるのね！」

「残念ながら逢瀬の言つていることは全てハズレだ」

「うぐう……いつものことながらフラれてしまった……でも、いつ
ものことながら諦めないのが私。もっと頑張つて難攻不落の碓氷君
を撃墜してみせる！」

「言葉が過激だな、おい」

昨夜、気絶から回復した後、碓氷はいまだに気を失っていた逢瀬
を起こした。逢瀬は気を失う前の記憶が曖昧なようで、状況をどう
説明したものかと碓氷は頭を悩ませた。が、結局のところそれは徒
労だった。何故なら逢瀬が、「ダーリンが傍にいるといつこの幸せ
が夢じやないなら、万事OK」となんとも彼女らしい理屈で解決し
たからだ。あまり今回の出来事に彼女を関わらせたくない碓氷にと

つては、この時ばかりは盲目気味な彼女の自分への好意に感謝した。その後は念のため逢瀬を家まで送り届けて、別れた。

(にしても、相変わらず元気だな、逢瀬は)

今日になつて逢瀬の様子に悪い変化はないか碓氷は心配していたが、どうやら杞憂だつたらしい。逢瀬はいたつていつも通りだ。

そして自分の日常もいつも通りなら、あいつが茶化してくるはず。

「よつ、碓氷。今日も今日とて、夫婦仲睦まじく愛妻弁当してるのか」

「天月、俺と逢瀬はそんな関係じゃない。あと、俺のはコンビニ弁当だ。そして日本語がおかしいぞ」

「律儀なツツ『ミ』、ありがとうございます」と

「どうか、夫婦仲睦まじくとか言うなら邪魔しないで欲しいかな

「悪いな、逢瀬。今日は2人のやり取りを肴さかなにランチしたい気分なんだ」

「で、今日のお前のランチメニューが……それか？」

碓氷が指差したのは、天月の手にある1つのスナック菓子。普段から菓子パンや惣菜パンが天月の昼食という栄養の偏ったチョイスだが、今日はより一層ひどい。ちなみに「コンソメ味である。

「ああ。今日はスナック菓子の気分なんだ」

「いくらなんでもそれはないだろ」

「ほぼ毎日、から揚げ弁当の碓氷君が言える台詞だいしじゃないと思つけど……」

「確かに……」

「こ、この子は悪くないぞ！」

逢瀬と天月がそろつて呆れ返つた視線を、碓氷とから揚げ弁当に突き刺す。そして碓氷はその社会の批判から守るため、から揚げ弁当に覆いかぶさる。

「まあ、それは置いといて、だ。菓子パンならともかく、お菓子は学校に持つてきたらダメなはずだ」

「なんだ、碓氷。仮にも風紀委員である俺に説教するのか?」

「いや、だつたら尚更ダメだろ！？　じゃなくて、またそやつて

校則破つたりしたら　」

「ちょっと、天月君！　その手に持つている物はなんですか！？」

鋭い一喝が、賑やかな教室に響いた。

けれど、他のクラスメイトは声の方を振り向いたりはしない。何故なら、もはや毎日あるかないかぐらいの出来事だから。最終的に、振り向いたのは碓氷、逢瀬、天月の3人だけ。

（あー、やつぱり来たか）

そこには碓氷が予想・危惧したとおりの人物がいた。

美原紗希。みはらさき 整った顔立ちに、腰にまで伸びる長い髪をストレートに下ろした容姿で、狙っている男子も多いといふ噂。噂 けれど風紀委員の委員長を務める3年生ということで攻略難易度が高いと評価されている。また、それでも告白に臨んだ男子のことごとくを素っ気なくつつている事実も小さくない一因である。

「おー、委員長。いらっしゃい！」

「いらっしゃい、じゃないでしょ！？」

柳眉を逆立てた美原が天月に詰め寄る。

普段の美原は、突然のガラスの破碎音にも動じないほど冷静沈着としている。が、相手が天月だと、話が異なる。

天月は風紀委員でありながら、風紀委員らしからぬ生活態度をとつていて。今回のお菓子持ち込みが良い例だ。当然、風紀委員長である美原はそんな天月に注意をする。しかし、これまで何度も注意しても天月は生活態度を改めてこなかつた。対する美原も、その眞面目な性格と風紀委員長の責務から諦めることなく注意を繰り返し、今となつては忙しくなければ昼休みに様子を見に来る程である。

「何度言えば分かるんですか！　風紀委員が自ら風紀を乱してどうするんです！？」

「あー、それは耳タコだぜ、委員長。正直、聞き飽きた」

「聞き飽きていても理解していないから何度も言うんですけど…」

美人が起ると怖いと聞くが、それは本当のことだ。整った容貌

を鋭い眼光と剣呑で彩つて田の前にされたら、獰猛な虎さえも萎縮してしまいそうな霸氣がある。今こそ日常の一部と化して慣れてしまったが、初めは傍^{そば}で見てているだけの碓氷と逢瀬もビクビクしていたものだ。だが、その時も天月はマイペースを保っていたのだから、こいつの肝つ玉は尋常じやないと碓氷は思った。

「とりあえず、用件は分かっていますよね？ そのお菓子は没収します」

「それは勘弁してくれないかな。これ、今日の昼飯なんだ」

「関係ありません。それにお菓子が昼食だなんて認められません」

「それ言つたら、俺は何を食べればいいんだ？ 遂には菓子パンも認めないとこの前言つたし」

「お弁当や惣菜パンは認めています」

「厳しいなあ……そんなに言つんだつたら、委員長が俺の分の弁当も作つてきてほしいぜ」

「な つ！？」

瞬間、動搖とともに美原の顔が朱色を示した。田を見開き、金魚のように口をパクパクさせる。

「いやあ分かりやすいねえ、美原さん」

「だな。他の男子が同じことを言つても、きっと無反応だろ！」

「その美原の様子を目にして感想を漏らす逢瀬と碓氷。

「な、な、何を言つているんですか！ そんな事をしたら不純異性交遊だと誤解されるじゃないですか！」

「だよなあー。やつぱり嫌か」

「いえ、嫌じやないというか、むしろ……」

「ん？ なに？」

「な、なんでもありませんっ！」

顔を真つ赤にして叫ぶ美原。色々な意味で鈍感な天月は疑問符を浮かべるばかりで、クラスの男子からの羨望と嫉妬の入り混じった視線にも気づかない。

「とにかく、お菓子は没収します。放課後には返しますから、取り

に来てください」

美原が右手を差し出す。強引に奪つたりはせず、あくまでも本人の意思で渡してもらい、没収するつもりのようだ。

「反抗しても、お互いの昼休みが削れるだけだろうなあ……。はいよ」

天月が大人しくスナック菓子を手渡す。

その際、お互いの指先が触れ合つた。

「 っ！」

ただそれだけで美原の赤面度がトマトから完熟トマトくらいに上昇した。

スナック菓子を受け取ると、美原はそれを抱えて逃げるように教室を飛び出していった。

「相変わらず委員長には嫌われるな、俺」

「……それを本気で言つてるから大したもんだ」

「うん、美原さんが様子を見に来るのだって、天月君に会いたいからなのに」

「お菓子はともかく、菓子パンを昼食に認めないのだって最低限の栄養バランスを心配して、だしな」

「そうそう」

ここまで来ると、もう呆れを通り越して感心する以外になかった。「んじゃ、俺は代わりの惣菜パンでも買ってくるよ。口クなのが残つてないと思うけどな」

没収されたのを気にする風もなく、天月が教室から去る。

「はてさて。これから先、あの2人の関係がどうなるか楽しみだね、碓氷君」

「そんなことより、飯にしよう。空腹が反乱を起こしているんだ」「りょーかいりょーかい」

弁当を広げ始める逢瀬を視界の端に收め、から揚げを口に運びながら、碓氷は思う。

（ああ、やっぱ俺はこの日常が好きだ。街がどうとか、『バンド

ラの箱『がどうとか、関係ねえ。』の日常を脅かすなり、俺の友達を傷つけるなら……敵が誰であろうと、ぶつ飛ばしてやる。そして同時に、こうも思う。

(……から揚げ、最高に美味しい！)

災禍の幕開け 2（後書き）

この世界にはリア充しかいないのか・・・！－orz
3週目終わったら書く順番を変えようかなと思つてるw

災禍の幕開け 3（前書き）

二回動で実況を見ながらの更新。案外うｐは簡単にできちゃったりする。

今回は義人さんの番です！（個人的に今一番力オスなのがこの人だと思つてます・・・w）

その日の放課後、俺はいつものように逢瀬に付き纏われつつ帰宅の最中だった。

今日という日、いや学校といつコモニティーがあまりに日常的で俺の中で昨夜の非日常が霞み始めた頃 校門に差し掛かる俺に最も『日常』から遠い存在が声を掛けってきた。

「やあ 怪我はもういいのかい？」

シルバーアクセがじゅらじゅらじゅら。校門に寄り掛かるようにして立つ眉田秀麗な男……シグナルが陽気な声を掛けってきた。予想だにしなかった。

当たり前と言えば当たり前だと思つ。昨日の今日で会つような相手だとは誰も考えない。

昨晩の恐怖が蘇る。まるで心臓を驚づかみにされたような恐怖だ。落ち着け……！ 大丈夫だ！ 俺はコイツに勝つてる！ 襲い掛かる恐怖感を『勝利』という自信で補い勇気を奮い立たせる。

しかし俺はそこでハッと気付いた。
状況が違う。

周囲ではまだ下校中の生徒が大勢居る。
逢瀬だつて昨日と違つて安全な場所に居るという最低限の安全の保障がある訳でもない。

ココに居る全員を守りながら戦えるのか……？

無理だ

俺は無理矢理恐怖を振り払う。

やるなら今しかない。

先手必勝！ それしかない。殴つて逃げて、一先ず誰も巻き込ま

ない場所へ行く。

そう判断した俺はシグナルに殴りかかる。

だが、

「 そう慌てるなよ、少年」

その言葉と共にシグナルは俺の拳に自身の拳をぶつけてくる。

「 痛つ！ …… てえ？」

拳と拳が勢いよくぶつかる。だが、おかしな事に痛みは全くない。俺が驚いていると、

「 『増幅くブースト』。教えたるう～～俺の能力。増やすだけじゃなくて減らす事もできるんだよ」

シグナルが小声で補足説明をしてくる。だが、俺にとってそんな事はどうでもいい。

「 なつ

「 何してるのダーリン？！」

何の用だよ！ そう俺がシグナルに叫ぶより早く。逢瀬が俺に声を掛けってきた。

マズい。逃げろ！ そう叫ぼうとした瞬間、俺はシグナルに口を塞がれた。そして、

「 やあ、優夏ちゃん。久しぶり

「 あ、シグナルさん、お久しぶりです」

……ゑ？

そこには俺の予想しない受け答えがあつた。

「 つて、昨日会ったばかりだから久しぶりじゃないですよ」

「 ああそりだつたね。因みにコレは男同士の挨拶みたいなものだから心配しなくていいよ」

「 そりなんですか？ いきなりダーリンが殴りかかった時は焦っちゃいましたよ～」

……あれ？

「 アハハ、ごめんね～。ところであの後大丈夫だった？ 間違えてお酒飲ませちゃつたからあちや～とか思つて心配だつたんだけど…

…

「ええ？！ ちょ、シグナルさん、私にお酒なんて飲ませたんですか？！ 道理で昨日の記憶が飛んでおかしいな」とか思つてたんですよ？！」

「アハハ、『ごめん』『ごめん』。まあ家までは送つたから大丈夫だとは思つてたんだけどね～」

「もうう、変な事とかしてないですよね～？」

「してないしてな」

「ちょっと待てええええええええええええええええええええええ！」

塞いでいた手をよつやく取り除くと、俺は思わず叫んでいた。周囲からは変な目で見られているが……」の際どうでもいい。

「ど、どうこう事だよ？！ 説明しろよ？！」

その問い合わせて逢瀬はきょとんとしている。対してシグナルはニヤニヤとした嫌な……そう、天月のよくするタイプの笑みを浮かべて言つた。

「つまり俺と優夏ちゃんは昔からの知り合ひって事だよ。と言つてもそんなに話す間柄じゃなかつたけどね

シグナルは耳元に口を近付けると、

「因みに昨日の件については彼女は一切知らないから安心するといい

と、小声で付け足した。

「さて、昨夜の件について補足説明したいんだけど……優夏ちゃん、ちょっと彼氏借りてくれ

「はあ？！ 何言つてやがる？！」

『冗談ではない。こんな怪し過ぎる奴に連れて行かれたら何をされるかわかったもんじやない。

因みに逢瀬は『彼氏』というワードに身悶えていた。さうにほし、仕方ないですぬ～今日だけですよ～」とか言つてる始末。こんな信用できない奴に俺を渡さないで欲しい。頼むからもう少し粘つてくれ。

「この際、逢瀬じやなくとも誰でもいい。と、視線を周囲に向けてみるが、

「あ、シグナルさんじやない？ あそこ」

「ホントだ。シグナルさんチーフス！ と気さくに挨拶する者。

「この間は本当にありがとうございます！ 貴方のおかげで父は死なないですみました！」

と、何やら非常に重そうな話題を出す者。

「おや！ おお、お久しぶりですね。お元気そうでなにより。碓氷、あんまり迷惑掛けるんじゃないぞ！」

と、「リラ教師こと」リ山まで挨拶に来る始末。

「知らなかつた？ 僕はコレでも街じや有名で人氣者なんだよ？ クハッ！ 寧ろこの街に住んでて知らない方が激レアなんだよ」

と、不敵に笑うシグナル。何故かアウエーな気分だ。

「まあ安心しなよ。ただの状況説明だから。君に損は無いはずだよ」

リムジンなんて初めて乗つた。

話には聞いていたけど……何とも言えない感覚だ。

「お前何者だよ……」

と、目の前で（人が目の前に対座しているのなんて車で体験するとは思わなかつた）ナイフを拭いているシグナルに問う。

「ん……とりあえずこの街で俺に逆らう者なんていない程度の人？ ああ、そう考えると君は相当イレギュラーだね。俺を殴った奴は久しぶりだよ」

その話を聞くと昨夜の傷が痛む。

ふと、

「あれ？ お前、昨日の傷は……？」

よく観察しても傷らしい傷が見当たらない。結構おもいつきり顔面殴りつけた記憶があるんだが……？

「ん?
5分程度で全快したけど?」

あ、ありえねえ……。昨夜の努力はたったの5分で無かつた事に
された、と。嘗てこれ程までに絶望的な気持ちに陥つた事があるだ
ろうか？

と、愕然とした気持ちで足元に田線を落とすと足が6つある。
おや～、と思つて田線を上げると……田の前に黒、黒、黒でジン

ツと決めた……つか、コイツも昨日見たぞ？！

と、男が言つた。

「彼の名前は揺波煉魅。まあ街の人間ではないけど害はないから。因みに俺との関係は大家と借り主って所？宿泊先を提供してるシグナルがどうでもいい情報と一緒に補足する。

シケナルはどうでもいい情報と一緒に補足する

「まあ、畠田の今、田だから僕君たる因縁だと詰かひこし。」
は進ま
なくなると踏んで契約通り賃貸代わりにこういつ仕事請け負つても
らつてゐる訳だよ」

「…………」

「——から頬張りやがれ！」

「クハッ！ それもそうか。まあとりあえず最優先で……君の立場

についてだ

立場？ ただの高校の並の生徒の立場なんてたかが知れてる。
しかも、次のシグナレの言葉は無視できなかつた。

「多分、明日にでも命狙われるから」

アアアアアアアアツ？！」

どうした?

いや寧ろ今日。学校に居る間誰にも狙われないなんて運が良かつ

たね」

「待て待て待て待てちょっと待てえ？！」

俺は思わずストップを掛ける。どういう事？ WHY？

「なんでそうなった？！」

「ん～能力に目覚めちゃったから？」

「ほほお前のせいじやねえか！？」

しかしシグナルは悪びれた様子はない。ただ、俺を真っ直ぐに見据える。

「気付かれた原因はね」

その言葉に続き隣の男…… 摺波が補足する。

「遅かれ早かれお前の存在は気付かれた。寧ろ能力に気付けただけでも行幸と言える」

引つかかるものがあった。

「能力に気付けた……？ 待てよ。能力を使えるようになつたから狙われたんじゃないのか？」

シグナルは「違う」と答える。

「君がパンドラの箱だからさ」「パンドラの箱。またそれか。

「一体何なんだよ、そのパンドラの箱って……？」

しかしシグナルは肩を竦める。

「さあ？ 正直言うとパンドラの箱の中身を知つてゐる奴なんて世界中探して100人居るか居ないかって程度だと思うよ？ ただわかつてるのはその箱の中身は世界を一変できる程度には強力で魅力的な代物つて訳だ」

因みに、と続ける。

「君の能力は実は能力と呼べるような代物じやない。ただ、パンドラの箱の中身…… その余剰スペースに入れたり出したりできる。たつたそれだけだ。簡単に言い直すと君はただの器であつて、周囲が欲してるのはその中身。まあ流石に安直過ぎる発想とは思うけど、器を破壊 つまり君を殺して中身だけ取り出そう～って考えの奴

らも結構居るはずだよ

俺は愕然とした。

「何、だよそれ……？」

「訳がわからない。

頭が追いつかない。

そもそもそうだ。だつてこんな漫画や小説みたいなファンタジックな非日常的状況に足を突っ込んだのはつい昨日　まだ二十四時間も経っちゃいない。辛うじて昨夜の非日常のおかげで話を否応無く事実として受け入れる事ができる。しかし、まだ日常サイドな俺の脳では考えをまとめ上げる事ができないで居た。

「まあ君が望む望まさるに閑わらず、君は俺の提案を呑まないといけない訳だけね」

と、俺の心境を察して居るのか察していないのか……シグナルは唐突に紙面を俺に渡してくれる。

「…………なんだこれ…………？」

紙面の一番上には大きく『契約書』と書かれている。

「見ての通りだよ。君には『バウンサー』として専属契約してもらいたい。因みに『バウンサー』って言つのはまあ、おイタが過ぎる能力者を狩る　まあ能力者に対する警察……この場合、自警団ともでも呼べばいいかな、そういうの」

「ハッ？」

頭にクエスチョンマークが浮かぶ。多分、今までの話で一番大きな『？』が浮かんでいる。

「おつと、話を端折るのは俺の悪い癖だな。クハハ、思考が早いといつのも考え方だなあ」と、一人で笑い出す。

「簡単に説明する。今の君の現状はこうだ。一つ、自分の力の詳細がわからない。二つ、命を狙われている。まあ大まかな所でこんな所だ。二つ目に関してはかもしれない、だけどね」

そして、と続ける。

「こ」の仕事を請ける利点を言おう。一つ、自分の力の詳細を分析できる。「一つ、ウチのグループのバックアップを受ける。即ち命の保障ができるし、雑兵じゃ手が出せない。ほら、この時点で前述の一つは解消された。ああ、勿論の事、君の周囲に関しても此方で安全を確保しよう」

「待て」

と、俺はシグナルを制した。

「まだ俺はお前の事を信用した訳じゃない。話だけは聞いてやるけどな。話は聞くが、お前に協力するのは真っ平ごめんだ」

「そう……とシグナルは呟くと、

「ところで……暴力って最も優しい手段だと思わないかい？」

「……ハツ？」

話の前後がおかしい気がする。何を言つてんだコイツ？ 実はアホなのか？

「何言つ？」

「権力、財力、権威、武力、加えて表裏問わずそれにそれなりに顔が利く。さて、碓氷君はどの手段で脅されたい？」

「……ハツ？」

「」のセリフも何度目だろう……しかし、言いたくなる気持ちも察して欲しい。

「簡単だよ。仲間にならないなら君か君の周囲の人間をあらゆる手段で不幸にするつて言つてるだけだよ、碓氷夕夜君」

シグナルは嗜虐的な笑みを浮かべている。

「お前……！」

「ところでどうする？ 契約を結ぶ？ 結ばない？」

人から選択権を奪つておいて又ケヌケと……。

「まあ、冷静になつて考えてもみなよ。実際、仕事内容はさておき、契約内容そのものはそう悪い部類ではないよ。仕事と言つても君は学生だし、『日常』を優先してもらつて構わない。仕事の時間帯も考慮させてもらつよ。まあちょっと変わったバイト、とでも考えて

くればいいよ。仕事そのものもグレーボーン以上のモノは提供するつもり無い。さらには相応のバイト代も支給するし、君と周囲の身の安全も保障しよう。君の力の詳細について知りたいなら望む範囲で力になろう。勿論、データは頂くけどね

「…………」

確かに冷静に考えると話の内容そのものはコチラの方が得が多い。原因云々はさておいてだ。しかし、眞に話には裏があるのが相場だ。

「何を企んでる……？」

問うと、シグナルではなく搖波が答える。

「簡潔に言えば、バンドラの箱を保持しておく。それそのものに意味があるって事だ」

何となくだが合点がいった。極端に言つてしまふと核兵器のよつなものなのだろう。その正体こそ一部にしか知られていないとは言え、『中身』を一つの陣営が保持しているという状況。おそらくシグナルはそれが狙いなのだろう。詳しくはわからないが政治的な要因とかそういう事か。

そうこうしてゐに車が止まつた。

「おつと着いたみたいだね。まあ脅し云々はさて置き、少なくとも君に仕事の内容を理解してもらわないと始まらないからね。ちょっと付き合つてもらうよ」

言われるままに車外に出ると、そこは柳山鉄橋の傍だつた。

「さて、そろそろ来る頃合なんだけど……」

「何が来るんだよ……？」

シグナルは近場の背凭れに背中を預けると、まるで暗記してた文章でも読むように答える。

「東郷三郎、四十一歳。三年間で十一人を焼殺した連続殺人犯。先週この街で捕まつたんだけど脱獄。まあ能力者相手じや普通の警察じゃ無理があつたけどねえ」

「能力者？」

ああ、と補足してくれたのは搖波。

「言つておくが、一般には知られてないだけで、能力者そのものは結構居る。百人に一人くらいの割合だと考えておけばいい」い、意外と多い……。

「こ～いうの残しておくと街に書が出るからね～。能力者としては中の上。任務難易度としてはBつて所？まあ、今回の為にわざと情報をリークしなかつたんだけどね」

さて、とシグナルは路地の方に目を向ける。その先からは足音が聞こえてくる。

「君は弱者だ」

唐突なシグナルの言葉。

「……負けた奴に言われたくない言葉だな……」

「クハツ！ 確かにね」

足音が近付く。しかし、微かな違和感。

「まあ、とは言え君は弱いよ。世の中全体で見れば「音が多い……？」

「そして俺は基本的に弱者の味方ではある。何故か？ それは弱者のほとんどは大体街の利になつてゐるし、害と言つても大した害にはならない。それなら多少の利を伸ばしてあげた方が街にとつて有益だ」

一つ二つ三つ……どう考へても一人の足音ではない。

「だから少なくとも今は君の味方で居てあげるよ。それに君の力が街にとつて良い方に向く限りは全力でサポートしよう。クハハ！」

勿論、逆もあるからあしからず

そして路地から出て来る複数の人影。

それに立ち塞がるように立つてしまつてゐる俺達。

「やあ 楽しい楽しい逃走劇はどうだったかな？」

シグナルだけがやけに楽しそうに田の前の男たちに話しかけていた。

「オイ」

「なんだい、碓氷君？」

「どう考へても一人じゃないんだけど……？」

そう、俺達の目の前に居るのは……十五人の男達だ。

「正確に言つと十五人の能力者だね」

「二コやかに言うレベルじゃないだろ?！」

「当然というか何というか……流石は殺人犯（？）、最初から殺気ばかりを此方に向けて来ている。しかしそく見ると何か口がひたすらパクパク動いている気がする。

「ああ、面倒だから彼らの声の力を『減少』させてもらつてる。聞くだけ無駄だしねえ」

増幅くブーストゝ。それがシグナルの能力だ。それは理解している。搖波の能力はわからない。そもそも能力者ですら無い可能性もあり得る。

俺の力も……複数人相手には不利と言わざるを得ない。

「逃げないとマズいんじやないか？！」

三人（？）の能力者と十五人の能力者。簡単な計算だ。勝てるかどうかなんて考えるまでも無い。

「逃げる？ なんで？」

と怪訝そうに問い合わせるシグナル。搖波に至つては車内に戻つて横になつてゐる。なんでお前らそんなに冷静なの？！

「この人数の犯罪者相手に三人でどうにかなる訳ないだろ？！」

「ああ、確かに予想外だねえ、この人数は」

前を見ると、犯罪者の一人の手に炎が集まつていつてゐるのが確認できる。その大きさは直径一メートル程で……あれ一つ程度なら俺でもどうにかできそうだ。

だが、

「一つ、二つ、三つ、四つ うん、既に何人か臨戦態勢だねえ 詳細まではよくわからなかつたが、氷、電気、火……簡単に判るのはこの程度だった。

俺の力は一回に付き一つしか入れる事ができない。つまり同時に複数の攻撃には対処できない。

犯罪者の能力一つ一つが解き放たれる。その瞬間。

ゴキッ

鈍い音が響いた。

気付けばシグナルが傍に居ない。

姿を探すと、シグナルは犯罪者の一人のすぐ傍に居た。

「クハハハ」

笑い声が聞こえたと思うと、シグナルの目の前に居た男がその場に倒れ付した。

周囲は暗くなりつつ中、その様子がはつきり見える訳ではなかつた。

ただ一つ間違ひ無く理解できたのは、

「さて、シグナル危険信号を鳴らしに行こうか！」

それが一方的な虐殺だったという事だけだった。

地を踏めば大地が揺れる。

腕を振るえば風が荒ぶる。

腕が千切れ、首が？がれ、身体を引き裂かれる。

人が人を殺すのにこんなに残虐な方法があるのだろうか？　いや、あるなしじゃない。不可能だ。

音は聞こえなかつた。視界は闇に覆われた。おかげで直視はしないで済んだ。

不思議に恐怖感は生まれなかつた。あまりに現実味の無い光景だからか……まるでモニター越しに映画を見るような感覚だつた。

とりあえずわかつたのは

あの時は本気じやなかつたという事だけだつた。

災禍の幕開け 3（後書き）

まあ、あれです。シグナルさんってチートキャラだつたりするんですけど
そして『バウンサー』の登場によつてゴールが見えなくなつてきた。
• • o r z

災禍の幕開け 4（前書き）

前回のあらすじ・シグナルさん本氣出すと強い。
今回は霊霊さんの番となつております。

「クハツ！殺りがいのない奴らだなあ」

シグナルの声が聞こえる。そして視界に光が戻る。あまり時間は経っていないが、シグナルが全員始末してしまったのだろう。路地に赤いものが目に映りかけたときに

「まだ見ないほうがいい」

その一言に逆らえず目を背けてしまった。言葉には不思議に従わせられる力が込められている気がして、

「クハツ！やつぱり搖波は新米に対しても甘いなあ

「しかし・・・・・・」

「まあ、甘いのは勝手だけど、使いすぎると君の場合少しずつ身体が朽ちていくはずだからね」

「・・・・・ハツ？」

使いすぎる？ 朽ちる？ こいつは何を言つてるんだ？ しかも

今の言葉は間違いなく搖波に向けられた言葉であり、今まで使った形跡がない。

「ああ、碓氷クンには言つてなかつたけど彼の能力は霧囲気を操ること。つまりさつき君が振り向かなかつたのは彼が『碓氷がシグナルの方向を見ない霧囲気』にしたつてことさ」

言つてることは信じられないが、もう能力もなんでもアリらしい。俺の能力は『吸收』と『放出』。ふと氣になつたが能力が被つたりすることはあるのだろうか。

「私の能力をすぐ説明するなと言つたはずだ」

「まあいいじゃないか。すぐに気づかれるんだろうしね。そういうわけで、そろそろ行こうか」

「待て、どこへ連れてく気だよ？」

それにこいつがさつきまで殺していた能力者とかどうするんだ。決まつてゐるじゃないか。『バウンサー』の拠点にだよ

組織があるのでから当然多数の人で構築される。そしてその人たちが集まる場所もあるといえば当然だ。

言われるがままに車に乗せられ、走り出した。シグナルの殺した死体は別のメンバーが処理するらしい。乗るときには既に『死体も血のあとも残つていなかつた』が・・・・・。

「さて、仕事の内容も見たことだしあとは契約書にサインするだけだ」

先ほどまであのような虐殺をしておいたシグナルは笑顔で二つを見ながら契約書とボールペンを差し出す。

「ふざけんな。俺がいつ人殺しをすると言つた」

思つたことをそのまま言つてしまつたが、これで断つたらどうなる？逢瀬や他の奴らにも危害が及ぶのか？ あの圧倒的な力を持つシグナルが俺の身内の奴らを襲つのか？

「とは言つても受けざるをえないはずだよ？ それとも、脅しに屈しないとか言つて大切な人たちを巻き込むのかい？」

「・・・・・・っ！」

そうだ、冷静になれ。どう考へても俺は『バウンサー』に入らない限り、逢瀬や天月を巻き込まない方法は他に残つていないんだ。

「分かつた。契約書を寄せせ」

とはいえ、思い返せば契約書の詳しい内容を覚えているわけじゃない。渡された契約書に目を通した感想は

「思つたより本格的だな・・・・・・」

まず契約書を読んだ感想がこれである。こんなもの初めて見るのから感想はこの程度で済ませて欲しい。

「一応難しい言い回しが好きなところにも顔を出すからねえ」

一通り読んだが、内容はシグナルの言つてのことと変わりは無い。絶対裏がありそうな気がするが、歯向かつてざつにかかる相手じゃない。

「・・・・・・契約してやるよ」

覚悟を決め、契約書にサインをする。

書き終つた直後に車が止まる。拠点とやらについたのだろうか。

「ついたよ まずは契約書を確認してから説明を細かくして歓迎

会だね」

思つたより抜けていると感じたのは俺だけだろうか?車を降りると見知つた建物が目に映る。

「こいつてどう見ても市役所なんだが」

「だからここが拠点だつて。格好よく言つとギルドかな?」

どうでもいいわ! というか市役所に自警団つてあるものなのかな?

市役所に入ると何度か見たことのある普通の市役所だった。

「こっちだ」

シグナルと搖波の後についていった先には「部外者立ち入り禁止」とだけプレートの貼つてある金属製の扉が、異様な雰囲気をかもし出していた。

災禍の幕開け 4（後書き）

一週間も間が空くといろいろあれかなと思いあらすじ制度を導入してみました。
もう少しで2週目も終わりか・・・

災禍の幕開け 5（前書き）

2週間ぶりの更新です・・・w

本当に申し訳ありませんでした！ 詳しい理由（言い訳）は活動報告の方に記載しているのでそちらの方を参照してください。では、今回は魄さんの番です！

無機質とも感じられる部屋で、向かいにはシグナルが座り、横には搖波が立っている状態で碓氷は契約書にサインをした。

「……ほら、書いたぞ」

「よしひ、じやあこつちは碓氷クンが管理してね。ああ、言い忘れたけどその契約書は肌身離さず、無くさないよう管理してね」

そう言われて碓氷はシグナルから一枚契約書を渡される。

その契約書を受け取った瞬間、碓氷自身学校に行き、何気ない生活を送る『日常』と、犯罪者や能力者と関わる事になる、今まででは考えられない『非常』とを繋ぐ、一枚のただの紙切れである筈のこの契約書の重みを感じた。

「……さて、契約書を受け取って思う所があるだらうけど、ここで碓氷クンの今現時点での能力を知りたいからね 場所を移して、ここに居る搖波とちょっとした模擬戦を行つてもらつよ」

「……わかった。つて、はあ！？俺の能力 자체、お前が昨日確かめたじやないか！」

「ん～、まあそなんだけね。昨日は単純に碓氷クンの能力を目覚めさせる事が目的だったからサ」

「とりあえず、模擬戦の内容事態は俺から説明する。ああ、あまりにも不甲斐無い様だつたら、大怪我の一つや二つ付くからな？」

「ま、そういう事だから んじや、碓氷クン初の能力実力テストの開始！ つてところかな。まあ、搖波の能力を知るいい機会だとおもつて頑張つて来てね」

有無を言わさずシグナルは碓氷と搖波を市役所から追い出す。碓

氷 자체、シグナルに言われるがままに付いて行く事しか出来なかつた。

「…… 摆波さん？」

「俺の事は煉魅でいい」

「う、じやあ煉魅。模擬戦つて何をするんだ？」

「ああ、簡単に言つと、『立ち上がる』。ただそれだけだ」

揆波の言葉に、「？」を浮かべながらも、ある大きな公園に碓氷達は着いた。

「さて、『俺を、見る』」

公園の真ん中まで進んだ碓氷は、振り返り様に揆波が発した言葉が耳に届いた瞬間、視界の中が揆波ただ一人になつた。

「つ！ なんだ……これ」

「シグナルが言つただろ？ 僕の能力は『霧囮氣を操る事』。そ
うだな、人には『偽空』もしくは『ムードマスター』なんて呼ばれ
ている。今、この公園に居る全ての人間の視界は、唯一。“俺”だ
「これが……煉魅ののう！」

「さて、模擬戦を開始する。今から俺が変える霧囮氣の中で、碓氷
君はただ、『立ち上がる』れば良い」

揆波がそういつた瞬間、碓氷の身には空気が重くなつたように感
じた。

実際、揆波が発した“霧囮氣”は、空気を鉛のごとく重く感じさ
せるもので、碓氷はその重さに耐え切れずに地面に膝を付く。

「ああ、安心しろ。この公園に居た人間は、全員別の霧囮氣で公園

外に退避させている。今、この場所に居るのは俺と、お前だけだ

「くあ……！ 体が……つ、つかつ……」

「制限時間は、5分だ。それまでに立ち上がれなかつたら、少々身の危険を感じてもらひつ」

地面上にへばり付き、苦心している碓氷をよそに、搖波は淡々としやべる。

今現在碓氷の目には、搖波の姿が『絶対に敵う事の無い“敵”』として映り、碓氷自身既に身の危険を感じていた。

「さて、“パンドラの箱”の今現在の実力を確かめさせてもらひつ？」

搖波の碓氷に対する試験とも呼べる模擬戦が、終了を告げる5分に近づいてきた頃、相変わらず碓氷は地面に屈したままで、それを搖波が見下すような目で見ていた。

「ここまで……か。やはりお前には何か“危険”を感じないと力が出ないのか？」

5分を過ぎたために、搖波が碓氷に近づきはじめた時、公園に強風が吹いた。

「那人から離れて！」

搖波の後ろ、碓氷の真正面に現れたのは、見た目10歳前後で、長いポニーテールをした一人の少女だった。

「ほう、この“雰囲気”の中に入つて来るか」

「……もう一度言つ。碓氷夕夜、彼から離れて」

「話はシグナルから聞いている。君が夕緋か」

夕緋の方へ振り返りながら、搖波は碓氷に近づくのを止めなかつた。

「いいからはな」

「今、俺が、話しているんだ。悪いが『黙つていて貰おうか』……」

搖波が言葉を張り上げた瞬間、碓氷達が居る“空氣”が一瞬にして凍りつく。

「ああ、そういうやシグナルがパンドラの能力を解放したのと同じやり方でやるか」

搖波は夕緋に向けていた体を碓氷に戻し、そして冷たく言つ。

「早く立たないと、あの子が君の変わりに傷つくよ？まあ、俺は紛いなりにも紳士だ。手荒な真似はしないがな」

そう言って、搖波は夕緋の方へ向きなおすと、地面に落ちていた“小石”を拾つた。

「よし、君のお望みどおり、碓氷君からは離れてあげよ。ただ、今彼のテスト中なんだ。その妨害をしたという事で、ひょこと付きあつてもらうよ」

搖波がそう言つて、拾つた小石を真上に投げた瞬間、碓氷と夕緋

の視界から揺波が消えた。

「……え？」

人が消えた。

碓氷の頭の中には、揺波の能力は“雰囲気を操る”と言つ事だけ。“消える”と言つ能力ではなかつた筈だ。と言う漠然とした混乱が頭を巡る。

しかし、そんな碓氷の混乱をよそに、目の前に居る夕緋は叩かれたような、押されたような感じでその場を左右に揺れていた。

「さて、君は最近言われている、『嘘か真か、全てが謎に包まれた都市伝説』の一人だ。そんな君が“今”、“ここに”来たつて言うのは、やつぱり碓氷君のパンドラの能力が気になるのか？」

「……関係無い」

「ハハッ！まあ、いいさ。今ここで俺をその“風の能力”で倒すか、碓氷君がここに来てくれる事を願わない限り、お嬢さんは碓氷君にも、パンドラの箱にも近づく事は出来ないよ？」

「……」

碓氷の目にはただ夕緋がその場をうろつひとして居るようになしか見えない光景でも、実際に戦っている揺波と夕緋では、圧倒的な力の差が明示されていた。

いつの間にか公園は嵐が来たかのように風が吹いている。

嵐の“ごとく風が吹くものだから、碓氷は夕緋の能力が“風を操る”事だと認識はしたが、その風が一向に止む気配が無い。

逆に、その風自身が夕緋の体を傷つけているようにも碓氷の目には映っていた。

……どれぐらいの時間がたつたのだろうか。

実際には、まだ搖波と碓氷の『模擬戦』といつ名の試験が始まつてからものの10分しか経つていないにもかかわらず、碓氷も、夕緋も数時間ずっとこの調子でいるように感じられた。

そして夕緋は搖波との戦いに置いて、半ば終わらない事を意識していた。

自分が“戦う事”を放棄すれば、たとえ自分が傷ついてもこれほど的能力を使い続ける事は出来ないだろうと予想していたからだ。しかし夕緋は“戦う事”を止めなかつた。否、止める事が出来なかつた。

「ハハツ、どうした？　お嬢さん。だいぶ顔色が悪いが、少し休むか？」

未だ姿の見せない搖波が、茶化すように夕緋の耳のそばで囁いた。ささやか

「……五月蠅……い」

感情的に風を操ろうとした夕緋だが、これまでの搖波との戦いのせいが、その場に倒れる。

「まあ、俺を完全に“意識”した時点で、君は俺の意のままなんだけどな。戦う“力”を持たない俺は、水面に小石を落すがごとく、人為的に“漣”^{さざなみ}を起こして身を守らせてもらつてはいる。悪いな、戦いを止めたくても止めれない、『俺に敵意を向け、攻撃しなければならない』雰囲気に勝手ながら変えさせてもらつた」

そういうて、倒れた夕緋をその場に寝かし、碓氷へと振り返る。その手には昨日碓氷に突きつけられた刃物があつた。

「碓氷君。今この子は俺のちょっとした行動で簡単に殺せてしまう状況だ。さて、どうする？」

「あ、碓氷じやん。そんなひで座つて何やつてんだ?」

た。 摺波の問いかけに答える前に、碓氷がよく知っている声が聞こえ

振り返るとそこには天月と風紀委員長の美原紗希が立っていた。 摺波は、何か焦った様な顔をし、2人を見ていた。

「……せ、ちゅうとな」

「まあ、いいけどな。ところで、あそこにいる黒と赤の人はお前の

「つい最近知り合つたばっかりだけな」

「天月君！ あの人からはなー！」

はお
今田は久しぶりに能力を多用した。碓氷君
先は房主
て一歩。試験は中止だ。たゞ、当初予定のソレマを達成できなかつ

たのは報告する」

圧倒的な雰囲気の中、揺波から発した言葉が聞こえた瞬間、公園内を包んでいた『威圧感』や『緊張感』さらには『揺波に対する敵意』全てが取り除かれる。

「待ちなさい！ 貴方、ここの人じやないでしょう！？」

「止めろ!!」の2人には関係無ハだろ!?」
“ 漢字表記 ”

「おこ碓氷。お前らは俺を置いて何を話してい

「……そうだな、一つ確かめたい事があった。俺の言葉は聽かなく

ても聞こえなくても構わない。……もし、『力の支配者』がお前たちの前に現れたらどんな雰囲気になるんだろうな」

最後に搖波が発した言葉、それによつて俺たちは震え上がり、蛇に睨まれた蛙のごとく固まつた。

この時、碓氷達が感じ取つたのは、明確な『死』のイメージ。どんな些細な動きでさえ見せたら『殺される』と言う直感が働いた事により、3人はほんの一瞬だつたが呼吸をする事さえも止めて、ただただ搖波の事を見つめた。

「……さて、確認したい事も済んだし、俺は戻つて休む。今日はもう帰つて大丈夫だ。何かあつたらこつちから連絡する」

そう言つて搖波は公園を後にし、碓氷達4人はただただ呆然とした。

「なんだつたんだ？ あのカツコイイ男は」

「……そうか？」

「いや、黒のスーツに灰色のワイシャツ、紅いシルクハットと手袋を“自然”に着こなしているのは相当だぞ」

始めに言葉を発したのは天月で、碓氷は搖波が去つたあともまだ震えていた。

「ハハッ！ ただ能力が無く、“戦う事”すらした事が無くて俺の“雰囲気”を感じなかつたのか、また別の理由で“雰囲気”ごと無視したのか……パンドラの箱を“観測”していると面白い人間に出会えるな」

公園を出る間際、遥波は誰にも聞こえる事無く呟いた。

災禍の幕開け 5（後書き）

やはりこのフレー小説・・・みんな遠慮がちかもしれない？ w
かといってカオスなもののはうやうやしきぬう・・・w

災禍の幕開け 6（前書き）

前書き、特になし。

今回は丸樽さんの番です！

「ふう、まったく制服汚しちゃったな……」

今は古びて誰もいない雑居ビルの屋上で近衛が呟く。制服に何か付いたのだろう、『それ』を必死に落とそうと懸命に擦っているのだが、『それは』一向に取れず、擦るたびに広がつてゆく。

「ああ、もう！ これ大事な一張羅なのに～」

がっくりと肩を落とし、なかなか落ちない『それ』を『赤黒い血液』に恨めしい視線を送る。

近衛の制服にはべつとりと人間の血液が付着していた。そして、彼女の周りには制服に染みとして付いている血の持ち主であろう男が三人、目も当てられない姿で横たわっていた。

一人は目を見開き、全身を殴打されたような跡を付け、両手両足を本来曲がるはずのない方に曲げ、一人は煙を上げ、異臭を放ちながら炭と成り果てていた。

残る最後の一人は……切り刻まれ人としての形をほとんど残してすらいなかつた。唯一無事だつた頭部からは止め処なく血が流れ屋上を赤で染め上げていく。

「もう！ どうしてくれるんですか？」

少し怒った顔でもの言わぬ死体と成り果てた彼らに問いかける。

もひろん返答はなく、近衛は怒った顔から呆れ顔に変えて一言。

「まあ、いいです。洗えばいいですね。はあ、まつたく……」

そのまま、眼の前にある死体を一瞥することなく退場しようと廊上の扉を叩きす。

本来彼女はこの時間帯は学校の図書館で本を読んでいるはずだったのだが、碓氷を狙つて街に来た能力者がいるといつ情報を得たので、わざわざ時間を割いて出向いた次第だ。

最初は、あの『パンドラ』を狙う能力者とあつて期待していたのだが、先ほどの三人との戦闘でその期待を悪い意味で裏切られたことになってしまった。

「はあ……。ぬるい相手でした。久々の戦闘だったのに」

どこか不満気な声を漏らして、頭に碓氷の顔を思い浮かべる。聞いた話だと能力を使用できるようになり本気ではないとはいえるのシグナルを退けた。そんな今の彼と戦えば少しはこの鬱憤したものを見晴らせるだらうかと考え優しい微笑みを作る。

だが、すぐに微笑を消し、邪念を振り払つよつて頭を数度揺らす。

(駄目駄目、もうちよつと成長してからじゃないと……。それに彼とはお近づきになりたいし物騒なことはなるべく考えないよしなきや)

立ち止まり、眼を閉じ心を落ち着かせる。

碓氷が『パンドラの箱』を開けたと聞いてから、どうも自分は落ち着きがなくそわそわしている。それは近衛にとつては仕方のない

ことなのだが、この状態では『パンドラの箱』の本当の力といつものを知る前にこの争奪戦から脱落してしまうだらう。

今一度、慎重さを取り戻さなければいけない。でなければ、この先生き残れない。

眼を開け、すっかり闇夜になつている空を見上げる。その時浮かんでいた彼女の表情はいつもにこにこと本心が見えない笑みを浮かべているのではなく。

近衛この『本来』のどこまでも冷め切り淀みきつたものだつた。

「クハツ、怖い顔してるねえ。お嬢さん」

誰も居ないはずのビルの死体しか存在しない屋上に男の声が響いた。

近衛はさつと声のした方向に振り返るが、屋上に続く階段への出入り口の扉しか目に移らない。

「この声は聞き覚えがあります」

軽薄で何を考えているのか分からぬ人で、雲以上に掴めない飄々とした態度を取つていて、いつも自分の知り合いであるちつちやい少女を怒らせ笑つてゐる。この街に居れば絶対に聞いたことがあらう街のご意見番を勤めている男の声だ。

「……はあ」

疲れきつた溜息を一つ溢し、いつもの固定された表情にする。そして、ゆっくりと夜空を見上げるとそこにはいつも通りのスマイルをしているシグナルが近衛を見下ろす形で出現していた。

相変わらず神出鬼没な人だと感想を抱きつつも、こちらも上質なスマイルを返し、

「『んばんは、シグナルさん』

「『んばんは、『のちゃん』」

実際にフレンドリーな呼び名で挨拶を交わしたシグナルは空中から、その身を近衛がいるビル屋上に着地する。小気味のいい靴音が静かな屋上で反響する。

「あれ？ 今日は空中からお話しないんですか」

素朴な疑問。シグナルは毎度、近衛と会話するときは何故か空中でしていたので自分と同じ目線に立つてといつのが珍しいのだ。

「ああ。そうだね、もう君とはあやつて会話する『はないよ』『へえ、一体どういつた心境の変化ですか？』

その問いに答える代わりに近衛の後方を目線で示す。
在るのは無残な死体。都市伝説とまで呼ばれている能力者たちの亡骸。

「勝手なことやつてもらうのは……困るんだよね……」

両手をやれやれといったように揺らし。殺意とはいえないまでも、純粹な敵意を持つた瞳で近衛を見る。

この街には、シグナルが結成した能力者や危険な住人を駆逐する自警団の『バウンサー』が存在する。今回、近衛が殺した三人組は本来ならば『バウンサー』が処理する予定だったものだ、それを『バウンサー』に所属していて居ない近衛が横取りするように仕留めてしまった。

つまり、所属していないものが能力者を倒してしまったといつ」と

は、近衛もその駆逐される能力者に指定される可能性が出てしまった。だが、倒したのは街に危害を出し兼ねない者たちでそいつらを倒してしまった方は危害を出さない無害な人。しかし、例え無害であろうと勝手な行動をすれば街の人たちを危険に追い込んでしまう。

それ故に、シグナルは今日こつして警告に現れたのだ。

「今日は、まあ手間も省けたし、顔なじみといつことで見逃すよ…」

けれどね、と前置きしこの場に彼を知っている人が居たら間違いなく失神しているであろう殺氣を放つて、

「……次はないよ」

時間が止まつたような錯覚、屋上で吹く強い風がつとめじく一
人を包む。

「肝に銘じて置きましょう」

近衛自信めたに出さない声で返答する。そして、

「そう、いや～分かってくれて嬉しいよ。俺もさすがに顔なじみ潰すのは心が痛いしね～」

シグナルはさつきまでの雰囲気を打ち消すように明るい声を出して笑い出す。

近衛はいつものことだと知っているので、呆れた目線を送つている。

「それで、他に用件とか……ないんですか？」

質問されて嬉しいのかシグナルは無邪氣な笑顔を近衛へと向けてくる。

やっぱり、この人は嫌いだ。ふと、その笑顔を見て思う。
シグナルは滅多に感情を隠さない、面白いことがあれば積極的に動くし、弄れるものを発見すれば弄り倒すし、都市伝説でありながら住民とは分け隔てなく仲良くなるなどといった感情を惜しげもなく出している。隠しているように見えるのはそう見えるだけで、とても純粹な人、いや街だ。

だが、自分はどうだろうか。まるで、都市伝説のテンプレのように一人孤独に図書室に籠り、今では図書室で読んだことのない本は存在しない、唯一の楽しみは月に何冊か入ってくる新しい本を時間を掛けて読むこと。シグナルとは違う人が来ると隠れ決して姿を見せることのない自分。

そして、一番嫌なのは、笑みを貼り付けて自分の感情を曝け出さないところだ。

だからこそ、シグナルの感情豊かで人懐っこいところに嫉妬し、気づけば嫌いな人になっていた。
そんな自分も汚いと思いながらも笑みでどす黒い感情を塗りつぶす。

本当に自分はいやな奴だ……。

自責をしている近衛になおも嫌がらせのよつに無邪気にシグナルは質問に答えている。

「ん？」のちゃん、聞いてるかい

逆に問われ、自責するのを途中で辞めて、慌てて返す。どうやら会話は続いていたようだ。

「はっ！　ええと、何ですか？　すいません、ちょっとほつとしてました」

わたわたと手を振つて答える。シグナルは少しむすつとしたが平然と言葉を発していく。

「いや、だからね。昨日は面白かったってお話をだよ。まさか、あの碓氷くんに負けるとは思わなかつたよ」

「またまた、手加減して負けてあげたんでしょう。じゃなかつたら今頃碓氷くん病院ですよ」

「クハハ、それがね……、意外とやれるみたいでね。手加減はもちろんしてたけど、最後の方は驚いちゃつたよ」

「最後の方……？」

小首を傾げて続きを待つ。彼とシグナルの戦いは一部始終を知っているわけではないが大体の事は情報収集済みだ。そして、その戦闘に関する結果を見ても疑問を持つことはなかつた。

シグナルが手加減をしてわざと負けた。それが、近衛の出した答えだつたのが、何が違うのだろうか。

「正直に言つけど、最後のときは躊躇いなく、されども軽症で済ます程度の威力で攻撃したんだけど……」

「だけど？」

「何の変哲もない鉄パイプで吹き飛ばされちゃつたんだよね」「変哲もない？　あれには能力が付加されていたんじや……」

おかしい、あのシグナルの能力で生まれた刃がただの鉄パイプ一本に負けるわけがない……。しかし、敗れてしまつたのまた事実であつて真実だ。

「そう、何の変哲もないどこにある鉄パイプ……。それに、俺の能力が打ち消された……」

眩ぐ様に、そしてどこか嬉しそうにシグナルは言葉を紡いでいく。

「つまりさ、あの一瞬。彼にとつては生死を決めるかもしれないあの瞬間に！『パンドラの箱』が一時的ではあるが力を解放したかもしれないんだよ！！」

叫ぶと同時に場を響かせるように笑い出す。

「面白い！面白いよ！一瞬だが彼は力を解放させた！最高だね！だからこそ俺は彼を、碓氷夕夜を我が『バウンサー』に勧誘したんだ」

一人の世界に入り込み、演説のように語ったシグナルをよそに近衛は未だかつてないほどの衝撃を受けていた。

『パンドラの箱』が開いた。一瞬だが開いた。その言葉が頭の中をぐるぐると回り、上手く操作できない感情をより一層制御できなくなる。

今すぐにでも、彼に会いたい。会って真相を聞きたい。

その思いが加速し、近衛の足を屋上の出入り口への扉へと向かわせる。

シグナルを通り過ぎ扉を開けようとしたその時、不意にシグナルから声を掛けられる。

「おや、もう行くのかい？　ああ、仕方ないか。だつて『パンドラの箱』さえあれば……」

今の近衛は、どうでもいい話ならば無視、いや耳に届いてすら居なかつただろう。しかし、シグナルの次に放つた一言は近衛の耳を震わせ脳にまで響く。

「都市伝説になつてしまつた君を元の人間に出来るかも知れないからね」

近衛とシグナルの間に。

とてつもなく巨大で、とてつもない速度で、赤い血のよくな色をした拳が振り下ろされる。

轟音が辺りを支配し、落とされた拳による衝撃が波のように襲いかかる。

古びたビルのあちこちで嫌な音が木霊し、奇跡的に倒壊を免れる。

落とされた拳は直ぐに原型を留めなくなり、墨汁やインクが水で滲むように消えていく。中心地の近くにいたにも関わらず無傷なシグナルはにやにやとした笑みを拳が消え、砂埃が弱まりようやく見えた近衛に向ける。

対して、近衛は衝撃にやられたのか血濡れだつた制服は所々破れ、三つ編をしていた髪は解けてストレートになり顔のほとんどを覆い隠している。そして、手にはいつの間にか握られている万年筆が一つ。

「ほう、久しぶりに見たよ。君の能力、確か幻筆だつたつけええと、ルビは……」

傍と言葉を止めるシグナル。目の前には幽鬼のように佇む近衛のたつた一つ髪の毛から出でている眼球がそれ以上喋るなと語っていた。別にそれで口を噤んだわけではない、シグナルはこの程度で喋らなくなる男ではない。

「……いつも笑つてばかりいて気味の悪い子だと思つてたけど。何だ、やれば出来るじゃないか」

ならば何故、止まつたのか、それは何時も一定の表情しか見せない近衛が怒りを露骨に顕にし、普段絶対に人に向けない殺意が籠もつた視線を送つてくるのが面白かつたからだ。

土埃が消え、お互いの顔が完全に見えるようになり、その声が響く。

「…………殺す」

全ての憎しみと恨みと嫌悪を合わせたような声。近衛の『本来』の声がシグナルと一緒に共有している世界を満たしていく。

すつと、音もなく静かに万年筆を構える彼女にシグナルの知る近衛は居ない。

面白いと思った。だが、同時にここで終わらせるのは惜しいと感じた。彼女はこのあとの展開を面白くしてくれるかもしれない、そんな期待をどこからともなく沸かし、考える。

(近衛)の……何時も傍観者を決めていた彼女。しかし、これで彼女は動くだろう傍観者から当事者へと変わるだろう。クハハッ、面白くなりそうだ……。ここで場が盛り上がりないというのならその

時彼女を潰せばいいや）

結論は出た、今までに能力を行使し狼煙を擧げよつとする彼女に喋りかける。

「殺す、ね。俺を君^様」ときが殺すか。クハハハハハハッ……」

「知らない……。殺せなくとも殺す」

虚うひな瞳の中にありとありゆる負の感情を込めに込め近づく近衛。

「はあはあ。いやー、笑わせてもらひたよ

わらに一歩。

「興ざめだ。怒りで前の全然見えない君を潰しても意味がない。そんな、今出来たような薄いもので来られても意味がない。もつと、そうもつと憎しみも苦しみも嫌悪も深く濃くしてからではないと意味がない。張り合いがない。だから……今日は戦わない」

そう言つて、踵を返すシグナル。

「逃がすか！…」

万年筆で一文字『拳』と空中で書く、するとそれを振り下ろされた拳と同じものがシグナルの居るところへと落ちる。

再びの轟音、先ほどの繰り返し。だが、確かにそこに居た筈のシグナルはおりず。風に乗つて言葉が届く。

「それは、俺に対しての宣戦布告つてことにしておいていいけど……。

今回は不問だ　　楽しませてくれたお礼だ。それじゃあね、このち

やん。碓氷くんが気になるならぜひ『バウンサー』に来てね」「

それを最後に原型を何とか留まらせて『ビルに静寂が訪れる。

「一度と、私をそのあだ名で呼ぶな……」

相手に聞こえるはずのない台詞を駆け近衛の表情は果たしてどんなものだったのだろうか？

答えは誰にも、もしかしたら本人にも分からぬのかもしれない。

ジュー・ジューと台所で音を立てながらから揚げが一つ、また一つと出来上がっていく。

出来上がったから揚げを弁当箱に入れながら流行の歌を鼻歌で意気揚々と奏でる。

ここは、逢瀬の家であり、現在進行形で作り上げているから揚げは我が愛しのマイダーリン専用お弁当の具材だ。

記憶ははつきりしてはいないのだが、碓氷には何かお礼をしなければいけないと漠然と思いつき。初めてのから揚げ作りにせいをしていいるという訳だ。

「ふつふつん、ダーリン喜んでくれるかな」

そこには、ただただ乙女の顔が浮かんでいた。

災禍の幕開け 6（後書き）

丸樽さん＝裏方の人。

今は、そういうことになつてます。

災禍の幕開け 7（前書き）

前書き、特になし。

今回は水無雲夜斗の番です！

その日、碓氷は一人屋上で仰向けに寝転がって青く晴れ渡つた空を見上げていた。

といつてもサボっているわけではなく、現在はいわゆる昼休みなわけで屋上にはたくさんの生徒が弁当を食べたりおしゃべりしたりしてたむろしている・・・などということではなく、先程も言つたとおりあくまで屋上には碓氷一人しかいない。

理由としては、この学校では基本的に屋上が立ち入り禁止になっているからだ。

そのため、屋上には鍵がかかっていて、本来は教師以外の人間は入れないようになつてているのだが、碓氷はとある方法を使ってその鍵入手することに成功していたのでそんなことは関係ない。

というわけもあつて気兼ねなく屋上でじろじろできるというわけだ。

しかし、ただごろじろとして午後の授業に備えているというわけではない。悩み多き高校生である彼の頭の中を支配しているのはある一つの出来事だ。

さざなみれんび
搖波煉魅。

あの公園で彼と戦つてから一週間が経過していた。

思えば一週間頭の中は彼とのことでいっぱいだったような気もある。

といつても「アツー！」とかそっち方面での悩みではなく、あくまで碓氷が悩んでいるのは彼との戦いのことだ。

手も足も出なかつた。

“パンドラの箱”とやらを開き、非日常に足を踏み入れ、不思議な力を扱えるようにもなり、そしてシグナルという驚異から逢瀬を守つたにも関わらず、自分はあの戦いで何もすることができますにただ敗北してしまつた。

「・・・べそつ

やり場のない怒りを拳を思い切り握ることによって押さえつける。守ると誓つたはずだった。日常を守ると決意したはずだった。次に驚異が襲いかかってきたとしても簡単に退けられると思っていた。だが、それが今となつてはどうだらう。

シグナルに勝てたのは自分の力ではなく彼が手加減していたからであり、実際には倍以上の実力差があつて、“パンドラの箱”を狙う連中を恐れて『バウンサー』に加入し、そして搖波という男には傷一つ負わせることができず、極めつけにはあの戦いでの敗北だ。

「なさけねえな、俺・・・」
「何が？」

一人しかいないはずの屋上に、何故か一人目の声。

その声に驚いた碓氷は、軽く敵襲だと勘違いしたという理由もあり、勢いよく飛び起きる。

が、そこで、

鈍い音が屋上に響き渡つたような気がした。単純に言えば、額と額から正面から激突した。

あまりの激痛に思わず額をおさえながら呻く碓氷。「いたた・・・

」という今にも泣き出しそうな他人の声が聞こえてくるところから、どうやら粗手もモロにこの痛みを味わつてしまつたようだ。

何はともあれ、悪いのは自分だ。

謝りうとして額をおさえながらその人物の方へと視線を移す。するとそこにいた人物は、

「声を掛けただけでいきなり額にダイレクトアタックしてくるなんて流石碓氷くんというべきかやることがいちいち大胆だよね。でもでもこれつてもしかして狙つたのは私の額ではなく唇だったというオチ！？ それはそれで大胆すぎるといつか・・・でもでも私としては願つたりというか・・・」「

相変わらずのマシンガントーク。

うずくまつっていたせいで顔は見えなかつたが、少し喋つただけで自身の特徴を全て晒けだしてしまつこの少女の正体は、もはや顔が見えなくとも特定はできる。

「なんだ逢瀬か・・・」

「その『なんだ』は何のかなあ！？ 私としては真っ黒でどんよりなオーラを放つてゐる碓氷くんに話かけるべきかどうか一週間悩んだ挙句、やつと決心が着いて話しかけてあげたつていうのに流逝にひどすぎるよマイダーリン！」

「それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えた。それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えた。それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えた。それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えた。それについては悪かったよ、だから痛む額にもう一度衝撃を与えた。」

言いつつ、さりげなく息のかかりそうな距離から一步後退する碓氷。

「んでも、何の用だ？ つか俺が屋上にいるつてよくわかったな」「そりや愛する人のことなんだからなんでもわかるよ。と、言いたいところなんだけど本当は一週間前から碓氷くん昼休みになるとお弁当も食べずにずっとここにいることは既に調査済みだから今日もここにいるかなーとこいつ私の予想が的中しただけだつたりするだけなのだ！」

「調査済みって・・・しかも昼休みになると必ずここに来るつてことを一週間前から知つてたつてことは俺がこいつなつた初日からずっと様子見てたつてわけか」

「そうそうこれぞ愛のなせる技。ここまでの大執念深さは碓氷くんに対する深い愛があるからこそものなんだよ！」

「その執念深さと人をつける技能のこと世間一般では『ストーキング』と呼ぶ」

「法律に背いてるわけじゃないから問題ないのだが。あ、そういう要件の方なんだけど見て見て碓氷くん」

と言つて、何故か持つてきていた学生鞄を『アレヤ』と漁り出す達瀬。

『じゃーん！』 という間抜けなセルフヒートと共にその中から飛び出してきたものは・・・

「弁当・・・？」

「碓氷くん最近様子へんだったからさ、元気出るかなと思つてお弁当作つてきたんだ。どうどう、女の子の手作り弁当だよ手作りだよ、て・づ・く・り」

「ありがたくはあるが『手作り』の部分を強調するのはマイナス

ポイントだな。上へこりの謙虚な態度で差し出すのが至高つても
んなんだよ」「み

呆れながら軽くアドバイスする碓氷。それを聞いて逢瀬は「碓氷
くんはテンプレ展開がお望みなのか…つむむ、なかなか奥深し碓氷
道……」などと顎に手を当ててぶつくと意味のわからないことを
言い始める。

いつも光景すぎて呆れ返ってしまった碓氷は、やれやれといっ
た風に苦笑を浮かべて、

「で、何でまた弁当なんか作つてきたんだ？　お前のことだから
元氣付けること以外にもいろいろ目的があるんだろ？」

「なんてシャープリーなマイダーリン…、でもこれはこれで『ワ
カツテル』ってかんじでいいかも…？」

「茶化してないで言つてみるよ。言わないと受け取つてやらない
ぞ？」

と訊ねてみると、逢瀬は急にぱつが悪そうな顔をして、

「え、えつと……、どうしても言わない」とだめ、かな？」

「弁当を全部自分で食べたいっていうのなら別に言わなくてよい
いんじゃないか？」

いつになく意地悪な碓氷に対し、むむむ…と唸りながら悩む逢瀬。
しかし、その勝負も長く続くことはなかつた。

「わかつた、私の負けだよ。といつか碓氷くんのお願いを断るこ
となんてできないし…」

「ほん、と逢瀬が咳払いをする。いつになく真剣な逢瀬にちよつと苛めすぎたかと少し後悔する碓氷だが、ここまできて冗談と言えるわけもなく、とりあえず黙つて話を聞くことにする。

「つまり、ね。碓氷くんが元気ないと私も元気出ないと云うか…、そんな碓氷くんを見てると辛くなるつていうか…心配つていうか…だから相談に乗つてあげようかなつて…」

妙にたどたどしい話し方だつた。

いつものマシンガントークのような喋り方や、明るい性格からして彼女がこいついう風になることは極めて珍しい。

それだけ、碓氷のことを中心としていたのだろう。

「ああ、悪かつたな心配かけて」

ポン、と自分より少し背の低い少女の頭の上に手を乗せる。

その際特徴的なリボンが少し邪魔になつたが、大した問題ではない。

い。

「大丈夫だ。いずれ決着はつけぬし、そうしたらまたこいつのように楽しくやつてこけるを」

逢瀬にはきっと彼が言つてゐることの意図を理解することができなかつただろ。」

だが、碓氷にとつてそんなことはどうでもよかつた。

これは一種の儀式のよつなものだ。

たとえこの先どれだけ傷だらけになつたとしてもこの日常だけは守つてみせる。自分の中にあるそんな意思を明確にさせための儀

式。

その日常の一部を、碓氷は正面からじつと見つめる。

しかし、逢瀬も頭に手を乗せられながらも少しだけ顔を上げてこちらを見つめ返してきたため、自然と見つめ合つよつた力タチになつてしまつていた。

ほんのつと赤く染まつた頬に、上田遣いの少女。

(ああ、じつじてみればじつも結構かわいいのにな)

微妙に気恥しくなりながらも、碓氷はそんなことを思つたまにはじつじつ霧囲氣も悪くないものだな、と思つたそんな時だつた。

「……ここの霧囲氣のところ申し訳ないのだけれど」

いふはずのない第三者の声が、碓氷の耳に的確に届いた。

警戒しつつもそちらに視線を向けてみると、そこについたのは屋上の入り口ではなく、2m以上はある落下防止用のフェンス。それを背景にして屋上に立つ黒髪ロングをポーネテールでまとめた少女。

「タ、緋・・・?」

それは、今の碓氷にとつて死神とも呼べるような存在。

そして、一週間前に助けよつとしてくれたある種恩人でもある少女。

敵か味方か全く見当がつかない。

そんな少女はかつかつと音を立てながら田に照らされて少し熱くなつたコンクリートの地面を歩き、そして碓氷の前で止まると先程の逢瀬とは違う少し攻撃的な上田遣いでこんなことを言つた。

「……碓氷夕夜……話がある。内容は大体わかると思つけど今お前が関わっている事件について」

そんな彼女の口から放たれた最初の言葉は今の碓氷にとって少し予想外な言葉だった。

そのため、少し面食らつてしまつた碓氷だったが、

「何か、知つてゐみたいだな・・・

警戒をしながらも会話を繋げる。

敵か味方かよくわからないが、情報を教えてもらえるといつのであればそこに損はない。もし敵だつたしても聞き出した後に始末すればいい話だ。

だが、彼女は搖波やシグナルと同じように都市伝説の一つで、未知数の存在だ。

もし戦いになつたとして、果たして彼女に勝てるのだろうか？

緊張が碓氷を包み込む。

もし最悪の状況になつたとしても逢瀬だけはこの場から逃がそうと考えた…その時だつた。

ものすゞくハングリーな音が屋上に響き渡つた。

そんな音に、屋上にいた全員が思わずその場に凍りつく。音の発信源は明白。顔色一つ変えず、相変わらず攻撃的な視線を送り続ける少女のお腹。

あまりにも間抜けな展開に思わず啞然とする碓氷だが、隣にいる逢瀬はあらうじとか苦笑いを浮かべながらこんなことを言った。

「えっと、お弁当あるけど貴女も食べる？」

「ふへえ～、そんなことがあつたんだ。もしかして碓氷くんつてばものすつじくピンチ？」

お弁当を3人で囲みながら逢瀬にこれまでの経緯こきさつを説明し、そしてそれを聞いた彼女の最初の感想がそれだった。

ちなみに碓氷が逢瀬に対して説明を行つている間、謎の少女こと夕緋はもくもくとお弁当を食べることに専念していたため、今まで一言も喋つてはいない。

ついでに彼女の無愛想さがそつをせるのか、黙々とお弁当を摘まんでいる姿はどこか不機嫌そうにも見える。だがこれはきっと氣のせいだろ？。いや、気のせいだということにしておく。

「まあ大体そんなかんじだ。ちなみに公園でのことは委員長や天月には詳しく説明してない。天月はともかく委員長はかなりしつこ聞いてきたからごまかすのにかなり苦労させられたけどな」

「なるほど、それで美原さんの様子もたまにおかしくなってたんだね。碓氷くんの症状が出始めたのとほぼ同時期からそうなつてた

からこれは何があるなって思つてたけど、いつこうカラクリだつたとは~」

「お前なりに真剣に言つてるつもりなのかも知れないが棒読みにしか聞こえないのは何故だ……。まああれだ、委員長にはいつか話す時が来たら話そうと思つてる。天月はどうか知らないけどな」

「……それについてはいい判断だと思つ」

と、突如口を挟んできたのは今まで一切会話に参加してこなかつた夕緋だ。

あまりにも急な会話への参加だったので、多少驚いて言葉を失つた逢瀬と碓氷だが、少女はそんな一人に対しリアクションを示すことなく紙コップに入っていたお茶を口に含む。

そしてその紙コップをまるで茶道部が陶器のお椀に入ったお茶を扱うように両手で持つて、

「……でも、今彼女に事情を話したことだけは納得がいかない。彼女はただの一般人……話したところで協力できるとは思えないしむしろ危険な目に合う確率の方が高い」

少女の紅い瞳が真っ直ぐ逢瀬の方へと向けられる。

「……なのに、どうしてこいつを巻きこんでしまうかもしれないと考えていらないわけではなかつた。なのに、気がつけば事情を話してしまつていた。」

わからなかつた。

心の奥底では彼女の言つているように、逢瀬を巻きこんでしまうかもしれないと考えていらないわけではなかつた。なのに、気がつけば事情を話してしまつていた。

まるで、今自分がやっている非常で刺激のある出来事を自慢するかのようだ。

(違う………)

頭の中でそれを否定する。

そんなわけがなかつた。そんな理由で逢瀬を巻きこんでいいはずがなかつた。

ならばどうして巻き込んだ?

答えが出ない。いろんな理由を考えてみるが、どれもしつくつとこない。

そんな状況を見兼ねたのか、夕紺。

「……答えられないのなら、こいつを今すぐこの場から遠ざけるべき」

平坦な声だった。だが、たったそれだけで碓氷の背筋に何か冷たいものが走つた。

改めて、碓氷は今自分がいる世界のことを思い知る。シグナルや搖波、そして目の前にいるこの少女はやはり異常だ。

大したことはないと思っていた過去の自分を殴つてやりたくなつた。

「こいつは普通じゃない。

改めて碓氷は彼女達のような存在の認識を頭へと叩き込む。

隣にいる逢瀬は目の前にいるこの少女が放つた威圧感に対しても、

どんな表情を作ったのだろうか。

恐怖しているのだろうか、涙しているのだろうか、こんなことになるとなら興味本位で聞かなければよかつたと後悔しているのだろうか。

そんなことを考えつつ、ゆっくりと首を動かして逢瀬の方へと視線を向ける。

彼女は、

「私は逃げないよ？」

いつも通りの表情と、いつも通りの口調だった。

そんな彼女の様子に驚いたのはもちろん碓氷だけではない。

異常である存在の少女、夕緋ですらやの驚きを隠せず、ほんの少しだけとはいえ眉をひそめたほどだ。

「……逃げない？ そんなものはハッタリ……実際に体験すればわかる、人間なんてそんなもの。大体お前はこの話を信用しきれてないはず。突然『都市伝説』とか『パンドラの箱』とか言われて簡単に事態を呑み込めるほど人間という生き物は強くできない」

「それは甘いよ夕緋ちゃん、私はこれでも都市伝説にはある程度詳しいしここ最近不思議な出来事に何度も遭遇してるしダーリンの言つことなら何でも信用しちゃひからうこの話だつて信用できりやつたりしているのだよ！」

「何でもって……、騙されやすいなと思つて何回かお前に軽い嘘ついてた過去に罪悪感を覚えるんだが……」

「た、たまに碓氷くんの言つ通りにしてると変だなって感じることあつたけどそういう……、はつ、もしかしてもしかして碓氷くん

つて女を振り回して飽きたら捨てるタイプ！？

「流石にそれはねえよ……」

ツツツツを入れつつ、碓氷は大きなため息を一つ吐く。
そして夕緋の方へと視線を戻すと、

「だ、そうだ。お前の意見には賛同できるが逢瀬の気持ちを汲んでやりたいってのが今の俺の本音だ。まあお前が力づくで追い払うつて言ひながら流石に逃がすけどな」

「ほほあきらめたように夕緋に会話を投げる碓氷。だが、どうやらあきらめたのは彼女も同じだったらしい、呆れたようにやれやれと首を振ると、

「……わかつた、夕夜に免じて！」は不問にしておく。ただしこの先お前が私達の足手まといになるようなことがあれば容赦なく切り捨てる

「夕緋ちゃんはともかく碓氷くんの足手まといになるようならそうしてもらつた方が本望かな。じゃあ全員が納得したところで前置きはここまで……と言いたいところなんだけど最後に一つだけいいかな？」

逢瀬の唐突な質問に、一瞬怪訝な顔を浮かべつつも数秒後には首を縦に振る夕緋。

それを確認した逢瀬は、実に不満そつた表情で、

「碓氷くんと夕緋ちゃんってどういう関係？『夕夜』って呼び捨てにしてるところからなんだかライバル臭がぷんぷんするんだけど……？」

そして飛んできたのは「く当たり前の質問。

しかし、今この場では限りなく意味不明な質問。

思わず「は？」といつ声を漏らしてしまった碓氷だが、啞然とする間もなく夕緋がまるで漫才でもするかの如く、いつ即答した。

「……ただならぬ関係、とだけ答えておく」

「俺心当たりない！？」

「……結論から言つて、『都市伝説』が私達の正体……そしてこの世の不思議の正体である」

お弁当を摘まみつつ夕緋による特別授業はそんな一言から始まつた。

いきなり意味不明な言葉から始まつたので多少困惑した碓氷だったが、『結論から言つて』と、彼女が前置きしたことから察するに、この後に説明が続くのだろう。

もともと授業態度が悪く、質問などすることもないし、なんとか質問する気ではなかつたのだとあえず黙つて聞いておくことにする。

「どういひと？」

と、碓氷が決心した直後に授業態度がすこぶる良い逢瀬の質問。流石優等生。いくつ少数のクラスメイトの間で囁かれている『霧囲^{シリ}アスブレイカー』の異名は伊達ではないらしい。

しかし、それでひるむ夕緋ではないらしく、彼女は割り箸を器用

に操つて弁当箱からワインナーを一つ摘まみ取ると、

「……人の言葉というのは力を持つてる。その力は小さなものだけど、たくさんの言葉が集まればそれは次第に大きくなる。『塵も積もれば山となる』とはよく言ったものだと私は思う」

言つて、夕緋は小さな口を開けてワインナーを一口かじる。

言つていることの意味は碓氷でも理解できたが、それだけで何もかもがわかつてしまふほど碓氷の頭はできたものではない。

「言葉が力を持つてまるでマンガの世界だな……、つまり呪文とか唱えるとシグナルや搖波みたいな不思議な力が出せるってことか？」

「……ある意味正解かもしれないけどそれは違う。個人の言葉だけでは力はあまりにも少ない。必要なのは多くの言葉。それが私達を形作る」

「形作る……？」

「クリ、と夕緋が首を縦に振る。

その拍子に黒いポニー テールが揺れるが、彼女は気にせず食べかけのワインナーを小皿　ここでは弁当の蓋　に乗せると、

「……私達『都市伝説』は人々の言葉が元になつて完成するもの……、『口裂け女』とかそういうのが最も具体的な例だと思つ」

「ううん、確かにああいうのは大抵噂が広まつてできあがるもんだが……つまり噂の元となる『主役』の人間の噂が広まつて大きくなつたそれが都市伝説になつたことでその『主役』も都市伝説になるつてことか……？ 自分で言つて意味わからなくなつてきたんだが……」

「……言いたいことは大体わかつた。でもそれは違う、私達『都

市伝説』は人間じゃなくて人間の言葉からできた存在。人間の言葉が持つ力がそのまま具現化したもの

「・・・？ ますます意味がわからないんだが…？」

あぐらをかいた体勢で腕を組み、頭の上に『？』マークを浮かべまくる碓氷。

対して授業を受けつつおにぎりをほおばっていた逢瀬は、それを数回咀嚼した後にそれを『ぐく』と飲み込むと、これまた通りの調子で、

「つまり私達の言葉で作られた都市伝説がそのまんま人間の形になつて夕緋ちゃんみたいに具現化しちゃうつてこと？」

とんでもない逢瀬の言葉に、『クリと首を縦に振つて肯定する夕緋。

「……言葉には力がある。お前達人間の身近にあるものを例に挙げればいじめとかがそれに最も当てはまる。何気なく放つた『死ね』という言葉が積み重なり、結果本当に死んでしまうという例は珍しくない」

「ずいぶんと具体的な例だなあい……、確かにそう言われてみれば納得できるけどあれは心理学的な問題じゃないのか？」

「人間は言葉の力がもたらす影響のことをそう呼んでいるのかもしないけどそれは合っているようで違う。個人の持つ力はとても小さなもののだけど多く集まり、積み重なった言葉が持つ力というのは人間が思つてている以上に強力なもの」

「普段何気なく放つてる言葉が実は恐ろしいものだなんて誰も思わないもんね。でも夕緋ちゃんが言つてることが本当なら神様へのお祈りが叶つたとか誰かへの呪いとかそういう不思議な現象にも説明がつくよね」

という逢瀬の適当な解釈に対し、夕紺は首を横に振る。

「……そういう現象やそういうことをして現れた私達のような存在もいるけどその例は少ない。私達の大抵は本当に何氣ない言葉・つまり『そんなものは絶対に存在するわけもない』という無責任な言葉から生み出される。その多くが都市伝説から生まれることから私達は自分達のことをそう呼んでる」

「なんとなく納得いかないが……もし仮にそうだったとして、お前達の不思議な能力についてはどう説明するんだよ。いくら都市伝説でもそこまで細かい設定を考えるヤツなんてごく少数しかいないはずだろ。お前の言う通りならそのごく少数の言葉が具現化することは思えない、そこはどう説明するんだ？」

「……能力についてはかなり小さなものでも採用されてしまう。例えば、都市伝説を作り出した100人の内一人が『その都市伝説に現れる女の子は炎を操る』という勝手な設定を加えただけでその『都市伝説』は炎を扱えるようになる……。簡単に言えば一つのロップの中にいろんな水をそいでいくのと同じだと思えばいい。そのいろんな水の中に混ざっている『塩』が『能力』……そういう風に考えるのが一番妥当だと思う」

「なんともいい加減な設定だな……、それだといろんな能力を使えてしまうことにならないか？」

「……そんなことはない。言葉の中から抜き取られるのは共通してる部分だけで100人中一人が『雷を操る能力』という言葉を発したのに対し三人が『炎を操る能力』という言葉を発した場合、炎の能力が優先されて雷の能力は消え去ってしまう

「多いものが優先されちゃうってことだね」

軽い調子で補足した逢瀬に対し、今度はコクリと首を縦に振つて

肯定する夕紺。

「……この現象についてはまだ正確に分析できるわけじゃない。でも長い時間をかけて調べてみて一番辻褄が合つ説がこれだつた……、他の連中も独自に調べた結果必ずこの説に行きついていたからほほ間違いはないと思つ」

なるほどね、と適当に相槌あてひんをうひつつ、碓氷はこれまでに得た情報整理してみる。

まず、この少女の話はほとんど納得のいくものだったということ。言葉が力を持つということについてはあまり信じ切れではないが、それ以上の不思議な力を持つ彼女達のような存在がいるということは、そういう力があつてもおかしくはないのだ。

しかし、何がが解せない。何が解せないのかはよくわからないが、とにかく何かが喉に詰まっているような……、原因がわかつていないのでどうしようもないのだが、とにかく嫌な感覚だ。

「…………で、ここからが夕夜が今関わっている事件の……、夕夜？」

夕緋の声で、はつと我に返る碓氷。

どうやら深く考え込みすぎていたらしく、そんな碓氷を怪訝に思つたのか夕緋が不思議そうにこちらを見つめている。

そんな彼女に「なんでもない、続けてくれ」と返事をすると、しぶしぶといった様子で納得したらしく、講義が再開される。

「…………じゃあ、ここからが夕夜が関わっている事件についての話。といつても私はシグナルや搖波が作った『バウンサー』については詳しく知らないからそれについて話すことはできない」

「やっぱあいつらと団結してるってわけじゃないのか。あの公園

でも思いつきり敵対関係っぽい雰囲気だつたしなあ……。事情を聞こうにも気付けばお前の姿は見当たらなくなつてたし

「……あの時はまだ決心がついてなかつた。だから話すことがで

きなかつた、それだけ」

「決心?」

「……そんなことはどうでもいい。今は状況を把握しておくことの方が大切」

妙に強い口調だつた。

どうやら、あまり触れてはほしくない話題だつたのだろう。そうでなければ今まで冷静で淡々とした口調だつた彼女が、そんなふうになることはない。

まあ話の内容からして後で説明してもらえそうだし今はいいか、と納得しつつ碓氷は再び彼女の講義に耳を傾ける。

「……まず最初に言つておくべきことは、私達に共通している目的があるということ。もちろんそれはこの街に存在している『都市伝説』だけじゃなくて他の、世界中の『都市伝説』も共有している目的」

「な、なんかすつい大規模な話になつてきたね、これつてもしかしながらも碓氷くんつてば本当にとんでもない事件に巻き込まれちゃつてる?」

「……そう、これはヘタをすれば地球上にいる不思議で強力な力をもつた『都市伝説』が全面戦争を始めてしまつてもおかしくない問題。そうなればどうなるか…、お前達でも少し考えればわかるはず」

「キューバ危機並の大問題だねそれ。スケールが大きすぎてイマイチ実感が湧いてこないけど…そんなスケールの大きい問題と碓氷くんがどう関係してるの?」

「……“パンドラの箱”、か

夕緋の代わりに碓氷がその答えを口にする。
そして、じうやらその答えは正解だったたらしく、「クリと首を縊
に振る夕緋。

「“パンドラの箱”って…あの『開けたら災厄が振りかかる…』
とかつて箱だよね？」

と、補足説明を入れたのは逢瀬だ。

「でもそれと碓氷くんに何の関係があるの？」

「……“パンドラの箱”、それは確かに存在するもの。そしてそ
れは今、碓氷夕夜という一人の人間が所持している」

答えにもならない答えを淡々と告げる夕緋。

対して今まで会話に参加せずにから揚げをほおばっていた碓氷が、

「ちよつと待て、俺はそんなの持つてないぞ

「碓氷くん碓氷くん、私の作ったから揚げがおいしいのはわかる
けどそこまでして食べてほしいわけじゃ…あ、でも夕緋ちゃんの話
と私の作ったから揚げの価値感が拮抗しているといふのはいいこと
なのかー！？」

ほぼ日常モードの逢瀬に、日常モードでから揚げを咀嚼する碓氷。
そんな空氣に耐えかねた夕緋がコホンと一つ咳払いして雰囲気を
元に戻し、それによつて碓氷はから揚げを飲み込み、逢瀬は少し申
し訳なさそうに黙り込む。

そんなこんなで満足したのか、講義を再開する夕緋。

「……まあ、夕夜が知らないのも無理はない。あれは現実に実在しないもの。そして私達と同じような……いや、私達以上に不思議な存在」

「お前ら以上に不思議つて…、一体その“パンドラの箱”つてのは何なんだ？ どうして俺がそんなものを持つてて、どうしてお前達はそれを狙つてるんだ？」

という碓氷の言葉に、答えを出さない夕緋。

戸惑つてているのか、彼女は先程から碓氷と視線を合わせようとせず、どこか俯き気味で、しかし時々何かを言いだそうとするが、ためらつて途中でやめる。

そんな行為を繰り返すこと数回、しひれを切らしたように、逢瀬。

「言いたく…ないことなの？」

「……言いたくは、ない。でも、言わなきゃいけない。そのためには、今日私はここにいる」

そう言つと、彼女は意を決したように碓氷の目をまっすぐと見据える。

そして碓氷も目を逸らすことなくそんな彼女の瞳を見つめる。

吸い込まれそうな緋色スカーレットの瞳。その日本人特有の名前に似合わない、外国の雰囲気を持つ色。

そんな瞳を持つ彼女が、

「……“パンドラの箱”は　　」

真実を告げようとした、その時だった。

「麻野夕緋ツ！！」

バンツ！と勢い良く屋上の扉を開く音と共に、そちらを振り向いた碓氷の視界に映つた人物は、

「委員長…？」

腰のあたりまであるストレートロングヘアに、少し身長の高い、
クラスの委員長。

つまり、『美原沙希』^{みはらさき}は、知り合いである逢瀬や碓氷ではなく、
本来接点のないはずの不思議な力を持つた『都市伝説』の少女の名
を叫びながら、屋上に現れた。

災禍の幕開け 7（後書き）

2週連続で一万文字突破したが・・・
退きません！媚び諂ひません！反省してませんーー！（ピンポン）
おや、誰か来たようだ。

災禍の幕開け 8（前書き）

2週間空いたので4回分一気に更新です！
今回は神無月末人さんの番です！

そして美原は、碓氷と逢瀬には全く目もくれず、一直線に夕緋に向かつて駆け出した。

その表情は、まるで待望していた千載一遇のチャンスを逃すまいというような焦燥感に駆られていて、怒っている時とは別種の迫力があった。

「うおっ……！」

駆け寄つてくる彼女の目標は夕緋のようだが、その延長線上にいる碓氷は、自分へと迫つて来ているように感じて思わずのけぞつてしまつた。

そんな碓氷の反応を見て、怪訝けげんそうに眉をひそめた夕緋が、初めて美原の方を振り向く。

その時には既に、美原は田と鼻の先まで肉薄していて、更には夕緋の腕を掴もうとしていた。

「きやつ！」

危ういところで夕緋は可愛い悲鳴を上げながら、飛びのいて身をかわした。

「ちょ、ちょっと、逃げないでください！」

美原がそう要求するが、夕緋は警戒をあらわにしてどんどん離れていく。

そうして3メートルほど距離を置いた時、夕緋は碓氷へ視線を移した。

「……邪魔が入つたから、もつ帰るわね。また口を改めて話すから、少し待つていて、夕夜」

「お、おう……」

「あつ、待ちなさい！」

美原が呼び止めるものの、夕緋が聞き入れることはなかつた。屋上に一瞬だけ強い風が吹き、その場にいた全員が目をつむつた。

そして再び目を開いた時には、夕緋の姿はビニにもなかつた。

「……相変わらず、逃げ足は速いですね」

苛立ち半分、徒労感半分といった感じの声を落とす美原。
未だに逢瀬と一緒に座り込んでいる碓氷が、傍^{そば}で立ち尽くす美原を見上げる。

彼女は夕緋にいつたい何の用があつたのだろうか？ 二人の関係は？ 気になる。

「えっと……美原先輩って、夕緋と知り合いだつたんですか？」

「知り合^いといえれば知り合^いですけど……仲はそんなに良くないですね」

「それはまあ……やつきのやり取りでなんとなく分かりました」

一方は鬼気迫る顔で追いかけ、もう一方は警戒をあらわにして逃げる。鬼ごっこで遊んでいたと仮定しても、とてもじゃないがフレンドリーな関係には見えなかつた。似たようなやり取りを挙げるとしたら、警察と逃走犯の関係の方が適切だろ？

「美原先輩は、夕緋に何の用があつたんですか？」

「それについては、話せません。……って、そういえば」

何かに気付いた面持ちで、美原が碓氷と逢瀬の顔を眺める。

その厳しく細められた双眸に戸惑う一人。

「な、なんでしょうか……？」

少しでもこの気持ちを払拭しようと、碓氷が問いかける。

「あなたたち……麻野夕緋が突然消えたにもかかわらず、驚かないんですね」

返ってきたのは、どこか探りを入れるような声。

その発言の意味するところと、そして碓氷たちと同様に驚いた様子のない美原に気付き、碓氷は息を呑んだ。

それだけで、美原は大体のことを察したようだ。

「……どうやらあなたたちも、この街の非日常的な一面について知つているようですね」

「ということは、美原先輩も？」

「ええ、そうですね」

「じゃあ、美原さんにも何か『都市伝説』があるんですか？」

「そう質問したのは、碓氷ではなく逢瀬だ。非日常的な事情を知つても、そういう事柄への興味は健在のようだ。」

「それについても、答えることは出来ません。あなたたちが敵か味方か分からぬ以上、重要な情報を明らかにするわけにはいきませんので」

「俺たち、美原先輩と敵対するつもりはないですよ」

「それを判断するのは私です。すみませんが、これはかなりシビアな問題ですか？」

「確かにそうかもしれないですけど……」

「理解はできる。ただ、納得がいかない。」

友達と呼べるほど碓氷は美原と親しくないが、それでも世間話をする程度には仲が良い。特に天月の話となると、自分が彼女のどちらかが用事などで立ち去らない限り、長く会話が続くことも少なくない。にもかかわらず、無条件で信じてもいいことは出来ないというのだ。

怒りか、悔しさか、悲しみか……適切な名称の見当たらぬ感情が湧き上がる。

「ただ……」

碓氷がその感情を抑えて黙つていると……美原の優しげな聲音が耳に届いた。

「私も、出来ればあなたたちと敵対したくはないと思つています」
碓氷が、いつの間にか俯き気味だった顔を上げる。

「美原先輩……」

その言葉で、少し救われた気がした。

まだ納得はいかないけれど、おかげで名状しがたい感情が霧散したのを感じた。

言つてしまえば、安心したのだ。

これから先、どういう展開が待ち受けているのかは分からぬが

……少なくとも現時点では、知人である美原紗希は、自分たちと同じ気持ちであるから。

「…………それはそうと、碓氷君？」

と思つたの束の間。^{つか}直後には怒氣を身にまとつた風紀委員長にぎつしりと両肩を掴まれていた。例の迫力を目の前にして、碓氷は圧倒される。

「屋上は基本的に立ち入り禁止で、扉には鍵が掛けられてあって、教師以外の人は来られないはずなんですが…………どうやつてここへ？」

「え？ それは、天月から複製の鍵を ジゃなくてつ！」

慌てて口を両手で塞ぐ。が、もう後の祭りだ。

「へえ、そうですか。また天月君ですか」

心なしか、怒りの度合いが高まつた気がする。ついでに指が食い込んできて肩が痛い気もする。

しかし、搖波煉魅のごとく逆らえない雰囲気を美原が発しているので、碓氷は全く抵抗できない。

(こうなつたら……助けてくれ、逢瀬！…………って、あれ？)

碓氷が首を動かして逢瀬にアイコンタクトを送ろうとする。…………しかし、屋上のどこにも逢瀬の姿はなかつた。

直後、ポケットの携帯がメールを受信して震えた。

まさか……と思いながら碓氷はメールの内容を確認する。

そこには、簡潔にこう書かれていた。

『ごめんね、ダーリン。先に教室に戻つてる』

予想通りの、裏切りの通知。

(薄情者めえ……！)

怒りと悲しみで、携帯を持つ手が震えた。

「これはもう、天月君も同罪と見なさざるを得ませんね。碓氷君だけでなく、天月君にも処罰を受けてもらわないとけません」

「…………ということは、美原先輩は元々、俺を連れ出すためにこゝへく

？」

「ええ、そうです。想定外にも、麻野夕緋を見つけたのでそちらを

優先しましたが、屋上へ来た目的はその通りです」

碓氷は屋上の扉を見た。扉には正方形の小さな窓が嵌められてるので、そこから夕紺を目に留めたのだろう。

「そういえば、碓氷君は余計な真似もしてくれましたねえ」「え？ 余計な真似？」

首を傾げる。なんのことだかさっぱり分からない。

「私が現れた時、あなたが驚かなければ、麻野夕紺が振り向いて私に気付くことはなかつたんです！」

「いや、ちょっと待て！ それは言いがかりだろ！？」

理不尽なことを言われて、つい敬語で話すことも忘れる碓氷。「バンッ！ つて思いつきり音を立てて扉を開けた拳句、夕紺の名前を叫んでおいて、本人に気づかれないわけが」と、そこまで言つて碓氷は思い出す。

（……そういえば、夕紺は俺の反応を見てから美原先輩の方を見たような……？）

違和感がある。耳が聞こえないわけでもないのに、あんな大きな音と、自分の名前を呼ばれて気づかないはずがない。

（もしかして、あれが美原先輩の……）

「とにかく、碓氷君には処罰を受けてもらうため、生徒指導室へ連行します」

生徒指導室。その単語を耳にした瞬間、碓氷の思考は強制的に中断された。同時に、ある人物の顔が思い浮かぶ。

「……いま、生徒指導室とおっしゃいましたか、風紀委員長様？」

「ええ、言いました」

だらだらと冷や汗を搔く碓氷。対照的にニーッコリと笑う美原。

「ということは、ですよ？ もしかして……あのお方が待ち構えていらっしゃるんでしょうか？」

「ええ、きっと碓氷君の予想している通りです」

サッと、碓氷の顔から血の気が引いた。

そんな碓氷に一切構うことなく、美原が襟首を掴んで引っ張る。

「それでは、行きましょうか。生徒指導室 もとい、あなたたち
がゴリ山先生と呼称している人の元へ」

「い……いやだああああああああああああああああああああ
ああああああああ！」

その時の碓氷の叫び声は、同時になったチャイムの音をも上回つ
たそうな。

災禍の幕開け 8（後書き）

みんなどんだけ「ゴリ山好きなんだ・・・」
最初はモブのつもりで出したうえに満場一致で「ゴリ山の参戦を許可
したのでアリということに・・・」
る、ルールは破つてないからね！？

災禍の幕開け 9（前書き）

一瞬今日が更新日だということをガチで忘れかけていた・・・。
今回は義人さんの番です。

「酷い日であった…………」

時刻は午後6時30分……最後の授業が終了してからずつと山に生徒指導という名の雑用をさせられて今に至る。アイツ、いつかお礼参りしてやる…………！

因みに天月も一緒に雑用をさせられたいた訳なのだが、風紀委員長様の厳命により、風紀委員長様直々の説教も加算されている。おそらくまだ序章だろ。う。

そんな天月に黙祷を捧げていると、携帯にメールの着信があった。

「…………ンゲッ？！」

表示された名前は『シグナル』だった。激しく無視したい衝動に駆られるが、後々の事を考えて、メールを確認する事にした。

>>ヤツホー碓氷君 元気かな！？

俺の方はちょっと陥我しちゃった（テヘッ

まあそんな事はどうでもいいんだけどね（笑）

とりあえず重要な用件があるから今からちょっと出て来れないかな？

因みに拒否権はあつません（笑）

>>住所は以下の通りで宜しく～

「…………」「…………」

「………… ウザエ？！」

「ココ一週間、仕事はシグナルから直接メールを届けられて来た訳だが……正直、内容はともかく書き方がウザい事この上無い。最近わかつた事だが、性質が悪い事にシグナルはわざとこんなウザつたらしい文面で送信している節がある。人がウザがるのを楽しんでるようだ。うん、性格が悪い。わかつてたけどさ！

しかし、いくらウザいとは言え無視する訳にもいかない為、渋々ながら一緒に送られて来た住所の場所へ向かう。

大体徒歩で15分と言つた所だろうか。そこは予想外の場所だった。

「………… 病院？」

メールを見た段階で気付けばいいのだが、そこはこの街で最も大きな病院だった。俺もたまにだがお世話になるので良く知っている。「何でこんな場所に……？」

「来たか……」

俺が病院を見上げていると、ココ最近良く聞く声が話しかけてきた。

「 摺波？」

そこには黒いスーツ以下略のいつも通りのファッショントした摺波が壁に凭れ掛かっていた。今言う事かはわからないが、他の服は無いのかコイツ？ 言い辛いから言わないけどさ！

「お前も居たのか。というか、こんな所に呼び出して今日は何の仕事なんだよ？」

「今日は仕事じゃない。とにかく来ればわかる、来い」

と、説明もそこそこに病院の中に入つて行く。こういうのも何だが、普通に正面から入るとは思つてなかつた辺り、俺も大分非常識というものに毒されてきたのを実感してしまつた。

「…………？ 何を落ち込んでいる？」

「いや、別に……」

「？ まあいい、着いたぞ」

案内されたのは何の変哲も無い、普通の病室だった。少なくとも外から見た限りでは。

揺波がノックすると、中から「どうぞ」という声が聞こえた。揺波に続き、病室に入ると予想外過ぎる光景が目の前に広がっていた。

包帯でグルグル巻きの左足。
包帯でグルグル巻きの右腕。
包帯でグルグル巻きの胴体。
包帯でグルグル巻きの顔面。

包帯でグルグル巻きのシグナル。

「どうしてこうなった？！」

病院という事も忘れて叫んでしまう。

そんな俺の様子を眺めながら、シグナルはカラカラと笑う。包帯でグルグル巻きのミイラ男状態なのに。

「病院では静かにね」

「いや、まあそんなんだけ……え？ なんでこうなってるんだよ

？」

正直、コレまで仕事だとかなんだとかでシグナルが戦う所を多少なりとも見て来たが……「コイツがこんな状態になる状況というものが一切想像できない。

「…………車に轢かれた？ いや、そんなタマじゃねえよなあ……。
負けた？ 誰に？
色々と試行錯誤した結果。

「…………そうか、ドッキリか！」「

といつ結論に行き着いた。うん、コレが一番じつへり来る。

「……残念ながら怪我は本当だ」

と、搖波が補足する。

「クハハツ！ ドジつた！」

と、当事者が一番無意味に明るい。

「と、まあそんな些細な事は今回どうだつていいんだよ」

「いや、個人的に凄い気になるんだけど？！ ビジやつたらそんな風になるの？！」

地震起こしたり、竜巻発生させたり、空中を自在に歩いたり、何してもノーダメージな奴がこんな風になつていいのだ。気にならぬいかと言われたら嘘になる。というか、どうしてそうなつたか知つておくと後々便利そうである、という打算も無くは無い。下克上の意味で！

「え？……。言つてもいいけど参考にならないよ？」

と、前置きを置くと。

「思い切りぶん殴られた、以上。おしまいさて、本題だけど

「ウヨーイ！ 待て待て待て！ 詳細カモンブリーズ！」

「碓氷、キヤラ変わつてないか？」

搖波が突つ込んで来たが構いはしない。俺にとつてコイツの弱点を知つておく事は非常に重要なファクターである。

はあ～っと深いため息を吐くと、シグナルは渋々と言つた調子で説明をしてくる。

「わかつたわかつた。とりあえず時間の都合で今回は都市伝説云々の話はスルーで行くよ。話の続きは夕緋ちゃんに聞きなさい」

都市伝説、と聞いて一瞬で思考が元に戻る。シグナルの弱点話が思ひぬ方向で核心に触れようとしていた気がした。

「都市伝説つて

「俺からは面倒だから言わないよ？」

と止められた。

「いいから黙つて聞いて。時間あんまり無いんだからさ。まず、口で言う都市伝説って言つのは所謂、異能者達の事。一応勘違いしないで欲しいけど、異能者＝都市伝説じゃなくて、異能者の中に都市伝説が含まれてるから、その点は勘違いしないように」

シグナルは指をちょいちょいと回すと、急須が勝手に3人分のお茶を用意する。〈増幅一ブースト〉の能力の応用なのだろうが、こうした生活感溢れる使い方もできるのか……。

「都市伝説の詳細に關しては俺はスルーするけど、とりあえず異能者の中にも強い能力者と弱い能力者つてのが居て、正式では無いけど、簡単にランク付されてるんだよ。Gランク以下だとほぼ一般人か一般人。FランクからDランクでちょっとした超常現象を引き起こせるレベル。現状だと碓氷君はDランク程度の力しか無いかな。潜在能力は別として」

と、空中にグラフなどが表示される。理屈はわからないが、コレもシグナルの能力によるものだろつ。

「Cランク、Bランクで平均より上。地域によつては『魔術師』なんて呼称される程度に強力な能力を行使できる奴らだね。この辺りの能力者が一般的で且つ、異能のプロフェッショナルと呼べるランクだよ」

そしてシグナルが搖波を一警すると、

「で、彼の正式なランクまでは把握できないけど、おそらくAラン

ク まあ、異能のレアメタルのような存在だよ」

「…………嫌な例えだが…………まあいいだろう…………」

と、若干不機嫌な声を漏らす搖波。

「でまあ、それより上の能力者 世界で確認されているのは現状8人しか居ないSランク能力者、俺はその一人な訳だけど なるほど、強い強いとは思つていたが、世界でもトップ8には入る程度の能力者だったのか、納得。

しかし、疑問は全然解消されてない。

「それで、なんでそんな奴がこんなボツコボコな状態になつてるん

だよ？」

「まあ話は最後まで聞こつか」

時間が無いとか何とか言うシグナルだが、基本的に話し好きである。適当に相槌を打つておけば思つた以上の収穫は得られるのではないか？

「関係無いように思えるけど、碓氷君も能力者の基準値くらいは教えておかないと後々危ないと思ったから、教えるんだから、話はちゃんと聞いてくれないと困るよ」

「ああ、わかった」

「ドンドン話せ！ 情報を！」

「続けると……把握出来てない能力者は別として、中には把握しているけどランク付けできないような能力者も居るんだよね。判りやすい例だと、君のパンドラの箱だね。こういつのは結果どうこうは置いておいて、とりあえず特Sランクって呼ばれてるんだ」

と、一度シグナルがお茶を啜つたので、会わせて俺と搖波もお茶を啜る。うん、旨い。

「でまあ、怪我の理由は　この前、碓氷君に交通整備のバイト頼んだよね？　日給2万円なんて羽振りが良い仕事」

「ああ……」

「僕最近、悩みっぱなしだったから余り氣にしてなかつたが、そういう仕事をした記憶はある。

『バウンサー』の仕事と言つても、当初想像していたような仕事ばかりではなかつた。

グループでの街の見回りや先程述べたような交通整備など。仕事内容そのものは現状、一般的なバイトと大差なかつた。寧ろただの交通整備で日給2万というのは非常に大きい。

「実はあの時、Sランクの能力者が街に入つて来てたからね。その為にあの区画を通行止めにしてたんだよ」

「ああ、なるほど。それで同じSランク能力者の奴とやり合つて負けた訳だな」

「いや、拉致つてみたんだ」

「何さらりと犯罪宣言してんだアンタは？！」

思わず叫んでしまった。

「落ち着きなよ。まあ結果だけ言つと見ての通り失敗なんだけど……俺は彼女に負けた訳じゃないんだよ」

と、シグナルにしては珍しく鬱々として表情で、

「そのSランク能力者の彼女の知り合いに俺の知つた顔が居てね……特Sランク能力持ちのチート……いや、バグキャラだな。それにボコられてこの有様、以上」

「アレ？ 淫い勢いで端折られた？」

とにかく、と。

「アレに関しては君が一生関わる事が無い人種だから口で打ち止めするけど、口で本題。おかげ様で俺はしばらく動けません。一応、治癒力を増幅させてるけど、あと2日は動けないと考えるといよ」

「あ、ああそれがどうしたんだよ？」

「わからないか？」

と搖波。

「”パンドラの箱”を実質的に所持しているグループのトップが倒れた。コレは味方にとってピンチであり、敵にとってチャンスだ」つまり、と。

「今のお前は野に放たれた兎状態だな」

「そゆ事」

何故か楽しそうにシグナル、

「一応、君と君の周囲の警備は強化はしてるけど、俺が復帰するまでの2日間、は念のため気を付けた方がいい」

「マジかよ……？」

「まあ迷惑掛けて悪いとは思つてるよ、という訳でお詫びとしてだけ……ジヤン」

と、シグナルが取り出したのは数枚のチケットだった。名前を確

認すると……有名なレジャーだった。

「口に友達誘つて行つて来るといいよ　　といつより、行つてくれた方がまとめて守りやすいから此方としても助かるつてだけなんだけどね　　」

「…………とりあえず、その方が皆の安全は保障できるんだな？」

「マイツの自業自得丑つ、コイツの言つとおりするのは癪だが、現実問題として捉えると、言う通りにする方が皆の安全を確保できる。そう考へて俺は渋々ながらチケットを受け取つた。

「…………あんなので良かつたのか？」

碓氷君に護衛を付けて帰した後、病室で搖波と会話をしていた。

「いいんだよ。このままじや待ち惚けだしね　　」

「それもそうだが……。ところで、2日も本当に動けないのか？」

「いいや、もう動けるよ　　」

と、言つて、颯爽と立ち上がりつてみせる。実際には碓氷君との会話の途中で怪我など完治していた。

「兎にも角にも……コレで状況は動き出すでしょ　　虎兕を得るなら、まずは餌撒いて誘き出さないとね　　」

ペンドントを片手で弄りながら、

「見てなよ……君の好きだつた街は俺が彩るからさ……　　」

そして世界は闇に染まる　　。

災禍の幕開け 9（後書き）

最近後書きのネタがない・・・。
そういえば、最近トランザムしてるジギジを見かけた。

災禍の幕開け 10（前書き）

ちょっと事情もあってこんな時間に更新
W
今日は霊霊さんの番です！

レジヤー施設のチケットは合計6枚渡された。聞いてみる人は決まっていないが、多分いつも面子になるだろう。携帯電話のアドレス帳を開き、メールを送る。

そういうばこのチケット他のところと比べて割高なんだっけ。

『バイト先で先輩からPONKOTIラングのチケットもらったんだけど、行くか?』

返事はすぐに返ってきた。いや、こっちからメール送つて10秒で返すとか早すぎるだろ逢瀬……。返事はOKらしい。程なくして天月からも返信が来た。

「何だコレ……?」

返ってきたメールには何か線とか点が大量に置かれている奇天烈極まりないものだった。

『何だコレ?』

流石に解読できないので天月に返信する。すぐに返事は返つてきた。

『A A だよ。試しに文字サイズ最小にしてみ?』

言われたままに携帯の設定をいじり、サイズを変更してみる。普段より文字が見えづらくなつたが、遠目から見ると文字が浮かび上がってきた。

『行く。』

「…………紛らわしいわ天月いいいいいいいいいいいいいい！」
レジヤー施設行くかどうかの返事に手エ込みすぎだらあいつ！？
いうか何だ、アレ！？メールに書いてあつたAAつてヤツなのか！？
思わず叫んでしまつた。通行人に誰だお前といった感じで見られ
ているし、早めに帰ろう……。先週は半ば強制にバウンサーに入ら
されたし、週1で口クでもない目に逢うのだろうか？そعدだとした
ら是非とも止めてほしい。

ヴー…………ヴー…………

携帯電話がバイブルーションでメールを告げる。送り主は天月らしい。今度はなんだろうか。

『そういうや俺ら以外には誰が行くんだ？』

『未定だな。誘いたい奴がいるならあと3枚余つているけど、どうするよ』

『風紀委員長でも誘えればいいんじゃないか？』

『お前に任せるわ。』

『任せられた』

これで6枚あるうち最大で4枚な訳だが、他はどうするのだろう。
そんなことを考えていたらまた携帯が震えた。今度は逢瀬からだ。

『私たち以外は誰が来るの？』

絵文字とかが所々あるが、訳するならこんな感じか。

『天月は来るつて返ってきた。あとアイツが委員長誘ひりしい。』

『委員長つて3年生だよね?』

あ……忘れてた。そういうえば委員長3年だった。つまり受験生な訳で、遊ぶとか言語道断なイメージな訳でして……そんなことを考えてたらメールが来た。今度は天月か。2人相手にメールするつて結構疲れるな。

『委員長来るつてさ』

あとチケット何枚2枚か、ちょっと使いたいけどいいか?』

『分かった。

チケットは別にいいけど。』

来るのはよ! 受験大丈夫なのかよ!? とりあえずチケットをどうするかは気になるけど逢瀬にもメール打つといつ。

帰宅後、夕飯と風呂を済ませて自分の部屋に戻ろうとするといふく分からぬ状況に陥っていた。

一人は黒髪をポニー テールでまとめた小柄の少女、そしてもう一人はリボンつきのカチューシャが特徴的な中学生からの腐れ縁。この二人は断じて血を分けた関係でもなく、俺の部屋に居ることなど訳が分からぬ。

つまり、夕緋と逢瀬が俺の部屋でくつろいでいやがつたのだ。別に恥ずかしい内容じゃないからいいけど漫画読まれてるし。

「お前ら来るなら来るで何かしら連絡しろよ。」

「……私は連絡手段がないから。」

「え？ 一応私メールしたよ？」

逢瀬にそういわれたので携帯電話を確認する。ああ、風呂入つてる間にメールが来たのか。気づかないわけだ。2通のメールにはこう書かれている。

『夕緋ちゃんに家案内しきつていわれた。昼休みの話の続きもやるみたいだけど大丈夫？』

『あと3分で返事ないなら部屋上がってるからねー』

『悪い、風呂入つてた。で、なんで漫画読み散らかしてるんだお前らは。』

「夕夜が遅いから読んでた。」

「『ゴメンゴメン、後で片付けるから。そういうえば夕緋ちゃんとも連絡取れるようにしたほうがいいんじゃない？』

確かに、連絡を取り合えるようにしたほうが便利だ。神出鬼没な「イツのことだから別に要らない気もするが。

アドレス交換を済ませ、簡単に漫画を片付ける。そういうれば新刊来週発売だった気がする。

「……じゃあ、昼の話の続き。都市伝説 能力者、私たちにはある目的があつてそれがパンドラの箱とも深い関係があること。」

おそらくは昼休み（後半は授業中だが）に話した内容だと想つ。

俺がパンandlerの箱とか言われてる珍妙不可思議な代物を持つてゐるらしいおかげで能力者でお祭り騒ぎだ。当事者……いや、望んでも無いのに所持者となつた俺としては他所でやつてほしが。

「ああ」

「やっぱり危ないものなのかな?」

適当に相槌を打つて話を続けさせる。逢瀬も逢瀬なりの相槌を打つてくれている。分かりにくいが、夕緋も気にした様子は無い。

「パンandlerの箱は、私の予想の域を出ないけど……とこりのも、どんなものが私の知る範囲では誰も分からないし、知らない。だからこの予想が外れることがある。それを念頭において聞いてほしい。」

「パンandlerの箱は

「

災禍の幕開け 10（後書き）

受験が終わつて体が軽い w
さて、いつ三章に入るのやら・・・ w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5435v/>

勧哭の夕緋

2011年11月20日16時23分発行